々人達に話してはならぬ。話したら兩國民の反感が起るのは火を睹るよりも明らかであると考へた末、唯だ大統領だけに之を報告した。この報告を聞いた大統領は、熟考の後、この問題は英國の海軍々人や海軍省の人達と交渉するを止めて、ロイド・ジョージと直接に交渉せよと勸めた。

次でロイド・ジョージとダニエルス氏との會見となつた、ロイド・ジョージは云つた、

「世界が戰爭でなく道理の上に立つて行くべきものならば、海軍に關しては、英米兩國民が世界の海軍を指導せねばならぬ。英國は既に巡洋艦の建造を中止してゐる。故に貴下若し眞に國際聯盟を信ずるならば、アメリカの弩級艦と巡洋艦の建造を中止してもらわねばならぬ」

之に對してダニエルス氏は

「國際聯盟が活動することになりさへすれば、アメリカは軍備縮少の指導をなすことを辭せない。又然かすることが安全であらふ。然しそれが決定さるゝまでは、アメリカはそうゆう海軍協定を取結ぶことは出來ない。」

と云ひつゝ、

「アメリカの海軍計畫を放棄せよといふ貴下の提議は、英國が國際聯盟を支持する爲の先決條

件であるのか?」

と問ふた。

ジョージは、

「勿論そうでない、然しアメリカにして依然弩級艦の建造を繼續するならば、國際聯盟は沙上の樓閣となるだらふ」

と答へた。こゝでダニエルス氏は、英米海軍の噸數と造艦計畫の比較を始めたところ、「ジョージは、

「噸數は決定的の要素でない。然るに大砲は——殊にアメリカが十三隻の新弩級艦と六隻の巡洋戰艦に十六吋砲を積むならば——これ等の軍艦は世界最强のものとならふ。英國海軍省の數名の高官や海軍大臣が、わざ〳〵パリに來て、アメリカの造艦を中止させるよう、自分に强說しつゝあるのは、之が爲である」

と云つて、この話を外らした。そこでダニエルス氏も、ジョージとの議論を打切つた。

ダニエルス氏はこの交渉の顚末を大統領に告げたところ、ウキルソンは、次のように云へとダ

ニエルス氏に命じた。

「大統領は平和條約の綱領全部を運用する方法に就て非常に心配してゐる。そして平和條約の成果がどうなるかを見極めるまでは、軍備に關する如何なる取極めも結ぶことは出來ない」

ウキルソン大統領がこの決心をしたのは、一九一九年四月七日のことである。同日午後ダニエルス氏は英海相ロング氏を訪ひ、大統領の如上の決心を告げた。この決心は換言すれば、アメリカは平和條約が起草され、且批准されるまでは、海軍計畫を放棄することは出來ないといふのである。これでは英國としてもとりつく島はない。その結果海軍交渉は遂にもの分れとなつた。

英國側では、尙もアメリカをして造艦計畫を中止させようとして、ウキルソンの懐刀ハウス大佐を通じて大統領と交渉させた。卽ちロイド・ジョージはハウス大佐に向ひ、アメリカが英國海軍を追越すような措置を依然としてとるならば、英國としては國際聯盟を支持することは出來ないと云つて、ウキルソンの態度を緩和させようとした。恐らくこれはジョージがウキルソンに對して用ひ得る最良の武器だと考へたのであらふ。國際聯盟委員會の英國委員ロバート・セシル卿も亦ハウス大佐を通じて、大統領に海軍計畫を放棄するよう懇願した。だがこれも亦水泡に終つた。

とう〳〵お針は前外相グレー子へと廻つて來た。卽ちグレー子はロイド・ジョージの懇請により、この問題に就てウキルソン大統領と協議する爲め、一九一九年九月アメリカに渡つた。然るに〳〵緣がなかつたものと見へて、こゝでも又その目的を果さなかつた。これ一つには當時大統領が病の爲め、重大なる協議をなすことが出來なかつたのと、今一つには、當時大統領はアメリカの海軍擴張案を種に使ひ、自國民に向つて、國際聯盟に加入するか、又は世界第一の海軍を建設するかと、上院に向つて說きつゝある最中であつたから、時機が惡かつた爲でもあつた。

(Frederick Moore: America's Naval Challenge, pp. 22—23)

英國先づ驚る　アメリカは遂に國際聯盟への加入を拒否した。ウキルソンの狙つた聯盟加入の道具に利用せんとする海軍擴張案は、反對に大海軍論者の利用するところとなつて

アメリカは事實上世界第一の海軍國とならんとした。卽ち始めには英米同等を標榜したものが、次には英國以上の絕對優越の位置を得んとするようになつたのだ。こうして英米間にはいよ〳〵海軍競爭が始まらんとしたが、一九二〇年の末に至り、思慮深き米人間に自國の海軍政策の適否如何を再考する傾向が現はれて來た。云ふまでもなくこれは彼等が英國との海軍競爭を明らかに

意識した結果である。その結果輿論は海軍大擴張に伴ふ莫大な經費を削減する方へと傾き、議會も亦同樣の傾向を示したので、新艦の建造は遲々として進まなかつた。これを見た英國では好機乘ずべしとなし、出來るだけ公式の方法を以て、將來英國海軍は一國標準主義に讓歩する旨を二回までもアメリカ政府に確言した。そこでアメリカ海軍省も遂に折れて、嘗の海上絶對優越主義を捨て、英米同等主義で滿足することゝなつた。

この形勢に應じて起つたのが上院議員ボラーである。彼は政府に向て、主なる海軍國と海軍休日を協定せんことを勸告し、輿論も亦之に共鳴したので、ワシントン會議は遂に一九二一年十一月十二日を以て開かるゝことゝなつた。

英海軍　華府會議で、英國が三百年來の傳統たる海上の優越主義を放棄し、アメリカと同**の不平**　等にまで讓歩すると、已むを得ずとして一旦は諦めはしたものゝ、その苦痛は並大抵のものではなかつた。殊に海軍部内ではボツ〳〵と不平の聲が外に漏れて來た。例へば大戰中の海相であつたウエーミス提督などは、

現在のところでは、財政上の理由から、英國の海上優越權の確守は一時覓來ないとしても、他日必ずや

海上の制限は英帝國存立の氣に、多要缺く可らずとの主張が、是認される時代が再來するであらふ。

と云ひ、華府會議中の英國側專門委員中の明星とまで謳はれたチアトフキールド提督なども、我が海軍（豪州）提督に對して、

我が英國の歴史を見るに、一時はこうしたこともあるが、百年たゝぬ内に取戻してゐる。我々の子孫は今に取戻すよ。

と云つて氣にもかけなかつたと云はれてゐる。そこに英國海軍々人の負け惜しみが窺はれるではないか。

だが華府會議でフランスの反對の爲に、補助艦の制限が不成立に終ると、何人よりも先づ手を拍て喜んだのは英國海軍部内であつた。それもその筈、英國では例へ主力艦と航空母艦だけはアメリカと同等を承認しても、補助艦でアメリカ以上の勢力を持てば、全體に於ては從來の優越主義を保持することが出來るからである。華府會議後間もなく計畫され、一九二三年ボールドウキン氏の保守黨内閣時代に議會を通過した、所謂バークンヘッド五ケ年計畫と稱せらるゝ補助艦建造案はその結果である。

英國更に問す

列强の補助艦競爭が益々猛烈となり、アメリカはその爭ひに落伍したのを見た大統領クーリッヂ氏は、一九二七年にジェネバに日・英・米三國の軍縮會議を開き、補助艦競爭に止めを刺さんとした。

英國はこの會議を利用し、巧みに補助艦勢力に優勢を占めて、彼等の狙ふところの海上優越主義を取戻さんとした。即ちアメリカは巡洋艦に於て、大艦巨砲主義を主張するに對して、英國は小艦小砲主義を主張し、隻數に於てアメリカを凌駕すると共に、已に優勢なる商船隊を利用し、全體に於て補助艦の優勢を占めんとした。所謂二吋の爭ひ——アメリカの八吋砲に對して英國の六吋砲——はこうして起つた、そして双方互に譲らないので會議は遂に決裂した。

アメリカは怒り出した。そして英國に對する面當として、會議のすんだ六ケ月後には、五ケ年計畫、經費總額七億二千五百萬弗を以て、一萬噸巡洋艦二十五隻、驅逐艦九隻、潜水艦三十二隻、航空母艦五隻、計七十一隻の建造案を議會に提出して、全世界をあつと云はせた。

若しこの建造案にして實現するならば、アメリカの海軍力は遙かに英國を凌ぐことになる。然るに大戰の傷痍に苦しむ英國としては、海軍競爭を以てアメリカに對抗するを得ない。そこで英

國では巧みに之を阻止せんとして、柔よく剛を制するの策に出た。即ち前記の建造案がアメリカの下院に提出さるゝ直前、英國ではバークンヘッド案中の一部の建造を中止して、アメリカに對して海軍競爭の意志なきを示すと共に、有ゆる宣傳機關を利用して、アメリカの擴張案が無用のものであり、世界平和の爲にも大害あることをアメリカ人にまくし立てた。

この對策は確かに手答へがあつた。今や米國民中の思慮ある人士は、起つて右の擴張案に反對し、下院は之を三分の一に削つてしまつた。然るにこの削減案にしてもそれが實現するならば、英國の海軍力はアメリカの下に落ちる。そこでジョンブルは更に奥の手を出した。そしてバークンヘッド案中の一部の建造を更に中止して、これでもかと笑つてみせた。その結果右の三分の一修正案の運命もどうやら疑問となつて來た。

英國尻尾を出す

こゝまではジョンブルの外交は成功であつたが、間もなく尻尾を出し始めた。即ちアメリカに絶對優越主義を譲つたのを殘て憤慨しつゝあつた英國の大海軍論者達は、形式上ではアメリカに譲歩しても、實質的にはアメリカ以上の海軍力を保有する爲め、種々に頭をひねつた末、一九二八年三月には、ジェネバの軍縮會議に主力艦制限の提議をなし、又

同年七月には英佛海軍協定を結んで、アメリカに對抗せんとした。

この主力艦の制限といふのは、主力艦の艦型、備砲の口徑を縮少し、且その艦齢を延長せんとするものである。若しこれが實現するならば、英國は現に最新最鋭の世界一の超弩級戰艦ロドネー、ネルソンの二隻を有するから、アメリカの主力艦勢力は英國の殿後に落ちる。これがジョンブルの狙つたところであらふ。次に英佛海軍協定といふのは、英佛協同の力を以て、アメリカの對英海權爭覇に對抗するを目的としたもので、該協定の內容は、ご念入りにも、ジェネバの三國軍縮會議で英國が主張し、アメリカが反對したものを、そのまゝそつくりと失敬したものである。

ヤンキーは再び怒り出した。大海軍論者はそれ見ろ！　とばかりに太鼓をたゝいた。流石のクーリッヂ大統領も怒り出して、狂氣の沙汰としか受取れぬ軍備擴張讃歎の感傷的演說を試みるといふ始末。こうなつては稍は元に收らぬ。そこで前記した修正擴張案は、六十八對十二といふ大多數で上院を通過し、大統領之を裁可した。この修正案は、一九三一年七月一日以前に、八吋一萬噸巡洋艦十五隻、航空母艦一隻を建造するものである。

英米海軍　これを見た英國は、驚いて英佛海軍協定を放棄した。主力艦の制限提議も勿論も

協定成る　のにはならなかつた。そして英米兩國は暫らく睨み合ひの形となつた。

偶ま英國に於ては、海上優越主義に慣々たる保守黨內閣倒れてマクドーナルド氏の勞働黨內閣が成立した。人も知るように、氏は熱心なる親米論者であり軍縮論者である。恰もよしアメリカでもクーリッヂ氏は退いてフーヴァー氏新たに白堊館の主人となつた。マクドーナルド氏は機逸す可らずとなし、先づ英米海軍妥協を策する爲め、アメリカの脈をとつてみたところ、手答へがあつたので、マック首相自ら渡米してラピダン山莊にフーヴァー大統領を訪ひ、兩者の間に一の妥協案を作つた、英米海軍協定案がそれだ。

この協定案は、(1)英米間には全海軍力に關して均等を認めること、(2)日本に對しては英米の六乃至七割を與へること、(3)佛・伊に對しては英國の約半ばを與へ、英國をして歐洲方面では二國標準主義を維持せしむることを主眼としたもので、これを以て次で開かるゝロンドン會議の基礎工事としたものである。

こゝに至て英國は完全にアメリカの前に屈し、從來の絕對優越主義を捨てゝ、全艦種に亘りアメリカとの均等主義を承認した。ロンドン條約は之を基礎として成立したものである。

三　二國標準主義の末路

上說するように、世界最大海軍國の二つを合せた海軍力即ち二國標準主義を標榜して、世界に君臨して來た英國は、ワシントン會議を轉機として、アメリカとの均等主義即ち一國標準主義に讓步したが、歐洲方面に於ては、依然として二國標準主義、即ち佛・伊の海軍力を合せたものを保持せんとした。だがこれも亦前途は疑問となりつゝある。こゝにはこの間の事情を說いてみよう。

佛伊協定不成立　ロンドン會議に於て、佛・伊兩國の合計海軍力を保有せんとする英國の企圖は、佛伊間の協定が不成立に終つた結果として全く水泡に歸した。

この會議に於ては、フランスは自國の保有すべき海軍力として、七十二萬四千噸といふ驚くべき數字を要求した。これを英米の割當噸數と比較すれば八割六分乃至八割八分に當り、日本の要求した七割よりも遙に大である。そしてフランスは、自國の安全を保障してくれる條約が出來なければ、右の噸數は一噸たりとも引下ぐることは出來ないと頑張つた。然るにフランスの望むよ

うな安全保障條約は、英も米も承知せない。他の一方に於て、フランスはイタリー以上の海軍力を要求したが、これは對佛均等を主張するイタリーが承知せない。こうゆうわけで、ロンドン會議では、佛伊の海軍協定は不成立に終つてしまつた。英國の二國標準主義がものにならなかつたのは無論である。

英佛伊協定成　その後英國では如何にもして佛伊協定を成立せしめようとして、幹旋大に努めた。

そして一九三一年三月遂に英・佛・伊間に一の海軍協定案を作り上げた。これによれば、フランスは、ロンドン會議で主張した七十二萬四千噸の要求を讓步して六十七萬噸で折合ひ、イタリーは對佛均等の要求を放棄して、フランスに約二十三萬噸の優勢を許すことにした。この佛伊兩國の合計海軍力は略ぼ英國のものと同等であるから、これでは英國は歐洲方面で二國標準主義を維持することになる。

然るに好事魔多く、すら〳〵と進捗した右の協定も、佛伊間に意志の疎通が充分でなかつた爲めに、忽ちにして停頓した。詳言すれば、協定に規定がない艦齡超過の代艦建造は、フランスは一九三六年以前に起工して差支へないと主張するのに、イタリーは絶對に之を認め得ないとい

のである。そうしてこゝでも亦前國聞に衝突が起つて、折角出來た協定も反古になつてしまつた。その結果英國の二國標準主義の實現は又々頓挫した。

二國標準主義の將來

然らば二國標準主義の將來は如何？　これが次に殘された問題である。

元來二國標準主義なるものは、對手國の國家としての獨立權を認めないものであり、英國獨り他國の上に君臨せんとする時代遅れの思想である。況んや軍縮會議を開いてより大なる軍縮を實行すればする程、二國標準主義は侵越國に益々大なる侵越力を與ふる反對に、相手國には益々貧弱なる軍備を與ふることゝなり、獨り利益を受くるものは右の侵越國のみとなる。日本が今次のロンドン軍縮會議に、英米との均等海軍を要求して一歩も枉げなかつたのも、かゝる理由に基くものである。

公平にいへば、各國の保有する兵備權は同等であり、之に差別を附すべきものでない。故に軍縮には各國ともに共通の最大兵力量を定め、何れの國も之を超過するを許さないと共に、各國は各々その範圍内に於て、内外の事情や財政狀態等を顧慮して、或程度の自制的海軍力に滿足するのが最賢明の策である。

以上の理由により、英國に二國標準主義を許すことは、道德上許す可らざる罪惡であり、佛伊は勿論日本としても之を默過するを許されない。されば次の軍縮會議に於ては、かゝる主義を打破する爲め、佛伊に一臂の力をかすことは、日本としても當然の責務であり、そうしてこそ世界の平和は保ち得るのである。況んや次の太平洋會議に於て、英國の對日策動を封ずる爲にも、かゝる問題を提げて英國に水をさすのは、日本にとつての一策であることを思へば、この方面からも之を輕視するを得ないであらふ。

更に考へねばならぬのは、日本が英米との均等海軍力を要求した結果である。若しそうなれば佛伊も英米と均等を主張し、結局五大海軍國は均等の海軍力を有することにならねば解決はつくまい。五大海軍國の均等は換言すれば英國の二國標準主義の自殺を意味する。即ちこの方面からも二國標準主義は末路に近づきつゝあるのである。

所詮英國の二國標準主義は、末路に近づくの外はない。これが自然の成行である。

かくて獨逸との海戰に於て、鼎の輕重を問はれた英國海軍は、次で現はれたアメリカ海軍の爲に、遂に海上の絶對侵越主義を放棄したが、歐洲方面に於ける二國標準主義も亦、近き將來に於

て之を放棄せねばならぬ運命に迫りつゝある。即ち英國海軍も亦、榮枯盛衰、生者必滅の天地の理法の前には如何ともするを得ずして、とん〳〵拍子に下り坂を下りつゝあるのである。

然らばその次に來るものは何か？　日本との戰爭か？　日英戰つて英國は果して必勝の算があるか？　これは興味ある問題ではあるが、我等は今暫らくこの問題に觸ることを止めて、次には英帝國の苦悶が何れの邊にあるかを檢じてみよう。

第五章　地中海か太平洋か？

一　英艦隊勢力の東漸

英國の弱點　英國を屈する最良の手段はその弱點を衝くにある。然るに幸ひなる哉、その版圖內に太陽沒せずと豪語する大英帝國は、この點に關しては憐むべき程重大なる弱點を暴露してゐるのである。

何人も知るように英國は他給他足の國である。即ち英本國に產出する食料品ではその國民を養ふに足らず、必ずや海外から必要なる食料品、原料品を輸入し、精製品を海外の市場に輸出して國民の生活を支へるでなければ、國家の生存は覺束ない。事情かくの如くであるから、毎週英本國に輸入さるゝ食料品は六百萬噸、原料品の輸入も亦二千萬噸に上り、之が爲には毎日三千噸以上の商船約千四百隻は海上を航行し、他の千四百隻は、世界到るところの港灣に於て、荷物の積卸しをなしつゝあるのである。されば重要なる海上交通線の安全を確保することは、英帝國にと

つては眞に緊要缺ぐ可らざる條件であつて、一度これが杜絶したならば、國民は飢死か降伏かの何れかを選ぶの外はない。さればこそ獨逸はこの動脈とも云ふべき海上交通線を杜絶せんか爲めに、不法なる潛水艦戰を斷行して、將に成功せんとしたのである。

四つの　かように英國の商船が航行しつゝある全航路は約八萬浬に及んでゐるが、その中

航　路　には動脈ともいふべき四つの航路がある。(1)北米航路(2)南米航路(3)アフリカ航路

(4)太平洋航路(5)歐州航路がそれだ。就中太平洋航路は地中海とスエズ運河を經て印度洋に至り、それより二分して、一は東洋方面に、他は濠洲及新西蘭に至るもので、五つの航路中、英國が最も重視するものもこの航路である。これ一つには、英帝國の寶庫と云はるゝ印度や、最大の貿易額を有する濠洲、新西蘭がその中にあるのと、今一つには、無盡藏の富源と多數の顧客を有する世界經濟戰の最も猛烈なる戰場たるべき支那が、その中に含まれてゐるからである。

英國海軍省內貿易課の調査によれば、一年中の任意の日に於ける船體及積荷を含む英國の海上全貿易價格は、印度方面八千百萬磅、濠洲方面五千萬磅、支那方面二千六百萬磅である。如上の各方面より英本國に輸入さるゝ主要物品の百分比は、茶及黃麻各々九十七、粗製亞鉛九十六、ゴ

ム九十、羊毛八十九、硝酸曹達八十六、大麻七十七、滿俺磺七十六、錫七十一、米六十三、乾酪及びバター五十、その他多量の冷肉、食物、工業用油等で、外に二十五%の石油も、この方面から輸入されつゝある。(Bywater: Navies and Nations. p. 86)

〔註〕

(1) 英國對各地方輸入貿易百分比表

年次＼地方別	アジヤ	オセアニア	北米	南米	歐洲
一九一三	三一・五	五三・四	一六・八	二七・九	八・四
一九二五	一九・九	四六・〇	一一・二	二一・二	八・七
一九二七	二八・五	四三・二	一〇・三	一八・六	七・九

(2) 英國對各地方輸出貿易百分比表

年次＼地方別	アジヤ	オセアニヤ	北米	南米	歐洲
一九一三	一六・〇	五二・一	二七・六	二三・七	一二・八
一九二五	一二・五	五二・四	二四・八	二〇・〇	一三・九
一九二七	一三・八	四四・二	二〇・五	一九・五	一三・九

艦隊の配備

以上の事實を簡潔に書きつゝ、次に掲ぐる艦隊の配備表を見る時は、英國が如何なる點に海軍戰略の重點をおきつゝあるか、換言すれば、英國の惱む弱點は何れの方面に於て最大であるかを容易に知ることが出來よう。

次表は本年度に於ける英國艦隊の主なる配備を示すものである。

英國艦隊配備表

名稱	主なる配備軍艦	根據地
本國艦隊	艦隊旗艦(戰艦)一隻、戰艦戰隊(一隊)三隻、巡戰艦隊(一隊)二隻、巡洋艦戰隊(一隊)四隻、水雷戰隊(一隊)巡洋艦一隻、駆逐艦二十七隻、潛水戰隊(一隊)母艦一隻、駆逐艦一隻、潛水艦六隻、航空母艦一隻等	本國諸軍港
地中海艦隊	艦隊旗艦(戰艦)一隻、戰艦戰隊(一隊)四隻、巡洋艦戰隊(二隊)八隻、水雷戰隊(一隊)巡洋艦一隻、駆逐艦二十七隻、母艦一隻、潛水戰隊(一隊)母艦一隻、駆逐艦二隻、潛水艦五隻、航空母艦一隻	ジブラルター モルタ

支那艦隊	巡洋艦戰隊(一隊)六隻、駆逐艦隊(一隊)、駆逐艦九隻、潛水隊(一隊)、駆逐艦一隻、潛水艦十五隻、母艦一隻、航空母艦一隻	香港
北米及西印度艦隊	巡洋艦戰隊(一隊)五隻、母艦一隻	バーミュダ
アフリカ艦隊	巡洋艦戰隊(一隊)一隻、母艦一隻	サイモンスタウン
東印度艦隊	巡洋艦戰隊(一隊)三隻	コロンボ
濠洲海軍	巡洋艦四隻、駆逐艦十隻、母艦一隻	シドニー
新西蘭海軍	巡洋艦二隻、母艦一隻	オークランド
カナダ海軍	駆逐艦四隻、母艦二隻	エスカイモルト

艦隊勢力の東漸　世界大戦前英獨の關係が緊張すると、英國は日英同盟を利用して、極東方面から有力なる軍艦の數隻を本國に引揚げ、又英佛協商を利用して、地中海方面は之をフランスに委任しつゝ、同方面の艦隊をも之を本國に引揚げた。その結果本國艦隊は世界最強のものとなつたが、大戦終つて獨逸艦隊が全滅すると、この本國方面に集中された艦隊を如何にするかゞ當面の問題となつた。

戦後の數年間、英國はこの問題に對して右するか左するかに迷ふた。即ち依然艦隊の重點を本國方面におくか、又は海上貿易路の安全を確保するため、必要なる方面に分派するか、二者何れをとるかを容易に決せなかつた。凡そ海上交通線の安全を確保するには、之を脅かさんとする敵海軍力の中堅を覆へすを以て最良策とするも、獨逸潜水艦戦の經驗からみれば、これは必ずしも期待し得べくもない。こうゆう理由から、英國では種々に研究した末、海軍力の重點を本國方面におくよりも、寧ろ海上貿易路の安全を確保する方におくのが賢明なりと考へらるゝに至つた。かの地中海艦隊を増勢すべしとの意見は、かゝる考への自然の結果である。

前に掲げた艦隊配備表を見る時は、英國艦隊の重點は本國及地中海方面におかれ、これに次で

東洋方面が重視されて居ることがわかる。この地中海艦隊は、平和克服當時には六隻の戦艦、六隻の輕巡洋艦、十六隻の驅逐艦から成つた。然るに英國海軍省が太平洋方面に至る貿易路の保護上、地中海艦隊の勢力を増大する必要を考慮しつゝあつた時も時、一九二二年に至り、近東の形勢は一變し、英土の關係は緊張したので、遽かに該艦隊の増勢を實行した。その結果戦略上の中心はこゝにいよ〳〵東進して地中海に移ることゝなつた。

だがこの艦隊勢力の東進には他にも亦重要なる一要素があることも忘れてはならぬ。前章にも說いたように、獨逸に代つて現はれた英國の勁敵はアメリカであるから、英米間に或種の海軍競爭が持續する限り、英國は大西洋方面を輕視するを得ない。幸にもワシントン會議は開かれ、英米の海軍競爭は當分の間之を避け得たので、英國はその艦隊の主力を大西洋から地中海方面へと移すことが出來た。

二　地中海と英帝國

英國と太　英國海軍勢力の重點が東漸して、地中海が最も重要なる戦略上の中心となつたの

平洋航路　は何の爲か？　これに就ては前節に少しく說くところがあつたが、英國の弱點を知る爲には、尙一層詳說する必要がある。

前にも述べたように、太平洋航路は、英國にとつては、その生命線ともいふべき重要の意義を有するものである。蓋しその中には、英國の寶庫と云はるゝ印度があり、貿易額に於て斷然一頭地を拔くオーストラリヤがあり、又將來の有望なる經濟戰場たる支那があるからだ。故に若し英國から地中海を經て印度、濠洲、東洋に至る海上交通線を、印度の東方なる或點で切斷するならば、英帝國は勢ひ孤島の外はないであらふ、又若し印度の西方で切斷したならば、英國は恰も絞殺されたものゝように、死滅するの外はないのである。

就中印度は英國にとりては絕對に缺ぐ可らざる生命線である。印度人は至て貧しきも無數の人口を有し、且未開の國內產業をも有するので、英國の商品に向ては缺ぐ可らざる市場を供給するのである。英國にある數百の會社は、印度へ向ふ商品の製造に從事し、その實業家の大なる富と勞働者の繁榮並に生存も亦印度に負ふところ極めて大である。事情かくの如くであるから、我が商品の進出に對して、英國が驚異の眼を見張り、その防遏に全力を盡しつゝあるのも尤もな次

第である。

果して然らば、英國が殊に重要なる太平洋航路を保護せんとして、頻りに努力しつゝあるのは敢て驚くに足らない。西は地中海の西端ジブラルタルより、東は香港、威海衛に至る一連の海軍根據地は、英國の政治家や軍人達が、この貿易路を管制保護するに必要なる足場を準備せんとして、孜々として怠らなかつた努力の跡を示すものである。

然るにこの太平洋航路の安全を確保せんとならば、先づ地中海の海權を握ることが先決條件である。何となれば、一度地中海の海權を失つたならば、英國の商船は遠くアフリカの南端を迂回するを餘儀なくされ、その結果は非常なる損失となつて現はれて來るからである。かゝる理由あるが爲に、英國は過去の二世紀間、地中海の海權を握るに全力を盡して來た。トラファルガーの海戰前、英國は只だ一度この方面の海權を失つたが、烱眼なるネルソンは、同海戰に己を犧牲として之を回復した。爾來地中海上に於けるユニオン・ジャックの優越權は、依然として英國の手に落ち、何國も之に向て一指をも染むるを得なかつた。

地中海　だが、英國にとつて如何に地中海が重要であるかは、以上の說明のみで盡きるも

と英佛　のでない。そこにはフランスとの關係もあることを忘れてはならぬ。

嘗ては協商を結んで獨逸に當つた英佛兩國は、大戰の終結と共に、又々元の仇敵關係に立還らざるを得なかつた。英佛兩國が共同の敵を失つた場合、如何に重大なる利害の衝突を惹起するかは、今更めて說くまでもない。こゝには所謂「合せもの離れもの」の語を想起すればそれで充分である。かゝる利害の衝突は、勢ひ英國として、フランスに備ふる爲め、有力なる艦隊を地中海方面に配備するを餘儀なくした。

然るにフランスにとつては、對岸アフリカの植民地は、次の戰爭の場合、不足せる人力を補ふ爲に絕對に必要であるのみならず、北アフリカ、近東、極東並に世界の殆んど總ての方面に至る航路は、マルセイユを中心として恰も扇の骨のように走つてゐる。かゝる關係があるから、フランスとしては、マルセイユを頂點として、佛領モロッコの西端にあるオーラン港、その遙か東方にあるチュニスのビゼルグ港を底邊とする三角形內の海面は、自國の海軍を以てその海權を握るでなければ、アフリカ土人軍の招致は不可能となる。

フランスにとつて重大なる意義をもつ、この三角形內の海面を橫斷するものが英國の地中海航

路である。されば英國にしてこの航路の安全を期せんとならば、相當有力なる艦隊を割て地中海方面に配するの外はない。英國艦隊の重點が地中海方面に移動した一の理由はこゝにある。

若しもジブラルタルとモルタに有力なる英艦隊を配備するならば、右の三角形內の海面は絕へず脅威され、それだけ英國の地中海航路は安全となる。英國が有力なる地中海艦隊を配したのは、同方面にあるフランス又はイタリーの艦隊に拮抗するを目標としたもので、事實上の勢力も亦これを目標として定められてゐる（卷頭附圖參照）。こうゆう事情があるから、英國としては佛伊兩國の合計海軍力卽ち二國標準主義を維持することは、地中海方面の貿易路の安全を保つ上からも絕對に必要である。然るにこの二國標準主義は既に時代遲れであり、他國の獨立を脅威することは上述の如くである以上、かゝる主義の放棄は勢ひ英國に至大の苦痛を與へずにはおかぬ。英國の惱みの一はこゝにある。

佛の脅　フランスは、英國からのこの脅威に對せんが爲め、これまで種々に心を碎いて來た。優勢なる主力艦を基幹とする艦隊を備へて、之に對抗することは望ましきことではあるが、フランスの財政は之を許さない。そこでフランスでは主力艦に重きを置くことを

止めて、快速巡洋艦や良好の武裝と耐波力を有する水雷艇、潜水艦等の奇襲艦艇に全力を注いだ、その目的とするところは、有力なる空軍の援助の下に、これ等の輕艦艇を以て、本國とアフリカ植民地間の海上交通を安全ならしむるにある。フランスは又大洋航行型の快速巡洋艦や大型潜水艦の多數を建造しつゝある。云ふまでもなくその目的は、外海に出動して、英國その他の海上交通を脅威するにある。

フランスは又優勢なる空軍を備ふることに依て、英國艦隊の優勢を覆へさんとしつゝある。空軍の發達が今日の海軍戰略を根本的に變更し得るか否かは今遽かに豫斷を許さないが、これあるが爲に作戰上に或種の改正を施さねばならぬことだけは確かである。例へば劣勢の艦隊を有するも優勢の空軍を有する國は、附近海面の廣大なる地域を管制し得るから、航空機の行動半徑内に於ける海上交通線を確保し得ることは明らかである。かゝるは特に比較的近距離に資源の供給地を有する佛伊兩國にとりては重要なることで、前者はアフリカ、後者はアフリカ及近東より、かゝる資源を得つゝある。故に地中海方面に於て、英國以上の優勢なる空軍を有する時は、英國の地中海航路を脅かすに便利なるのみならず、又これ等資源の供給にも都合がいゝ。

地中海は水深大なるが故に殊に潜水艦戰に適してゐる。この水深の大なることは、對潜水艦戰即ち機雷を敷設して潜水艦を爆破せんとする英國の企圖を水泡に歸するものである。嚮の世界大戰中獨墺兩國の潜水艦は、その根據地より數百浬に出動し、僅かに十隻を超へない少數を以て、英・佛・伊諸國の海軍を無視しながら、一九一七年の末までに、地中海方面に於て毎月十五萬噸の比例を以て聯合國の船舶を撃沈した。果して然らばフランスが孜々として潜水艦を建造するを見て、英國が曷如たる能はざるは極めて自然である。これ等の潜水艦は、要すれば攻勢をとりて、印度に至る航路を遮斷しつゝ、英帝國の安全を脅かすことも出來る。フランスの下院議員ケルゲゼック曰く、「潜水艦は神聖なる武器である……フランスにして二百五十乃至三百隻の潜水艦を有する暁には、我々は後顧の憂なく將來を豫期するを得る」(Annales de la Chambre des Députés 110 號參照)と。ロンドン會議に於て、フランスが九萬九千六百噸の潜水艦を要求し、その後に出來た英・佛・伊海軍協定でも尚八萬二千噸以下に低下するを肯んぜないのは、かゝる理由に基くものである。

〔註〕 ロンドン條約による日英米の潜水艦保有量は五萬二千七百噸で、日本はこれを七萬五千噸まで增

加せんことをジニネバ一般軍縮會議に提議してゐる。

地中海　英伊の關係

も亦表面親交を装ふものゝ、地中海に關する限りに於ては、互に敵對

と英伊

の關係にある。何となれば、モルタが英國の海軍根據地として現存するのは、こ

れ明らかにイタリーに對する脅威であるからだ。英國は同島にある艦隊を以て、要ずればイタリ

ーにとり有益なるアフリカ植民地トリポリをイタリー本國から遮斷することも出來る。のみなら

ずイタリーに於ける國家主義者連の間には、モルタの人民は、血と言語に於てイタリー人である

から、寧ろイタリーに復歸すべきものであるとの感念が高い。

一九二五年に開かれた米國ウキリヤムスタウンの國際政治協會に於て、ファシストの上院議員

アントニオ・シピコ伯が、伊國代表として述べた次の演說は、地中海に關する這般の事情を裏書す

るものである。

イタリーは、地中海に面する他の大國等と異り、恰も一の棧橋のように、該海の中心に突出し、恰もそ

の總ての沿岸は該海に依て洗はれて居る。我國の自由も生存も、ジブラルタルとスエズの關門を握り、國

民的必要に出づるよりも寧ろ帝國主義的野心を滿足せしめんが爲に把握する、モルタとサイプラスの所有

者（譯者曰英國を指す）の好意に依賴してゐるのである。されば若し地中海の關門を扼するものが、我國

に向つて突如敵對行動をとり、これ等の關門を閉鎖するに於ては、現代文明國民の生活に至緊至要なる穀

物、石炭、石油、鉄及總ての原料品の供給は杜絶され、四千百萬の國民は、數週日を出でずして餓死する

の外はない。

地中海は今やイタリーの死活に關する重大なる問題である。イタリー政府及その國民の行動と企圖とを

指導するものは、我國よりも一層大なる面積と戰略上の安全を有するところの他の富める諸國民に見るよ

うな帝國的野心又は國家的利己心の問題ではない、否我が國民の政治的經濟的生活を安全ならしめ、行動

の自由を確保し、併せて益々增加する人口と工業品の爲に、適當なる捌口を得んとする、緊急缺く可らざ

る必要に應ぜんが爲である。

現在の政治的事情に照らしてこの問題を攻究すれば、或は平和的解決手段を見出すことが出來るかも知

れない。(It may be possible to find a peaceful solution)

シピコ伯の演說に於ける最後の一句は注意するの價値がある、何となればそれは文法上覆面せ

る一の脅威であるからだ。彼はこの問題が平和的に解決されんことを望む(will) とも、解決され

ねばならぬ、(Should) とも、又は解決され得る (Can) とも云はずに、解決し得るかも知れぬ (may be) といふのである。

イタリーの海軍根據地も亦、英國の地中海航路に對して脅威を與ふるものである。就中サルヂニヤとシヽリーは、恰もオーランに於けるフランスの根據地と同樣、印度に至る航路に近く横はり、伊國潛水艦の根據地となるものである。併しながら英國にとり、それよりも一層大なる不利は、印度に向ふ英國の商船は、シヽリーとアフリカ沿岸との間にある僅か百浬ばかりの海上を航行することで、この邊は地中海中水深の小なるところであるから、機雷を敷設して右の商船を阻止することが出來る。

地中海は嘗て羅馬の湖水であつたといふ歴史的聯想は、イタリー人をして地中海を支配する特權を有するものゝように考へしめ、彼等は之を呼ぶに「我海」(il mare nostro) を以てするに至つた。地中海に至緊至要な利害關係をもつイタリーが、かゝる執着心を起すのは無理もない。だが同樣地中海に重大なる關係をもつ英佛の存在は如何ともするを得ない。こゝに地中海に於ける三つ巴の爭覇戰がある。

英國と蘇士運河　地中海方面に於て、英國が最大の利害關係をもつものはスエズ運河である。該運河の英國に於けるは、パナマ運河のアメリカに於けるよりも一層重要である、若し一朝他國の手に歸するか又は一時的にも閉塞さるゝに於ては、英帝國の背梁骨はこゝに全く破摧し、印度は勿論太平洋自治領の運命も亦危殆に瀕すること、なる。

かようにこの運河は、英帝國にとりては緊要缺ぐ可らざるものであるが、同時に又英本國と印度とを連接する長き連領の最弱點であることも忘れてはならぬ。ジブラルタルは萬一敵に占領さるゝことがありとしても、多くの場合に於ては之を奪回するを得べく、從て地中海の西の關門は英國艦隊にして全滅せざる限り、閉鎖さるゝ憂ひはない。モルタの海軍根據地は之を失ふとも英國の死活に關する程のものではない。否地中海にある英國艦隊は、例へ之が爲に多少の不便を蒙るとしても、尙行動の餘地は充分にある。英國は他日或は自ら進んでサイプラス島を放棄するかも知れない。然るにスエズ運河に至てはこれ等と大に趣を異にしてゐる。のみならず該運河は輕快なる一小遠征部隊も、一時的にはこれを占領することも出來れば、飛行機の空中攻撃により、船舶の通航を困難ならしむることも出來る。或は又不意に商船を沈めて之を閉塞することも出來

る。然るに運河地帯の防備は、これをパナマに比すれば雲泥の差があるから、如上の諸手段は比較的容易に成功の望みがある。

英國がエヂプトを把握し、パレスタインやイラクに委任統治領を設けたのは、スエズ運河の防備を安全ならしめんとする遠大なる計畫の結果であるや無論である。

世界大戰前までは、土耳古帝國は海陸兩方面から印度を防禦してくれた一の大なる稜堡であつた。土耳古は他國を攻撃するにはその力不充分であつたが、然も尙大戰の數年前までは、他の强國をば已に手を觸るゝを得ざらしめ、その結果は印度の安全を保つを得た。然るに大戰の結果古き土耳古は消滅し、近東の形勢は一變したので、英國は自力を以てスエズ運河の兩岸を支配し、かくして既往に於ける獨算兩國が、海陸兩方面から、印度又は印度に至る航路を脅かさんとした脅威を、未然に豫防せねばならぬ立場となつた。英國がエヂプトの獨立を認めながらも、尙その軍隊を同地に駐屯せしめ、又大戰中逸早くもパレスタインとイラクを占領し、之を委任統治領としたのもかゝる理由に基くものである。

況がエヂプトは英國にとつては火中の栗である、エヂプト人は眞の獨立を望んで已まない、況

んや世界最大の回教國が基督教國に支配せらるゝを屑しとせない感情問題も運河の兩岸にあるのである。果して然ちばスエズ運河の兩岸は、國際的不和を煽動するに好適の地であるや疑ひない。

英國の惱みはこゝにある。

英國と海峽問題　最後にダーダネルス及ボスポラス海峽問題も亦君府問題と共に、英國の惱みの一つである。

この海峽は黑海に瀕する諸國の富源に達する唯一の通路であるのみならず、黑海と裏海との中間にある油田に達する爲にも、或は又アジヤ方面への有ゆる陸路に達せんが爲にも、唯一の通路となるところである。こゝに云ふアジヤ方面への陸路と云ふのは、嘗ては無數の隊商が列をなして通過したところで、今日では飛行機や自動車が之に代つて昔の面影をしのびつゝある。

更にこの海峽問題を價値づけるものは、この海峽が暖水に出でんとするロシヤの狙ふ水路の一つであることだ。目下ロシヤの黑海艦隊は、凋落して見る影もないが、他日若し有力なる艦隊が置かるゝならば、海峽問題は又々持上つて來るであらふ。トロッキーは嘗て陸軍大臣時代、次のように斷言したことがある。

君府と海峡に關する問題は、帝政時代の政策中、稀に見る當を得たものゝ一つであつた。吾人は世界に對して、海峡と君府を必要とすることを宣言せねばならぬ。

彼は之に滿足ぜずして尙蛇語を附加した。曰く、

例へば英佛兩國が、大戰中の約束――譯者曰、君府と海峡をロシヤに與ふるとの密約――を反古にして、吾人に對して反對するとも、海峡が早晩必ずや吾人の手に落つるを確信する。

と。この宣戰の布告とも云ふべきロシヤの宣言は、將來いつかは事實となつて現はれて來る日があるであらふ、

英國はロシヤのかゝる企圖に對して無關心なるを得ない、何となれば、ロシヤ艦隊は突進してスエス運河に迫ることが出來るからだ。バルカンの諸小邦も亦等しくこの海峡に利害關係をもつてゐる。されば一九二三年に調印された海峡自由通航の制度が、ロシヤ海軍の復興又は列强勢力の消長如何によつて變動を受ける場合が起るならば、その時こそ英國は最大なる被害を蒙るであらふ。さればこそ英國の政治家達は、海峡問題が起る度毎に神經過敏となるのである。

英國と土耳古　英土の關係も亦表面親善を裝ふものゝ、裏面には猛烈なる反英感情が、土耳古人

土耳古の血管に流れてゐる。　歐洲大戰中西歐諸國の中で土耳古と戰を交へたものは主として英國であつた。英國がスエズ運河の安全を期せんが爲め、メソポタミヤ、パレスタインに遠征軍を送るや、これと戰つたものは土耳古であつた。ダ海峡戰を斷行してダーダネルスに上陸し土軍と戰つたものも英軍であれば、一九一九年スミルナに上陸した希臘軍を援助し、土軍と戰はせたのも亦英國であつた。その三年後に希臘軍が大敗した時、最後まで希臘を支持したものも亦英國である。加ふるに久しく英土間の懸案であつたムスール事件が、一九二六年遂に英國側の勝利となつて現はれた時には、著しく土耳古人の反英感情を刺戟した。さればこそ土耳古は、反英的なサヴエト・ロシヤに近づいたのだ。かゝる歷史的背景をもつ英土の關係は、今日に於ても決して良好と云ふを得ない。

ローマとカルセージ　以上は、地中海を繞る諸國と英國との關係を略叙したものである。これに依て見る時は、往昔ローマとカルセージが、互に優越を爭つた地中海といふ水路に關して、現在も尙沈默の爭ひが續けられつゝあることがわかる。各國民は何れも皆その生存がこの水路に於ける權力の如何に關すると信ずるから、相競ふてかゝる權力を增さんとして、暗鬪明鬪が

走馬燈のように繰返へされつゝあるのである。現在に於ては、英國の侵越なる海軍が、この水路に獨り優勝を占めて居るが、かゝるは地中海の波によつて洗はるゝ總ての國民に無言の憤怒を與へてゐる。これ等の諸國民は己の力を以て、己のものと信ずるところの水路を支配せねばならぬと考へて居るのである。

世界大戰中、英國は獨逸の潜水艦戰の爲に、一時は地中海の海權を失つた。若しもイタリーが聯合國側に與みすることを止めて、依然中央同盟側に對する誓ひを守つたならば、英國の海權喪失は尙重大なるものとなつたであらふ。英國の海上侵越は再び脅かさるゝ機會なしとも限らない、若しかゝる時機が到來したならば、今日では包まれてゐる憤怒も、明日は爆發することなしとも限らない。

この警告を聽け！　日本國民は這般の事情を會得することが極めて肝要である。歐洲方面に一沫の暗雲が漂ふ限り、英國はその艦隊の大部を太平洋方面に廻航することは出來ない。將た又日英相戰ふ場合、地中海を繞る諸國中に一二の親日排英國があり、場合によつては積極的行動をとるも辭せざる態度を示すか、又はエヂプト、土耳古、アラビヤ諸國が、積年の憤怒を晴

らさんとして、英國に對して蜂起するならば、英國は結局日本と戰ふを得ない。（以下八行削る）

せめては土耳古との親交を厚ふせよ、ロシヤに對する無暴なる挑戰的態度を愼め。そして英國に對する共同の友邦とせよ、エヂプトの獨立運動に好意を示せ。フランスとの親交が回復の見込みないならば、これ等は當然に選ばねばならぬ次善の策であることを、我國民はこの際殊に銘記すべきであらふ。

三　英國の海軍根據地

然らば大英帝國及目治領を守り、併せて全世界に亘る海上貿易路を擁護すべき艦隊が、活動の源泉となる海軍根據地の現狀はどうか？　本章に於ては、主として英本國、大西洋、地中海方面のものを述べ、印度洋及太平洋方面のものは、之を次章に說くことゝしよう。

英本國及附近　英本國の周圍には、幾多の軍港、要港等が、殆んど不必要と思はるゝ程度に、棊に備へんが爲で、ナポレオンが英國の侵寇を企てゝ以來、英人が如何に神經過敏となつたかを示す好個の實例である。

先づ首都ロンドンを洗ふテームス河を眺めてみよう。その河口にはチャタムとシャーネスの兩軍港があつてロンドンを守り、更に南下してドーバーの海角から英海峽に入れば、東より數へてポーツマウス、ポートランド、プリマウス、デボンポートの四軍港が海峽を管扼してゐる。就中ポーツマウスは海峽防備の中樞であり、海陸の防備施設も亦完成してゐる。

ドーバー海峽からイングランドの東岸に沿ふて北上すれば、モーレー海門の口にはクロマーチー、エヂンバラ附近にはロサイスの軍港があり、スコットランドの北東に横はるオークネー島のスカパ・フローと共に、北海を守る重鎭である。

更にアイルランドに渡れば、その南岸にクキンスタウン、ホルボーリン、ベレハーベンの三軍港が、相連つてアイルランド水道を扼してゐる。

空軍の發達　前說するように、これ等の海軍根據地は、敵の侵寇に對するを主なる目的とした。

然るに獨逸海軍が全滅した今日、歐洲の何れの海軍國がかゝる侵寇を企て得るかといふに、空軍の發達は、かゝる企圖を非常に困難ならしむることが判つて來た。卽ち英國の優勢なる空軍に、適當の隻數よりなる潛水艦を附して之と協同せしむる時は、外國軍の侵寇の如きは、全然不可能にあらざるまでも、殆んど不可能に近いことが判つて來たのである。この結果として海軍の擔ふ本國防禦の重大なる任務は、或程度にまで輕減することゝなつた。

だが空軍の發達は、他の一方に於て英本國に對する空襲を容易ならしむることも忘れてはならぬ。航空機の行動半徑と攻擊力とが極めて幼稚であつた這般の世界大戰に於てさへ、チャタム、

シャーネス、ドーバーのような英國東岸の海軍根據地は、屢々敵航空機の烈しい攻撃にあつた、もし當時獨逸が今日のように發達した航空機の多數をもつてゐたならば、これ等の根據地は恐らくは守りを失つたであらふ。主なる海軍工廠の所在地なるポーツマウスとデボンポートは、フランスの海岸から各々七十二及百十浬の距離にあるから、何れも空中攻撃の容易なる距離内にある。されば英國に對する將來の攻撃は主として空中作戰が主なる手段となるべく、英國が大陸諸國殊にフランスの空軍擴張に神經を尖らしつゝあるのもこれが爲である。

地中海のモルタ　轉じて地中海方面を見よう。そこには地中海の西の關門と云はるゝジブラルタルがあり、更に東すればシ、リー島の南方モルタ島にはモルタの軍港がある。このモルタは世界大戰中我が遣歐枝隊が、こゝを根據として活動したところである。

地中海艦隊の主根據地たるモルタは、英本國を距る二千浬の距離にあり、シンガポール軍港の施設が完成するまでは、太平洋方面に至る通路上、大型の主力艦を入渠し得る唯一の場所である。この地は一八一四年英帝國に併合されて以來、地中海の海權を握るに缺ぐ可らざる重要なる戰略地點となつた。元來この地の戰略的價値は、アジヤ、アフリカ、ヨーロッパの何れにも、比較的

近距離にあるのと、スエズ運河をも防禦し得ることに存じてゐる。英國はかゝる目的の下にこの地を重視したが、近時空軍の發達は、大陸諸國よりの空中攻撃を容易にしたので、大にその價値を減じた。然しながら英國艦隊にして戰時地中海方面に活動せんとならば、この地は缺ぐ可らざる要點である。

ジブラルタル　地中海方面に於て、モルタに次で缺く可らざる他の海軍根據地はジブラルタルである。該港には小船渠一個、グレービングトック三個あるも、バルヂを有する今日の大戰艦は之を入渠せしむることは出來ない。

海陸の防備も亦極めて嚴重ではあるが、潛水艦飛行機の發達した今日では、地中海の關門たるこの海峽を完全に管制し得るものでない。只だその要塞が味方の潛水艦飛行機と協力する時には晝間は素より夜間の通過を極めて危險ならしむるを得るから、英國にとつては、地中海の海權、殊に西洋より東洋に至る海上交通路の管制をば、或程度にまで確保するを得よう。

該港は山を越へてスペイン領内から港内を砲撃し得、從つてその戰略的價値の大部は、主としてスペインの好意如何にかゝつてゐる。この弱點あるが爲め、英國では敵の彈著距離外にある港

の東側に人工的港灣を造らんとしたが、大なる經費を要する爲め中止された。

以上の理由があるから、近年タンジール問題が再燃すると、ジブラルタルの戰略的價値は再び議論の種となり、代ふるにタンジールを以てすべしとの說が持上つた。タンジールはジブラルタルの對岸モロッコ領內にあつて、ジブラルタルを距ること三十二浬、スエズ、シンガポール、パナマと同樣、世界貿易の鎖鑰點として、戰略上最も重要なる地點である。若し該港に長距離砲を据へつけ、こゝに潛水艦の根據地を置くならば、ジブラルタル海峽を通過せんとする船舶に對しては大なる脅威とならふ。然も該地はジブラルタルのように、他國から港內を砲擊さるゝ憂ひもないのである。該港は目下國際的管理の下にあるが、機會あらば之を獲んとして、英國は絕へず眼を光らしつゝあるのである。

アフリカ圖　前節にも說いたように、地中海航路は、太平洋に至る海上交通路としては最短であるが、そこには英國にとり幾多の脅威が橫はつてゐる。然るにも拘らず、英國海軍省が地中海航路の安全に重きを置いて、艦隊の配備は勿論、海軍根據地の防備施設に至るまで力を注ぎ、その他を犧牲に供するを見ては、英國海軍部內にも異見を生ずるに至つた。彼

等は云ふ、潛水艦と航空機が發達した今日、歐洲の一强國と戰ふ場合には、地中海航路は到底安全を期し難い。潛水艦以外の英國軍艦が、安全に該海面を通航し得るかも亦疑問である。英國がスエズ運河を經由する海上交通線に依て、太平洋方面に戰はんとする場合も亦同樣である。かゝる場合には歐洲の主なる强國が眞面目に中立を守る場合には可能であらふ。然しながらかゝる不確實なる基礎の上に戰略上の計畫を樹つることは危險である。須らく一歩を進めて、喜望峰を經由する交通線を、豫め準備して置くことが安全であると。

アフリカ航路は、之を地中海航路に比すれば、距離の點に於ては確かに不利であるが、安全の點からみれば寧ろ有利であることは拒めない。然しながら作戰には時は最も重要なる要素であることも忘れてはならぬ。かゝる理由からみれば、アフリカ航路を副次的に準備することは、英國にとりても賢明の策であるや疑ひなからふ。

現在のところアフリカ航路には、赤道直下の英領シエラレオネにフリータウンの防禦港があり、更に南すれば、喜望峰に近くサイモンスタウンの軍港とケープタウンの防禦港が相隣つて大西洋より印度洋への入口を扼してゐる。更にアフリカの東岸に沿ふて北上すれば、南阿の小巴里と呼

ばるゝダーバンの防禦港がある。若しこれ等の根據地に適當の改良を加へたならば、アフリカ航路は一層の安全を增すことが出來よふ。ダーバンには、最大の軍艦を入渠し得る新設の船渠があり、途上に於ける修理所としても重要なる地點である。

米大陸　轉じて米大陸方面を見れば、北より數へてカナダの東岸にはハリハックスの軍港**方面**　がある。該軍港はカナダ政府が經費節約政策をとつた結果、今日では單に警備及給養上の目的を達し得るに過ぎない。

それより南下すれば、合衆國の東方六百浬の洋上にベルムダの軍港がある。ベルムダは北米及西印度艦隊の根據地で、修理用工廠及大型の浮船渠一個を有するも、今日の戰艦用には適せない。今より二十餘年前英國の一海軍士官は、『ベルムダは主として合衆國との戰爭の場合に必要であるが、歐洲の一强國と戰ふ場合にも、英國と北米との貿易を保護する巡洋艦の爲に、幾分の價値はあらふ』と云つたことがある。事實この軍港は英米戰爭には英國の前哨線となるもので、それは恰も日本に對するマニラ又はグワムの役目を演ずるものである。衞の世界大戰中、英國の巡洋艦はこの地を根據として貿易の保護に任じ、前述した士官の言の眞なるを證明した。

更に南下してカリビヤン海に出ると、ジャマイカ島にキングストン、アンチル群島にポート・カストリースの防禦港がある。前者は泊地と燃料貯藏所を有するも、他の海軍用施設はない。更に南下して南米の南端にゆけば、マゼラン海峽の東方五百五十浬にフオークランド群島があり、そこに同名の軍港がある。世界大戰の際、青島を追はれた獨逸の東洋艦隊が、英國艦隊の爲に邀擊されて全滅したのはその附近である。

四　地中海か太平洋か？

地中海か太平洋か？　上述するように、英國艦隊の重點は本國附近の海面と地中海方面に置かれ、太平洋方面には、極めて貧弱なる自治領海軍以外に、僅かに五隻の一萬噸巡洋艦を基幹とする劣勢な部隊が配されてゐる。日英關係が緊張した今日、かゝる貧弱なる配備は果して適切であるか？　英國は寧ろ歐洲方面の艦隊の一部を割て、太平洋に派遣するを賢明の策とせないか？　これは當然に起る問題であり、英國にとりては勿論、日本にとりても極めて重大なる問題である。何となれば、英國が日本と戰ふか否かを決心した最初の表現は、艦隊の太平洋派遣を以

て極めて確實に卜知するを得るからだ。

ゼリコー提督の意見　この問題に答ふるには、我等は先づ英國が如何に太平洋方面を重視しつゝあるかは、世界の海上舞臺が北海より太平洋方面に推移したのを逸早くも知つて、大戰中大艦隊司令長官であつたゼリコー大將を派遣し、太平洋方面の戰略關係を調査報告せしめた。これに對して同大將は、日本の八八艦隊に對應すべき同樣の八八艦隊を、南太平洋方面に常備すると共に、シンガポールを擴張して、該艦隊を容るゝに足る設備を完成せんことを建言した。この建言は海軍本部が認めて以て妥當としたものであつたが、一方太平洋方面にかゝる優勢なる艦隊を常備することとは、日米兩國を挑發して無益の惡感を與ふるに止まり、政略上有害であるのと、財政上の理由から、大艦隊の太平洋常備は、時の政府の葬むるところとなり、その折衷策として採用されたものが、シンガポール軍港を擴張して、近代式主力艦を容るゝに足る設備を完成し、一朝有事の際には、何時にても本國から優勢な艦隊を派遣し、之を根據として活動せしめようと云ふことになつた。當時の意見によれば、シンガポールは英本國を距る八千浬の彼方にあるも、新造の英國快

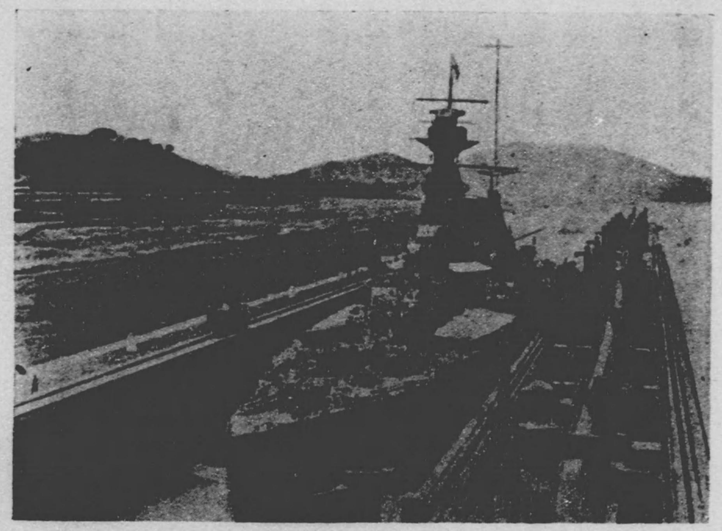
速大戰艦ネルソン、アンソンは近く完成するであらふし、之にフード、レパルス、リナウン等を加ふれば、極めて有力なる快速主力部隊を編成することが出來る。況んや英國が新造補充すべき主力艦は尙一層の快速力を有するものと推斷し得るから、これ等は僅か十日以內で太平洋の中心に到着することが出來る。されば不斷に艦隊を同方面に常備するの必要はないと、これが英國海軍の意見であつた。讀者記憶せよ！　英國の海軍々人等が誇示したこれ等快速主力艦の大部は、その後建造を放棄され、又はワシントン會議で墮胎の運命にあつたことを。

一國極東主義　だが今日に於ける日英關係の緊張からみれば、前述した太平洋への大艦隊常備を**●絕對**否認せしめた日本に對する挑發や財政上の理由などは云ふに足らない。然るにも拘らず、英國は尙も太平洋への艦隊派遣を、最後の瞬間まで躊躇するであらふか？　これが次に起る問題である。

若しも英國が日本に對抗し得る大艦隊を太平洋方面に派遣しても、歐洲方面には少くも佛又は伊の海軍に對抗し得る餘分の艦隊を有するならば、英國は日本との關係が緊張したと見るや否や必要なる艦隊を太平洋に派遣することは、極めてあり得べきことである。併しながらワシントン

會議で二國標準主義を捨てゝ、アメリカとの均等的一國標準主義に讓歩し、日本に對して約十對六の優勢を保持するに過ぎない今日では、若しも日本に對抗し得る艦隊を太平洋方面に派遣するならば、歐洲方面は殆んどがら空きになる。

だが英國艦隊が歐洲方面を去つて、同方面がら空きになつたら、歐洲はどうなるだらう？何人も知るように、今日に於ける歐洲の平和は强制された平和であり、從つて不平を爆發させんとする火藥庫は隨所に存在してゐる。換言すれば、佛獨、佛伊、英佛等の對立を中心として、現狀維持派と現狀破壞派は互に鎬を削りつゝあるのである。こゝに云ふ現狀維持派とは、英・佛・ベルギー、ポーランド、ユーゴースラヴィヤ、ルーマニヤ、チェッコ・スロウヴァキヤ等であり、現狀破壞派とは、獨・墺・伊・ハンガリー、ブルガリヤ並にロシヤが之に屬してゐる。云ふまでもなく現狀破壞派は、失はれた領土、國利國權の回復、國家の膨脹、民族の自決を狙ふものである。然るに前者が後者を抑へつゝ兎も角も歐洲の平和を維持してゐるのは、英國が前者に與みする結果、天秤が現狀維持の方へと傾ひて居るからだ。されば若しこの抑へがなくなるならば、現狀破壞派は猛然と起ち、第二の歐洲大戰は之を免るゝを得ない。この抑へとなるものが卽ち英國の海



英國巡洋戰艦フツドバ奈馬運河通過の光景

軍力である。果して然らば英國海軍は容易に歐洲方面を去ることは出來ない。

英國の海軍々人等が崇拜の的となつた海軍戰略の大家コロム中將は、英海峽を以て英帝國の死命に關する戰略上の鎖鑰點となし、須らくこの海面に於て敵の奇襲に備へ、又全世界に於ける海上作戰の根據地とせねばならぬと論じたが、これは過去と同樣、今日に於ても將來に於ても、同樣に適用さるゝ金言である。この至緊至要なる海面の防禦に比すれば、その他の要求は副次のものに過ぎないから、英海峽を空虛にして、艦隊の大部を遠隔の地に移すが如きは、如何なる場合に於ても誤れりと謂はねばならぬ。勿論過去に於ては、英國が歐洲の敵國に對し、その艦隊を阻止するに足る充分の兵力を殘留して、遠隔の方面に戰つたのは事實である。然しながらそれは兵力に餘裕があつた場合で、今日のような五大海軍國の海軍比率では、本國附近の海面を管制しつゝ、同時に太平洋方面に重大なる海軍作戰をなすを得ない。換言すれば、既に一國標準となつた以上、二國標準主義——日本と歐洲の一國——の作戰をなすことは危險である。

然らば必要の場合には、いつでも日本に對抗し得る艦隊を太平洋に派遣するとして、先づ歐洲方面に充分の艦隊を殘し、餘分のものを太平洋方面に派遣したらどうか？

この種の方法は一見するところ妥當のようにも見へる。然しながら日露戰爭の歷史的敎訓を回想するならば、それは寧ろ素人論であり、危險なる生兵法であることに氣が付くであらふ。實に日露戰爭に於ては、ロシヤは歐亞の兩艦隊を合すれば、日本に對して頗る優勢なる海軍力を持てゐたにも拘らず、次ぎ〳〵へと極東方面へ增援した爲に、日本海軍の爲に個々に破られてしまつた。日露戰爭當時には、軍艦の行動半徑が比較的少であつた爲に、バルチック艦隊に對しては、日本の奇襲艦隊は遠く印度洋方面にまで出動邀擊することは出來なかつた。然るに今日の潛水艦は、印度洋は愚か場合によつては地中海方面にまで活動し得るのである。果して然らば、英國が日本艦隊よりも劣勢な海軍力を太平洋方面に派遣するは危險と云ふべく、それは寧ろ自ら好んで死地につくものである。

然しながらこゝに注意せねばならぬことは、かゝる危險があるにも拘らず、英國にして劣勢なる艦隊を、先づ太平洋方面に派遣するならば、そこには英國艦隊の安全を保障するに足る何等かの默契があるものと、日本としては考へねばなるまい。それは何かといへば、アメリカとの默契であり、アメリカとの共同作戰の準備が出來たと解すべきであらふ。

以上述ぶるところによれば、一國標準主義は、英國が太平洋方面に作戰する場合、最大なる苦悶を英國に與ふることがわかる。況んや現に有する歐洲に於ける二國標準主義なども、之を放棄せねばならぬ時代が來るならば、英國の苦悶は更に增大するや疑ひない。然も英國の苦悶するところは、日本にとつては却て有利であるから、英國をして歐洲に於ける二國標準主義を放棄せしむることは、獨り佛・伊兩國にとりて有利であるのみならず、又日本としても當然に一肌脫がねばならぬ問題である。

英米協同作戰　アメリカは日本と戰ふ場合、幾多の不利をもつてゐる。然るに英國に至つては一層重大なる不利を有することを英人は先づ記憶せねばならぬ。英國は先づ脚下を固めずには、遠隔の如何なる方面にも作戰することは出來ない。然るにも拘らずかゝる危險を冒してまで作戰するならば、個々に擊破さるゝことは火を睹るよりも明らかである。

こゝに於てか英國としては、先づ日米兩國を戰はせて己は漁夫の利を占めんと努むるであらふ。次の太平洋會議に、日本に對せんが爲め、アメリカを正面に立たせる理由はこゝにある。英國若しこの外交的作戰に失敗するならば、次には英米協同作戰の下に日本と戰ひ、己れ獨りでは戰は

ないように、巧みにアメリカを抱きこむことに全力を盡すであらふ。この際日本の切崩し外交が如何なる程度にまで成功するかは疑問であるが、之を日本側からみれば、最も困難なる切り崩し外交に浮身をやつすよりも、寧ろ英國にとりては火中の栗であり、機會だにあらば彼等の覇權を覆やさんとする、他の反英諸國に我が外交の切味を示すこそ却て賢明の策であらふ。

第六章　英國の太平洋戰略（一）

一　特殊な國防關係

帝國と自治領の國防關係

今や進んで英國の太平洋戰略を一瞥するに當り、先づ英本國と各自治領並に印度との國防關係を述べてみよう。

自治領と英本國との國防關係は頗る不可解であり明諒を缺ひてゐる。殊に一九二六年十月の英帝國會議が、自今海外各自治領は英本國に從屬せず、英本國と對等的地位に於て、英帝國を構成するところの聯邦となることを決議してからは、この問題は益々不可解となつた。只だ濠洲首相のみは、その國防を英本國に依頼することを確言したが、それは濠洲のみの問題であつて、他の自治領の同意するところとはならなかつた。

理論上よりいへば、大英帝國の國防は一あつて二あるを許さない、從つてその海軍の如きものも、全體としての大英帝國の海軍であつて、英本國の海軍でないのが至當である。この論理を推

進むる時は、英帝國の海軍は單一の海軍であり、中央政府が之を指揮統率し、各自治領は之に對して費用と勞力とを分擔するのが至當であるが、事實は必ずしもそうではない。

英海軍省の覺書　一九〇九年に開かれた英帝國會議で、英國海軍省が各自治領の代表に配付した覺書には次の一節がある。

英帝國の海軍力を如何にすべきやの問題を決定するには、純然たる海軍戰略以外の他の問題をも考慮せねばならぬことは明らかである。勿論各自治領の種々の事情も考慮せねばならぬ、これ等の自治領は、人口、富及力に於て大なる發展の餘地を有するも、現在に於てはその成長の程度は同一でない……

英帝國の海上國防に對して、單に國防費と物質的援助を負擔することは、或は自治領にとつては都合がいゝかも知れない。又或る自治領は自分で海軍を持ち、戰時になれば之を英帝國の指揮下におき、これに依て將來に於ける自治領海軍組織の基礎となさんことを希望するものもあるだらう。又或る自治領は、大英帝國の利益を增進する最良の方法は、直接に自治領自身の海軍を備ふることでなくて、寧ろ英帝國の財政を援助する方がいゝと主張するものもあるかも知れない。

この言辭は極めて愼重ではあるが、これに依て各自治領が如何に意見を異にしたか、從つて英

本國としては、單一の海軍を組織することが如何に困難であつたかを暗示するには充分であらう。

自治領の海軍　之を事實に徵するに、濠洲は『補助金艦隊』即ち、補助金を出して英本國から派遣された艦隊をもつよりも、自分で自分の艦隊をもちたいと主張し、既に一九〇七年に濠州海軍なるものを建設した。カナダは一九〇五年に英本國に對し、ハリファックスとエスカイモルトの兩根據地に船渠を新設せんことを申出でて之に着手し、又一九一〇年には英國海軍から二隻の舊式巡洋艦を購入して本國の沿岸防禦用に充てた。その後數隻の弩級艦を建造するの議もあつたが、これは猛烈なる政治問題となつて中止された。新西蘭は海上國防には鋭敏な興味をもつてゐるが、一九〇九年には自費を以て一隻の巡洋戰艦を建造し、これを以てやがては編成される太平洋艦隊中に編入せんとした。然るに英獨の關係が緊張すると、新西蘭は自ら進んで之を母國海軍用に使用せしむることゝした。之に反して南阿と印度は軍艦の建造や艦隊の常備を欲せず、寧ろ英帝國への財政的援助を以て滿足してゐた。

歐洲大戰が破裂すると、これ等の自治領は或は軍艦と乘員を以て、或は人力を以て母國の國防

に協力した。即ち後洲の軍艦は種々な海面に活動し、新西蘭の巡洋戦艦――ニュージーランドと呼ぶ――は英本國附近に於て獨逸艦隊と戦ひ、カナダの軍艦は大西及太平洋方面の哨戒に當り、貧弱なる印度海軍も亦スエズの防禦に從事した。こうして國防上に於ける英本國と屬領の關係は大戦を轉機として極めて密接となつたが、喉元通れば熱さを忘るゝは人情の常である。平和の到來は彼等の國防上に於ける熱烈を一掃し、新たな負擔を忌避する傾向となつて現はれて來た。

二　屬領海軍の現勢

有名無實のカナダ海軍

大戦後の一九一九年に、ゼリコー提督が太平洋の戦略關係を研究する爲め、各自治領に派遣された時には、カナダの爲にも海軍を建設するか否かの問題も含まれてゐた。これに對して提督は次の二つの中の何れかをとるよう獻策した、即ち、(一)カナダは巡洋戦艦一隻、輕巡洋艦二隻、驅逐艦六隻、潜水艦四隻を基幹とする一艦隊を新設し、これを以て新たに編成さるゝ太平洋大艦隊の一部とするか、又は(二)單にカナダの港灣を防禦するを以て足れりとするならば、巡洋艦三隻、驅逐艦十三隻、潜水艦八隻で充分であると云ふのである。

この獻策は一九二〇年三月十日オツタワの議會に提出されたが、カナダではこれに耳を傾けなかつた。そしてその十二日後の二十二日には、カナダの海軍大臣は麾下海軍の縮少を斷行すべきことを宣言し、海軍々人は兵學校にある五百人だけに縮少し、ハリフアツクスとエスカイモルト軍港の防備を撤すると共にその施設を解除し、二隻の巡洋艦は之を公賣に附する旨公表した。

海相パランチン氏が議會に陳述したところによれば、この海軍縮少の動機は次のようなものである。

政府はカナダ海軍の問題とゼリコー提督の獻策とを慎重に考慮した。然るにカナダは目下財政上非常なる困難の立場にあるのと、英帝國はまだ永久の海軍政策を策定してゐないので、來る英帝國會議で、全英帝國の海軍問題は、母國政府と海外自治領との間に協議されることになつて居る。故にカナダ政府は、それが出來上るまでは中間の海軍政策を策定することを中止した。依てカナダ政府は、それまでは大戦以前の方針に從ひ、母國が申出た一隻の輕巡洋艦と二隻の驅逐艦を、現有の老朽巡洋艦二隻の代りに使用することに決定した。

余は又海軍の組織を全然變更し、且經濟的な軍備を保持する爲め、總ての海軍々人を整理し、又ハリフ

アワクスとエスカイモルト海軍工廠をも縮少又は撤廢することを命じた。

この宣言に從ひ、カナダは二隻の舊式巡洋艦を廢棄し、英本國から送られた一隻の輕巡洋艦と二隻の驅逐艦で滿足したが、間もなく前者は解役され、一九二二年以來は僅かに二隻の驅逐艦を殘すのみであつた。

この海軍縮少政策に對して、保守黨は猛烈に反對した。保守黨首領メイゲン氏は曰く、

カナダ政府は今や全英帝國の國防上の任務を放棄せんとしつゝある。彼等は彼等自身の獨斷で破棄するを得ない道德上の責任をもつのに、勝手に之を回避せんとしつゝある。若しも政府の政策を實行するならば、我々は全英帝國の一員であるのに、之を放棄して自ら外國人とならんとするものである。さればこの政策を採用するか、又は眞に價値ある何事かを爲すの意志がカナダ人にないならば、寧ろきれいさつぱりと英帝國の一員たることを止めて、英帝國の圏外に出る方が賢明である。

この非難は相當の手答へがあつた。カナダ政府も遂に折れて一隻の巡洋艦と二隻の驅逐艦の廢棄を中止し、後者はそのまゝ就役せしむることゝした。

一九二二年十一月に至り、海兵隊、海軍、航空隊は、國防省なる一省の下に統轄されることゝなり、海軍はその下に於て、海軍々事長官と稱する一人の士官が之を指揮することゝなつた。

かようにカナダは、その國境には一兵も備へてない、海上には僅に四隻の驅逐艦（後二隻增加されて四隻となつたが、半數づゝ太平大西兩洋に配備されてゐるから、太平洋方面には二隻である）が備へてあるに過ぎない。されば敵の攻擊に對しては事實上無防禦の狀態にある。然るにも拘らず、カナダ人は何故に平氣でゐるのか？　そこにアメリカ合衆國といふ大きな保護者が、隱然として背後に控へて居ることを忘れてはならない。カナダ人は國防に關しては英本國よりも寧ろ合衆國に依賴してゐる。されば日英戰ふ場合、我れ若しカナダに對して空中攻擊を加へるか、又はカナダの太平洋沿岸に作戰行動を斷行するならば、多くの場合に於ては、合衆國を戰爭の渦中に投じ、我に不利なる場合が起ることを豫期せねばなるまい。

豪洲も亦他國からの侵寇に對しては、憂むべき程弱點をもつてゐる。然もカナダのように手近かに友邦をもたない。母國からの艦隊の援助は、之を一九〇〇浬のシンガポールに求むるか、又は一萬浬の彼方にある英本國に求むるの外はない。然も前者は常に必ずしも期待し得べくもない。

濠洲は之を地理上からいへば一の大陸であるが、これを戰略的に見れば、幾つかの島嶼であるといふことが出來る。蓋しその人口の大部は海岸附近に集中し、この海岸に近く總ての都市は置かれてあるが、鐵道組織の不完全なる爲め、これ等都市間の交通は、鐵道よりも寧ろ海路による有樣である。されば若しその海上交通線を重要なる個所に於て遮斷するならば、人民の生活は直接に脅威を蒙ることゝならう。濠洲に於ては、內地運輸の施設が不完全である爲めに、戰時に至り船舶の航行先を他の港に變更し、これに依て供給の有効なる分配をなすことは甚だ困難である。こゝに亦濠洲の封鎖者に甚大の利益がある。

ヘンダーソンの濠洲海軍案

そうゆう弱點があるのと、第十七世紀より十八世紀にかけて、ロシヤが侵略の手を延ばさんとしつゝありとの風說があつたので、こゝに艦隊の必要が叫ばれ、先づ濠洲方面に於ける英國艦隊を增援することゝなり、濠洲及新西蘭政府は、共同してその費用を受持つことゝなつた。然るに獨逸が太平洋上に領土を獲得するや、その手は濠洲方面に近づいて來たので、遂には濠洲自身でも海軍を建設するの必要を感じ、一九一〇年サー・レジナルド・ヘングーソン大將を顧問として將來の海軍政策を研究せしめた。

ヘングーソン提督の濠洲海軍建設案は、一九三三年までに五十二隻の軍艦を建造し、これを以て獨立の一艦隊とするにあつた。この艦隊は之を東西の二艦隊に分ち、東方艦隊はシドニーを、西方艦隊はフレマンツルを根據とし、その受持區域はクキンスランドのヨーク岬よりメルボールンに引かれた一線を以て境とするにある。又副根據地をホバート、ビューチーポイント、ウエスクーンポート、ポートリンカーン、オルバニー、コーン灣、ポートダーウキン、サースデーアイランド、タウンスビル、ブリスベーン、ポートステフエンスに設け、殊にポートダーウキンの戰略的價値を重視した。この建設費は全體に於て三千八百萬磅に上るが、濠洲政府は主義として之を承認したので、若しも世界大戰が起らなかつたならば、多少變形された形に於て實現したであらふ。

現在の濠洲海軍

ヘングーソン提督の濠洲海軍案は遂に實現するに至らなかつたが、世界大戰の突發と共に、獨逸の東洋艦隊が太平洋を暴れ廻つたので、濠洲方面の英國艦隊は逐次に增加され、その結果戰爭終結の一九一九年には、一隻の巡洋戰艦、五隻の輕巡洋艦、十二隻の驅逐艦、六隻の潛水艦、その他の補助艦を合せて總計三十三隻の優勢なる艦隊に達してゐ

た。然るに財政上の狀態はかゝる大艦隊の維持を許さないので、濠洲政府としては、自分の艦隊を縮少し、同時にシンガポール軍港を擴張して、これを太平洋方面に於ける大根據地となし、これに依て有事の日には濠洲の國防を英本國艦隊に托せんことを希望した。該軍港を建設すべきか否かにつき、紛々たる議論が英本國に行はれつゝある際、濠洲、新西蘭が逸早くも最も熱心に軍港建設論を主張したのは、かゝる理由に基くものである。そして保守黨内閣の下にシンガポール軍港の建設が可決されると、濠洲政府は、巡洋戰艦オーストラリヤ――該艦は後華府條約により廢棄された――を含む二十隻以上の軍艦を解役した。

然るに勞働黨内閣がシンガポール軍港の建設を中止すると、濠洲の輿論は忽ちに反轉した、そして自力を以て軍艦を建設すると共に、この機を利用して濠洲海軍の革新を行ふことゝなり、一九二四年六月政府は新たに軍艦建造案を議會に提出してその承認を得た。

この建造案は、二隻の輕巡洋艦と二隻の潛水艦を建造し、又ポートダーウキンに燃料補給設備を、シドニーに海上飛行機用模擬地を建設するにある。これ等の計畫は着々として行はれたが、その後二隻の一萬噸巡洋艦をも追加建造することゝなり、以上の諸艦は既に完成して何れも就役

してゐる。

新西蘭　新西蘭も亦國防上から云へば濠洲と同樣の弱點をもつてゐる。この弱點と財政

海軍　上の關係から、出來ることなら自分で海軍を建設維持する代りに、シンガポール

による英國大艦隊の力により、國防上からも財政上からも一擧兩得の利益を收めんとした。ずるいと云へばずるいが、然し新西蘭人をして云はしむれば、英本國の人達はそれだけ多くの利益を收めつゝあるから、當然過ぎた當然だと主張するのである。

現在のところ新西蘭は輕巡洋艦二隻をもつてゐる。一九二三年に議會に提出された海軍防備計畫によれば、これを擴張して三隻の輕巡洋艦、數隻の潛水艦となし、且オークランドに燃料補給施設を設けることゝしたが、その中巡洋艦二隻と燃料補給施設は既に完成した。

新西蘭がシンガポール軍港の建設に如何に關心をもつかは、同國政府の左の覺書にも現はれてゐる。曰く、

、新西蘭人はシンガポール軍港の建設を至緊至要と認め、これに重大なる關心をもつものであるが、それは主として海軍戰略上の見地に基くものである。此軍港の建設は防禦の爲であつて攻擊の爲でないとの意

見には、我々も亦同感である。だが若し我が英帝國の艦隊にして、該方面に作戰することが出來なければ、將來英帝國は危險に瀕することがあらう。かの國際聯盟を平和維持の機關として、之に依賴する如きは時機尙早しと謂はざるを得ない。

これを換言すれば、シンガポール軍港に據る英國の大艦隊にその國防を托せんとするのである。然るに軍事費の負擔如何と見るに、英本國の一人當り一磅六志十片に對して、新西蘭人は僅に八志といふ九牛の一毛を擔ふて居るのである。英本國人が憤慨するのも無理からぬことである。

印　度　印度は一九二六年以前には、所謂"Royal Indian marine"といふものがあつた。然るにも拘らず、印度はこの有名無實の巡邏隊の爲に、毎年約三十五萬磅を仕拂ひ、又コロンボを根據とする東印度艦隊の爲にも、毎年十萬磅の費用を負擔して來た。印度人が反對するのも尤もな次第である。

その後一九二六年二月に至り、この有名無實なインチャン・マリンを改正して、新たに印度海

軍を建設することゝなり、それと同時に內部の改革をも行ふことゝなつた、即ち印度海軍は差當り五隻のスループ、二隻の巡邏船等を以て編成し、漸次にその規模を擴大すべく、印度人も亦志願により、海軍々人として印度海軍に入ることが出來るようになつた。但し現在では、一年中の或期間のみが印度人の爲に開放されてゐるに過ぎない。

この印度海軍の建設に對して、印度人の大部は反對した。彼等は云ふ、印度人は何れの國に對しても敵意をもたない。我等には敵國はない。然るにも拘らず、印度海軍を設くるの必要がどこにあるか？　印度人に備へんが爲の印度海軍であるならば、我等印度人は眞平ご免である。然も印度人以外にどこに敵國があるのか？　と。

事實印度海軍は、印度人が云ふように印度人の抑壓に用ふる以外には目標はない。印度人が怒るのも尤もな次第である。勿論今日の印度は昔とは異り、反英の氣分が全印度に滿ちてゐる。然しながら自分等を抑へんが爲め、印度海軍を建設維持するに必要なる費用までも、自分達の空虛な財布から搾取されるとあつては、印度人こそ眞に氣の毒千萬である。

だが印度は英國にとつては寶庫であり生命である。されば印度洋の海上交通線を安全ならしむ

ることは、英帝國にとつては至緊至要の要件であるや疑ひない。英國は目下コロンボにある東印度艦隊をして、この任務を擔はしてゐるが、將來は必ずや印度海軍をして、代つて之に當らしむる魂胆であることは略ぼ誤りないであらふ。印度人はこの過重なる負擔をも喜んで擔ふであらふか？　それは疑問中の疑問であると同時に、印度人が眼を見開かねばならぬ問題である。

然らば自治領や印度が、頼つて以て生命の綱とするシンガポール軍港の戰略的價値はどうか？　英國はこの軍港を中心として、太平洋に如何なる戰略をとらんとするのか？　それは之を次に述べよう。

第七章　英國の太平洋戰略（二）

一　シンガポール軍港建設の主目標は日本

シンガポール　ワシントン會議がすんで、太平洋には戰雲が消へ去つたと、我も人も胸なで下ろした時も時、突如として世人の耳朶を驚かしたものは、英國のシンガポール軍港建設案の確定である。一九二一年（大正十年）秋に開かれた英帝國會議は、國防に關して次の決議をなしてゐる。

（イ）東洋の海上に於ける英帝國の貿易を安全ならしむるに必要なる行動を確保する爲め、シンガポールに海軍根據地を定むることは、極めて重要にして、濠洲、新西蘭、印度の如きは、これに甚深なる關係を有すること。

（ロ）地中海及紅海を經由して、東洋に至る最大航路通過の安全を維持するの必要なること。

（ハ）各自治領の航空軍を擴張すること。

これに依てシンガポール軍港の建設は確定的となつた。尤も政府のこの案に對しては、自由黨と勞働黨は相聯合して反對した。曰く、かゝるは日本を想定敵國とするものであるから、國交上有害無益であると。かくて一九二四年に勞働黨内閣が組織されると、之を中止する事にしたが、濠洲及新西蘭が失望の嘆聲を發したのは云ふまでもない。該問題に關する本國政府と各自治領との間に交換された意見に徴すれば、濠洲、新西蘭は熱心に該軍港の建設を望み、南阿聯邦は世界平和に害ありとして之に反對し、カナダとアイルランド自由國は何等意見を示さず、印度は未定であつた。然るに翌一九二五年に至り、保守黨が再び政權を握ると、同年三月之を復活して、いよ〳〵該軍港の建設に着手することゝなつた。

軍港建設の動機　然らば英國は抑も何の爲にこの軍港を建設するのか？　何國を目標として何に備へんとするのか？

英國の上下兩院に於ける該問題の論戰と識者の所論を讀むものは、紛々又紛々、容易にその眞相を捕捉するに苦しむであらふ。蓋し彼等の中には、偶ま卒直に内心の一端を披瀝するものあるも、多くは彼等の秘密を飾るに美麗なる巧言令色を以てし、顧みて他を云ふからである。然しな

がら英人の眞意は、同國の傳統政策を知り、之を四圍の狀況に考へ、進んでそれ等の所論に現はれた片鱗を對照することに依て、之を解くこと必ずしも難事でない。然らば英國は抑も何の爲にこの軍港を設くるのか？　乞ふ先づ吾人をして英國政府がこれを建設するに決心した裏面の事情を語らしめよ。

抑もシンガポールは、マレー半島の南端にあつて、西に英國の寶庫たる印度を控へ、東しては、濠洲、新西蘭、蘭領東印度、北しては印度支那、支那に至る觸接點をなし、間接にはアフリカの防禦點ともなつて、天然に形成された太平洋地帶の戰略的核心である。世界大戰の結果、(1)極東殊に支那方面の市場が、列國就中日・英・米三國の最も劇烈なる競爭場裡となつたのと、(2)世界の海上舞臺が北海より太平洋方面に移り、戰爭の影響を蒙ること比較的に少かつた日米兩國の海軍が、世界海軍の重要なる地位を占むることゝなり、然もこの兩國は利害と感情の衝突の結果、共に新鋭なる大海軍維持の計畫を固執し、次で米國艦隊の大部は、パナマ運河の開通と共に太平洋に回航して來た爲に、日米戰爭は有り得べき問題となり、中立國たる英國にとつては、その國利國權を擁護せんが爲め、太平洋方面に大艦隊を備ふる必要の日が到來するかも知れないと考へた

のと、(3)英國の屬地屬領たる濠州、新西蘭・カナダを英本國に結びつくる一種の紐帶が、大戰の經驗に依て一層强靱且完全ならざる可らざるを痛切に感じた英國民は、日米兩國の優勢なる海軍の爲に、濠州、新西蘭が國防上大なる脅威を受くるようになつたと感じ、(4)大戰後に於ける印度人の自由獨立の精神と政治的解放に關する國民的自覺が益々熾烈となり、之を直接間接に抑へんが爲にも、適當なる海軍根據地を必要とするのと、(5)華府條約の結果、海軍根據地としての香港の價値が著しく減少した爲に、太平洋方面に於て英國艦隊の活動を保障し、併せて香港を利用するに足る一大海軍根據地が必要であると感ずるに至て、何等かの措置を講ぜねばならなかつた。

英國の傳統政策　英國の傳統政策の一は、主要なる競爭場裡の中心に近く、常に海軍根據地を占領して、外交の背後の支柱たる優勢なる海軍力の爲に、一の定石を据置ることである。例へば一八七九年ソールスベリー卿は、マンチエスターに於ける永久に記念さるべき演說に於て、これを說明して云ふ。

吾人が今回サイプラス島を占領したのは、實は永年來の我が傳統政策を遂行したものに過ぎない。島より一番で全歐洲の注意がスペインの手中に集注した時には、吾人はジブラルタルを占領した。又イタリ

ーの問題が全歐洲の利害の中心となつた時には、我が英國はモルタ島を占領した。而して今や將に歐洲の利害が小アジヤ又はエヂプトに集注されんとするので、這回のサイプラスの占領となつたのである。されば吾人の採つた政策は、何等新たなものでもなければ、又我々は之を以て現政府が未曾有のことを決行したと誇るものでもない。要するに我々は、歷代の英國政府が採用して我々に傳へた傳統政策を遂行したまでである云々。

英國は實にこの傳統政策に基き、シンガポールに重要なる海軍根據地を設定したのだ。だが一旦根據地を設定するとなると、如何なる規模、如何なる程度にその施設を施すかゞ問題となつて來る。この問題を決定するには、當然何國を目標としてこれを定めるかゞ次に起る問題とならざるを得ない。換言すれば海軍根據地の設定には、何國を目標とするかゞ先決問題となるのである。然らばシンガポール軍港は何國を目標としたものであるか？

豪州軍部は　シンガポール軍港の建設を建言したゼリコー提督の前記の意見（第五章四參照）を見れば、同大將は日本の八八艦隊に對應すべき同樣の艦隊を、シンガポールを主たる

同　**本**　根據地として太平洋方面に常備せんことを建策してゐる。これ明らかに日本を目標とするもので

あり、日本の發展膨脹に備へんとするものであることは明らかである。當時の日本は軍國主義侵略主義の國として歐米人の間に潮りに宣傳され、支那は勿論、濠州も新西蘭も印度も、日本の爲に併呑さるゝものと考へられてゐた。況んや日本商品の驚くべき進出は、當時に於てさへ既に英米人の間に驚きの的となり、之を阻止するでなければ、彼等の生存を脅かさるゝとまで考へられてゐたのである。換言すれば、日本は種々の方面から獨逸と同樣恐るべき國であり、速に之に對して備へなければ、將來禍をかむも及ばざる重大なる結果に立到るものと考へられてゐた。これがシンガポール軍港建設の動機となつて現はれて來たのである。さればこそゼリコー提督は、右の獻策を懷にして歸英の途次、大戰中の聯合與國であつたアメリカへは立寄つたが、日英同盟の無二の忠義者であつた日本へは、我が海軍の招待を固辭して遂に立寄らなかつた。思ふに日本を對象とする八八艦隊の成案を胸中に抱く提督としては、我國への渡航を敢てせなかつたのであらふ。

それにつけても思ひ出すのは、ワシントン會議に臨んだ我が有力な一提督が、嘗て余に語つた一話である。この提督はシンガポール軍港の建設を以て、日本に對するよりも寧ろアメリカに對

するものと考へ、眞實然く信じてゐた、彼はワシントン會議中、二國標準主義を楽てゝアメリカと均等海軍力に讓歩を餘儀なくされた英國海軍々人達の悲憤振りを見て、然く信じたものゝようである。だが、英國の海軍々人が如何に憤慨しても、その政治家達の頭は既に英米協調と早變りしてゐたことは、この提督は氣づかなかつたようだ。況んや英國政治家達の一部分には、將來日本と重大なる衝突を惹起する可能性があることを、早くも豫想してゐることなどは、我が海軍々人達は考へてみようともせなかつた。それだけ彼等は正直であり、英人の巧妙な外振交りに魅せられてゐたのである。

貿易保護　だが理窟はどうにもつくものである。英國政府は該軍港建設の必要を說いて云はく、英國は世界大戰の經驗から海上貿易路の安全を保持することに全力を壺すようになつた。この貿易路中、スエズ運河を經て東洋に至る航路は最も重要であるが、スエズ運河までは地中海方面にある英國艦隊の力で保護が出來るが、スエズ以東は防禦不充分であり有力な艦隊がない。シンガポール軍港の建設は、かゝる貿易路の保護の爲め極めて必要であると。

英國が貿易路保護の爲め海軍根據地を必要とすることは論をまたない。然しながらシンガポー

ル軍港が單に貿易保護の爲のみならば、主として巡洋艦以下の輕艦艇を收容し得る設備を施せばそれで充分である。何となれば、主として貿易の保護に任ずるものは、これ等の輕艦艇であるからだ。然るに英國海軍省は、シンガポールに二個の乾船渠と一個の浮船渠を備へ、然も最大の主力艦三隻を同時に入渠し得るようにした。今この數字をとつて、これを大戰當時英國大艦隊がもつてゐた船渠數に比較するならば、現に英國の有する主力艦の大部を太平洋方面に派遣せんとするものであることが明らかとなる。主力艦の大部を派遣することは、同時に之に隨伴する巡洋艦以下の輕艦艇の大部、約言すれば英國艦隊の大部を派遣することを意味する。こゝに至てシンガポール軍港は、貿易路保護の爲に必要なりといふ英國政府の辯明が一顧の價値なき詭辯たることは明白である。

議會に於ける論戰　讀者若し上述の事情を腦裏に畫いて、英國の上下兩院に於ける次の論戰を讀まは、必ずや思ひ半ばに過ぎるであらふ。

海軍政務次官アイレス・モンセル海軍中佐は曰く、

英國海軍の眞の任務は、その海岸を防衛するを以て足れりとするものでない、否寧ろ斯の如きはその任務でなくて、眞の任務は、海外との貿易を安全ならしむる爲に、海上交通路を保護し、且五大洋に散在する我が全英帝國の領土を防護するにある。吾人は今や僅に一國獨立主義を保持し、戰前のように艦隊の分制を行ふことが出來ないので、艦隊はこれを完備の狀態に保ち、要すれば何れの方面へも回航し得る準備を整へねばならぬ。就中極東方面への交通路は最も必要で、これが保護の完成を見るまでは、全英帝國の安全を保證し、極東に於ける我が利益を適當に保護するを得ない……

政府は近代式主力艦の必要に應ぜんが爲め、シンガポール海軍根據地の擴張費を要求せんとする。抑も適當なる根據地なくして、作戰上艦隊を集中せんとするは無用である。シンガポールは、一八八二年以來これに多少の防備を施したが、政府は今や之を最新式に改良せんとするのである。この計畫は既に一九二一年の全英帝國國防會議で承認されたが、同委員は熱心に之を主張し、前內閣も現內閣も、將た又英國の海外貿易領も等しく之を承認してゐる。華府會議が香港の防備を現狀維持とした結果、この軍港を擴張するの必要は益々大となつた。實に吾人は極東方面の我が領土內には、主力艦を入渠せしめ得る一の船渠も持たない。九百五十萬磅の經費は、右の擴張工事の爲め、約十ヶ年に區分し賦課せらるゝもので、これと密切なる直接關係を有する我が海外領土は、自ら進んで之に協力せんことを望む云々。

海相アメリー氏は曰く、

本案提出の眞の理由は、我が艦隊が制限せられた結果、夢ひ運動力（Mobility）を增さねばならないといふことにある。吾人は決して何等新戰略をも樹つるものでない。我が帝國の依つて立つところの戰略は一定不變である。全英帝國の將來の運命は寧ろ世界の最遠の方面に於て解決されねばならない。獨逸を挫すに四ヶ年の長年月を要した吾人は、若し制海權を喪はゞ、數週にして敵に屈するの外はない。尊敬すべき一議員は、英國は全海洋の制海權を管掌して居ると云はれたが、それは事實でない。吾人は來るべき數年間は、太平洋は素よりシンガポールにさへ、一戰艦戰隊を常備するを得ない。吾人にとり非常に重要なること れ等の海面に於ては、吾人は絕對に孤立し、一に他國の好意に俟たねばならぬ。苟も自尊心ある國家は、その生存と安全とを永久に他國の好意に依賴するを得ない。我が海軍をして歷史的任務を達成せしめんが爲には、艦隊は世界の何れの部分にも自由に行動し得なければならない。斯の如き理由の下に、海軍省はシンガポール海軍根據地の擴張を至緊至要と認むるが、要はこれなくしては、該方面に我艦隊を活動せしむるを得ないからである。

語らんと欲して語らず、云はんとして云ふを憚るところに、曖昧と不明が感ぜらるゝではないか。然もその祖ふところの那邊にあるかは、彼等が說くところの片鱗を以てするも之を了解する

に難くはない。

況がこれ等の曖昧も不明も、英國政界の大立物アスクキス、グレー氏等の反對意見を讀み、日本との戰爭は、近き將來に於て到底あり得べからざるを切言した次の演說を讀んだならば、忽ちに氷解するであらう。

前外相エドワード・グレー子は云ふ。

海軍根據地の建設は、將來に起るやも測り難き戰爭に備ふる爲であることを、極めて淡白且明白にすべきである。勿論日本とは一寸戰爭がありそうにも思はれない。余は日英同盟の歷史に信賴して、日英兩國間に衝突の起るべしとは絕對に信ぜない。兩國は共に國際聯盟に加入してゐる。されば聯盟規約に違反せない限り、戰爭は出來ない筈である。

サウスモルトン選出下院議員ランバート氏は曰く、

政府は本問題に關して日本と協議したか？……余は過の大戰の慘禍と恐るべきを痛切に感ずるが故に、かゝる軍備と海軍根據地の新たな競爭とを痛惜する。余の知るところでは、シンガポールは七千浬の彼方にある。この長遠なる根據地と本國間の連絡は、仮も如何にして之を保たんとするか？ 余は戰爭に就て

云々するを欲せないが、この莫大なる費用に關しては、之に就て再び論議せざるを得ない。政府は戰時又は事變に際し、現在の一國標準主義を以て、シンガポールに一艦隊を派遣し得ると確信するか？ 例へとの根據地が九百萬磅の經費と十ケ年の日子を費やして完成するとしても、吾人の有する現在の主力艦と潜艇が、時代後れとならないと何人が確言し得るか？ 抑も亦如何なる敵國を想定して、シンガポール方面で戰はんとするのか？ 海軍當局は云ふ、この軍港の擴張は海外領土の爲め甚だ必要であると。然らば滚洲とは協議したか？ 又は滚洲は幾分の負擔を擔ふことを提議したか？

政府は該案を通過させんとして、議會に對してまだ何等の準備もしたことはない。今や納稅者は反逆しつゝめる。余は寧ろ該案は、有能の委員により、服役問題と共に沈重に考慮さるゝまで中止せんことを望む。

之と對照するに、政府案を辯護すべき軍人の次の意見が如何に率直であるかを見よ。保守黨議員ベレヤース海軍中佐は曰く、

太平洋は世界の商業上著しく重要の處を扮しつゝあるが故に、シンガポールは必要なる根據地である。他の理由は日本の勃興である。何人も將來に於て、東洋諸國民が聯合せずと斷言し得るか。シンガポールはポーツマウスの船渠よりも一層英帝國の中心となつた。

シンガポールと英米關係

本國海軍

更に奇怪なるは、英國の識者中この軍港を以て日米戰爭の場合米國艦隊の根據地となし、英米共同して日本を抑ゆるにも適當なりと論ずるものがある。即ち前掲保守黨議員ベレヤース中佐の如きは、議會に於て、シンガポールの海軍根據地は、米國のフイリツピン防禦の爲にも必要となるかも知れないと臆面もなく公言してゐる。

大正十二年六月十二日より六日間に亘り、英紙モーニングポスト紙上に『極東問題』と題して連載し、著しく世人の注意を惹ひた一匿名評論家は、最近極東方面に於て諸問題を實地に研究したと稱しつゝ、筆を進めて云ふ、日本は移民問題で米國に含むことが深ひ、然るに米國は極東に於ける利害關係の重大なるにも拘らず、同方面に於ける海軍根據地は僅にフイリツピンとグワムのみに過ぎない。グワムは云ふに足らず、フイリツピンも亦增援艦隊の來着前に日本の占領するところとならふ。香港は滚灣の南端より二十時間航程のところにある。されば萬一日本にして香港とフイリツピンを同時に攻略するならば、英米は極東に於ける根據地を失つて、又如何ともすることが出來まい。日本が米國と戰端を開かない理由は經濟上の關係である。即ち日本は絹を米國に輸出し、又棉を米國から輸入せなければならない。然るに日本若し支那に勢力を得て必要な

る生産原料を得、同時に精製品の販路を拓ひたならば、上記の理由は直に消滅するであらふ。由來外交なるものは武力を後援とする意見の發表に過ぎない。日米兩國は太平洋を隔てゝ遠く離れて居る關係上、日本が米國を意のまゝに左右し能はざると同樣、米國も亦日本に對して武力を用ふるを得ないから、之を如何ともすることが出來ない。故に英國がシンガポールを擴張するならば、米國の爲にも絶好の根據地となつて、日本を抑へるに都合がいゝ——といふ意味を仄かしてゐる。

これには米國内にも共鳴者がある。例へばニコラス・ルーズベルトは曰く、

シンガポール問題は、日本人が或は誤解するの恐れある場合と關聯するものである。太平洋の西の關門としては、該港は支那及太平洋に於ける英國の利益を保護する海軍根據地として理想的の場所である。之を以て日本を脅威するとか、又は日本に對して攻撃的であるとかいふのは、その位置と保護すべき利益の眞の性質を解せざるものである。英國は現狀維持を念とする大なる保全者である、さればシンガポールにある要塞、船渠並に兵備廠は、太平洋に於ける勢力の均衡が破れた場合にのみ用ひらるべきものである。

今若しスマトラの西北端から香港へと一線を引き、そこから更に新西蘭へと一線を引くならば、該線—

近海線及シーレーン

――チモールは別とす――の東と南にある幾つかの半島や島嶼は、英・米・和蘭の三國に屬して居ることがわかるであらう。三國の主なる目的は、この區域内に於ける現狀を維持するにある。然るにこの區域を防禦するには、シンガポールは第一に重要であり、マニラは第二である。されば强大なる英國艦隊がシンガポールにあることは、米國の利益ともなるもので、それは恰も優勢なる米國艦隊が、フイリツピンに據ることが、英國と和蘭の爲になるのと同樣である。米國にしてフイリツピンを放棄するならば、この區域内や極東の全部に於ける勢力の均衡は覆やされ、世界の平和を危殆ならしむることゝならふ。フイリツピンにして日本に占領されたならば、英國も和蘭も大なる危險を感ぜざるを得ない。何となれば、蘭領東印度は勿論、恐らくは濠洲も、遂には日本の手中に落つることを覺悟せねばならぬからだ。(Nicholas Roosevelt; The Philippines Twelve. pp. 146――4)

英米聯合して日本に當る場合、シンガポールが米國の爲にも有利であるのは云ふを俟たない。だが之を以て英米を結びつける一の誘惑物にされては、日本こそ迷惑至極である。

英國のねらひは？

以上述ぶるところにより、シンガポール軍港建設の目的は、次の五つの中の何れの場合にも應ぜんとするものと解しても誤りはあるまい。即ち、(一)單獨には

之に依て日本を抑ふるを得、(二)英米共同の場合にも日本を抑へるに都合よく、(三)日米若し反目するならば、之に依て最も有力なるキヤスチング・ヴオードたることも出來、(四)印度に對する統治上にも重鎭たることが出來る。加ふるに、(五)萬一英米相戰ふ場合ありと假定しても、日英協同して之に當るにも都合がいゝ、然しながらその最も重きをおくところが日本を目標とするものであるのは、上說するところに依り一點疑を挾むの餘地はない。果して然らば英國政府の遠觀や敬服に値すると謂はねばならぬ。殊に日英關係が益々惡化しつゝある今日に於て然りである。

二　シンガポール軍港計畫の內容

大規模の軍港計畫　シンガポール軍港の擴張計畫が始めて傳はつた當時には、多くの人はその規模が頗る大袈裟のものであることを知らなかつた、彼等は一八八二年以來ケツペル港に現存する海軍の施設を擴張する位のものであると考へてゐたのである。シンガポール港務局の手にあるキングス・ドツクは、巡洋艦は勿論バルヂをもたない戰艦ならば之を入渠し得るから、

精々のところ、バルヂを有する戰艦も入渠し得るように擴張するか、又は浮船渠を送りて、右の目的を達せんとするものであらふとは、一般人の豫想であつた。然るに事實は之に反し、ケツペル港から離れた他の一地點に、全然新たに軍港を建設し、然もそれが我が吳軍港と略ぼ匹敵するものと聞かされては、世界が眼を見張つたのも無理はない。

軍港の位置　シンガポール軍港は、現在のシンガポール市と背中合せで、シンガポール島とジョホール半島との間にある北部ジョホール水道に臨んだところにある。セムバワン河口を中心とする約六哩に亘る地域がそれだ。水道の長さは二百浬、幅約二十五浬、大軍艦を容るゝに充分の水深があり、然も敵の襲來を容易に阻止することが出來て、地形上理想的であると云はれてゐる。

軍港の施設　セムバワン河口を東に距ること約四浬、センター河口の右岸には、約六百エーカーの水陸兩用の飛行場がある。又ジョホール水道の東口、卽ちチヤンジの突端には、十八吋の要塞砲數門を基幹とする要塞が築造されると稱せられてゐる。

船渠は二個の乾船渠と一個の浮船渠で、その浮船渠は五萬噸のものである。この浮船渠は始め

獨逸から分捕したものを用ふる筈であつたが、後その用をなさゞることがわかつて、新たに之を造ることゝなつた。又大仕掛の重油貯藏所があり、それが送油管によつて根據地その他必要な個所へと導くようになつてゐる。外に三十萬噸の石炭を貯藏し得る燃料庫も新設中である。

軍港建設に要する經費は始め一千一百萬磅であつたが、下院は之を九百五十萬磅に削つた。然るに獨逸から分捕した浮船渠が用をなさないのと、適當な要塞を築き、之に守備軍を配する費用は見落されてあつたので、後之を二千七百五十萬磅に增加した。この經費は將來之を增すとも減ぜられることはないであらふ。そして軍港の完成は一九三九年の豫定である。

ハミルトン將軍の言　この軍港建設を評したハミルトン將軍は云ふ。

ウキッチ島にして大連の施設に亙萬の金を費やし、之が爲に旅順要塞の防禦力を減殺ならしめなかつたならば、日本は到底巨大なるロシヤを屈することは出來なかつたであらう。旅順要塞を打碎ひた十一時の猛砲撃は、ロシヤが大連にあれだけの施設をした爲に、開港より之を揚陸することが出來た……

シンガポールは我が主力艦隊の根據地たるモルダを距ること六千浬、日本からは三千浬の距離にあるが

臺灣からはその約半ばの距離にあることは、世人は稍もすれば氣付かないようである。一の根據地にして若し之を救援する味方艦隊の所在地よりも寧ろ敵に近き距離にある時は、かゝる根據地の防禦は之を一時的に保持し得る程度に止むるか、又は之を難攻不落とするか、二つの中一つを選ばねばならぬ。シンガポールには目下一時的の防禦が施されてゐる。之を難攻不落とするにはどうすればよいかと積々に考へて見たが、結局現在の守備軍を三倍にせなければ到底不可能なりとの結論に達した。

三　日本に與ふる影響如何？

シンガポール軍港の建設が、日本の國防上、商業上乃至は政略上に及ぼす影響は如何？

國防上の影響　第一にはこれに依て惹起さるゝ我が國防上の不安である。

シンガポールは香港を距ること一四三〇浬、我が臺灣の南端とは一六二五浬を隔て、佐世保軍港とは二五二〇浬の距離にある。これ即ち該軍港を根據とする英國艦隊は、假に日本に對して作戰し得るを示すもので、若しその施設にして完整したならば、華府條約に依て僅に艦艇の休養、小修理、その他物資の補給をなし得るに過ぎない孤立無援の香港の價値も、之が

爲に向上し、前進根據地としての勢力も著しく增大することゝならふ。三五〇〇浬を隔つるハワイの海軍根據地すら、アメリカは之を踏臺として日本に對し攻勢作戰をなし得るではないか。これを思へば、その半ば以下の距離にあるシンガポール軍港の脅威は云はずして明らかである。

抑も日本が華府會議で六割比率を承認したのは、太平洋の軍備制限に依て右の缺陷を補はんが爲であつた。當時の我が海軍々人達はアメリカを顧みるに急なるの餘り、まさか英國がシンガポールに大軍港を設けようとは思ひ及ばなかつた。否之に氣付ひた極めて少數の人達があつたとしても、二十年來の日英同盟の回顧は、遂には日英戰ふの日が來つて、該軍港が我脅威となるとは考へ得なかつたであらふ。さればこそ我が委員達は、香港の軍備は制限しても、ハワイの半ばの距離にあるシンガポールは、手を觸るゝことなしに之を見逃したのだ。

だがシンガポール軍港の設備が完成し、英國艦隊はこゝを作戰基地として、香港を前進根據地とすることになれば、日英の戰略的對勢は全く一變することを知らねばならぬ。詳言すれば、日本は恰もフイリツピンが軍備制限を解かれて、一等根據地となつた場合のように、對英海軍力の不足を感ずるようにならふ、（以下百六字削る）

事實對英作戰の場合には、我に有利な南洋群島の役目をつとめてくれるものは、シンガポール以北にはどこにもない。況んや一六〇〇浬のところには、英國の大艦隊が控へて居るとすれば、日本は英國と同等の海軍力を持たなければ對等に戰ふを得ない。又況んや空軍の襲來に對して全然無防禦の日本としては、こゝにも亦重大なる脅威を蒙ること到底對米戰爭の比ではない。こゝに至てシンガポール軍港の建設は、日本の國防上重大なる脅威を與ふるといふも、決して過言ではないのである。

交通線の脅威　第二は交通線の脅威である。他給他足の日本が、如何なる方面より、如何なる航路を經て、幾許の物資を輸入しつゝあるかを見るに、

（一）、支那、滿洲、シベリヤ方面より來るもので、日本海、黃海、東支那海を經由するもの、全輸入高の約一九%。

（二）、香港、印度支那、海峽植民地、英領印度より來るもので、南支那海、印度洋を經由するもの、同一八%

(三)、ヒリツピン、蘭領東印度、濠洲及新西蘭方面より來るもので、ヒリツピン以南の南太平洋を經由するもの、同一一・五%。

(四)、南北アメリカ大陸より來るもので、太平洋北部及米大陸の兩岸を經由するもの、同三三%。

(五)、歐洲及エヂプト方面より來るもので、南支那海、印度洋、紅海、地中海、大西洋の一部並に北海を經由するもの、同一八・五%。

と云ふ割合である。

故に今若しシンガポール軍港が擴張された曉の對英戰爭を豫想するならば、前記の(二)(三)(五)は殆んど杜絶し、全輸入額の四八%は得られなくなる。と同時にこれ等地方への輸出も亦杜絶するから、日本は南北米大陸か、支那、滿洲及シベリヤ方面と貿易を行ふの外はない。然るに對英戰爭の場合には、南北米大陸との貿易も、多くの場合に於ては期待するを得ない。故に日本の活動區域は獨り極東方面のみに限られ、極めてみじめな立場に置かるゝことゝならふ。この點は對米戰爭の場合と大に趣を異にするもので、アメリカとの戰爭には、南北米大陸への海上交通

は杜絶しても、反對に南支那海、印度洋を經て、これ等の方面は勿論、アフリカ、歐洲方面へと貿易を轉向することが出來るが、對英戰爭の場合にはそれが出來なくなる。シンガポール軍港が日本の海上交通に如何に苦痛を與へるかは、これを見てもわかるであらふ。

政略上の關係　第三に之を政略上より見れば、就中最大の影響を蒙るものは我が對支政策であらふ。日本が對支政策上最も有力な立場にあるのは、素より種々な原因もあるだらふ。然しながら地の利と外交の背後の支柱たる兵力が與つて力あることは、何人も之を拒むを得まい。滿洲事件に英も米も實力を以て日本に干渉を加へ得なかつたのは、その有力なる證據でないか。然るに英國がシンガポール軍港の完成に依て、優勢なる海軍を短時日内に極東方面に派遣し得ることになれば、英國の對支外交は一層の力を得るは勿論、支那も亦日本を輕視して益々增長すること、ならふ。況んや印度人も亦之に威壓されて、從來アジヤの盟主として尊敬して來た一種の精神的紐帶も、これが爲に失はるゝことゝなるのである。

こゝに至つて、シンガポール軍港の日本に與ふる脅威や、至大なりと謂はねばならぬ。

英人の正論

だが英人中にも正論をなすものもある。例へば有名なる海軍通バイウオーター氏の如きは、これを次のように論じてゐる。

荷も該軍港の建設計畫を研究したものは、その意義の重大にして、獨り英國の海軍戰略のみならず、日本との將來の國交、延いては極東の政治的狀態にも、重大なる影響を及ぼすことを、何人も見逃さないであらう。實にこの問題は、單なる國防上の問題以上に深き意義を有するものである。該案の辯護者は、シンガポールは日本を距る二八九〇浬の彼方にあるから、日本は之が爲に何等脅威を感ずるものでないと云ふも、日本帝國の一部をなす臺灣は、該地より僅に一六二五浬を離るゝに過ぎないから、シンガポールを以て攻勢作戰の根據地たり得ずとする前記の議論は、論據聊か薄弱である。シンガポールは、日本に對する攻勢作戰の根據地としては、或は遠過ぎるかも知れない（譯者曰今日の軍艦では遠過ぎない）然しながらシンガポールが太平洋への門口に横つて、アジヤ大陸の他の諸國よりも寧ろ日本の海上交通を脅制し得、且つ日本に對して遠距離封鎖を行ひ得る理想的の位置にある以上、該軍港が日本に對して何等の影響なしとするは、眞に痴人夢を說くものである。かゝるは日本の批評家が斷へず力說するところで、これに對しては何等反駁の餘地はない。

英國は太平洋方面に重大なる利害關係を有するので、これが爲め適當の防禦を必要とするは、爭ふ可らざる正論である。將た又東洋方面にある英國の艦隊は、目下のところ日本との戰爭には到底敵し得ないから、主力艦隊を以て之に增援する必要上、適當の施設を要するとともに亦何等非難の餘地はない。特に太平洋方面には、主力艦を容るゝに足る船渠がないから、英國にして苟もその利益を放棄せざる限り、最大の戰艦を容るゝに足る船渠の必要は素よりある。

然しながら英國にかゝる必要があればとて、それはシンガポールに大規模の軍港を建設することが、眞に重にして必要なる措置なりとする理由とはならぬ。太平洋に於ける海軍の形勢は、この軍港案の始めて現はれた一九二一年以來一變してゐる。當時日本は尨大なる造艦計畫を有する米國と、明らかに勢力の均衡を保たんとして、これ亦大規模の造艦に努めつゝあつた。これ等兩國は實際相互を想定敵國として居り、然もその爭ふところは、太平洋の制海權であつたから、該方面に重大な利害關係を有する英國としては、之を傍觀するを得ない。然も日米戰爭の可能性は、必ずしもあり得べからざることでもなかつたので、かゝる戰爭にば、英國は中立國としての權利を防護することが實明の策である。シンガポール軍港の建設はかゝる理由に基き、太平洋又はその附近に、英國戰艦の爲に補給及入渠用として設けんとしたものである。

然るに以上の形勢は、華府會議の結果全く一變した。今や主力艦の建造競爭は熄んで、日米の主力艦は十對十八隻となり、西太平洋に於ける海軍根據地の防備と施設も亦制限された。こゝに於てか世人は考へ

た、シンガポール軍港の新設は、之を放棄するか、又は根本的に變更さるゝであらうと。然るにこの豫想は裏切られ、吾人の知る限りに於ては、原計畫は依然として固守されつゝある。果して然らば英國海軍省は、太平洋に優勢なる主力艦隊を配備するの考へを、今も尙棄てざるものと謂はねばならぬ。然らざれば無用なる新根據地を設くるの必要はないのである。

然らばシンガポールに戰艦隊を配備して、英帝國を守られねばならぬ危險がどこにあるかといふに、それはありそうにもない。華府會議後の日本の主力艦は十隻となり、その半數は半ば老朽してゐる。一九三四年後はそれも九隻に減ずるが、苟も條約にして保存する限り、この數を超過することはない。勿論日本海軍は、巡洋艦、驅逐艦、潛水艦では優勢であるが、戰艦はこれ等の補助艦と戰ふものでないのに、シンガポールは主として戰艦用の根據地と思はれるのである。華府條約は一九三六年末まで有効であるが、それ以後も調印國の一が廢棄の通告をせれば、永久に効力を保持するものである。さればシンガポール軍港の建設は、日本が他の調印國に先つて該條約を破棄し、戰艦の建造を始むる恐れある時にのみ合理であるが、今日までのところでは、日本にかような形勢は見へない……

日本は西太平洋に於ける唯一の海軍國であるから、シンガポールは已に直接の關係があるものと信じ、英米兩要國であつた英國は、今やその態度を一變し、日本を以て想定敵國と認めて居ると考へてゐるので

ある。かような理由から、シンガポール軍港の建設は日本人を怒らしめ、之に抗議することゝなつた。日本は英國に對して敵對的猜疑心を起さしむるような何等の行動も敢てしたことがないとの、日本新聞紙の云ふところは眞實である。日本はアジヤに於ける英國の利益を犯すようなことをしたこともなく、又その陸海軍の目指すところも、英國の領土を犯さんとするような政策をとつたことはないのである……

若しもシンガポール軍港の擴張が、英帝國の安全上絕對に必要であることが證據立てられるならば、日本人の感情や、極東に於ける英國の利害關係に如何なる惡結果を及ぼすとも、之を斷行せねばならぬ。不幸にしてこの新根據地が何故に必要であるかは、未だ嘗て證明されてゐない。太平洋のどこかに戰艦用の船渠を備へねばならぬのは明白である。何となれば、これが無ければ艦隊は太平洋に活動することは出來ない。と同時に、紅海以東に英國の海軍力を適時に活動さすことが出來なければ、平和を維持することも出來ないからである。シンガポールは太平洋戰時の領給點であるから、大軍艦用として少くも一個の船渠は備へねばならぬ。されば最も簡單な計畫としては、該地に一個の浮船渠を送ることであるが、若し之に現存の乾船渠を擴張して、バルヂを有する戰艦をも入渠し得るような程度に止めたならば、外國には何等の刺戟も起さなかつたであらう。

現計畫の主なる反對點は、利害得失の問題を別として、英國の東洋に於ける海軍々備に全世界の注意を

集中せしめ、心ならずも侵略的であるとの感念を少くも日本人に與へたことである。太平洋に於ける英國海軍の爲には、現在の施設に戰鬪用の一個の船渠と數個の消耗並に火薬庫を新設すれば充分で、若し之に豪洲の主要なる港に幾つかの船渠を備へたならば、英國艦隊の戰略的行動力は大に之を增すことが出來よう。かくすれば世界の政治的狀態にも何等波瀾を起さず、全費用も減じ、然も國家の安全は却て大に增すことゝならう。英國海軍省のシンガポール軍港計畫は、危險を豫防するよりも寧ろ之を增大する結果となるものである。(Bywater : Navies and Nations pp. 87-108)

新たな交渉が必要　シンガポール軍港が、日本に重大なる脅威となることは、十目の見るところ、十指の指すところ、今や動かす可らざる事實である。不幸にして華府會議に於ける我が委員達は、日英同盟の屍に餘りにも戀々たるの餘り、うつかり之を看過したのだ。今やこゝに目醒ねばならぬ。然らざれば英國に對しては七割や八割の海軍力では勝算はないのである。英國に對してはアメリカと同等の比率で足りると考へるのが抑もの誤りである。シンガポール軍港が存在する限り、日本は英國に對してはアメリカ以上の比率を要求せねばならぬ。これが冷靜なる戰略上の要求であり、又日本の當然に主張し得る權利である。(以下三行削る)

四　太平洋及印度洋に於ける英海軍根據地

香港の價値　シンガポール軍港を中心とする英海軍根據地の星座中、我が日本に最も近く、且軍事上至大の關係をもつものは香港である。

香港は廣東河口に臨み、その南方約九〇浬のところにある。島は東西に延び、長さ一一哩、幅二乃至五哩、面積三二方哩で、約半浬の海峽を隔てゝ對岸の九龍半島と對してゐる。地勢は概ね急傾斜の山地で、河川は皆無である。軍隊の上陸地點は數ヶ所に之を求むるを得るも、一時に多數のものを揚陸することは少しく困難である。港内は廣濶にして、我が聯合艦隊の全部を容るゝに足るも、要塞の施設は、華府會議で現狀維持を約された結果然く堅固でない。

對岸の九龍は香港防備上の必要を名目として支那から租借したもので、その面積約三五六方

哩、主として農耕地である。

濠州及　轉じて濠洲方面を見れば、その東岸にはシドニー及メルボルンの兩軍港があり、主として濠州海軍の根據地である。この兩港は諸般の設備略ぼ整頗し、要塞の構築も可なり堅固である。

その他防禦港としては、濠州の北端トーレス海峽に面するところにサースデー・アイランドがあり、東岸にはブリスベーン、ニューカッスル、南岸にはアデレート、西岸にはオルバニー、ポート・ダーウキン、フリーマントルなどがある。更に南下してタスマニヤ島に至れば、そこにはホバートの防禦港がある。これ等諸港の中、濠州西岸のポート・ダーウキンが戰略上重きをおかれてゐるのは、前說した通りである。

更に東して新西蘭に至れば、北島にはオークランド、ウエリントン、南島にはリツテルトン、ダンネヂンの四防禦港がある。その中オークランドは新西蘭艦隊の主たる根據地である。

印度洋　地中海と太平洋をつなぐ印度洋方面にも、英國は幾つかの海軍根據地を備へ、

方面　互に連絡をとつてゐる

今これを西方から順次に擧ぐるならば、紅海の入口にはアデン、印度の西岸にはカラチ、ボンベーの防禦港がある。更に南下すれば、セイロン島にはコロンボ、トリンコマリーの兩軍港があり、前者は英國東印度艦隊の主根據地である。更に東してベンガル灣に入れば、印度の東岸にはマドラス、カルカツタ、ビルマにはラングーンの防禦港がある。これ等の防禦港は何れも數門の大砲を備ふるのみで、その施設は貧弱である。

五　英國の太平洋戰略

以上述ぶるところにより、太平洋に於ける英國の戰略は之を察するに難くない、然らばシンガポール軍港が完成し、英國艦隊の大部は該軍港に據るものとして、英國は如何に有利な戰略上の對勢に立つか？　次に之を指摘してみよう。

日英戰爭　前說したように、華府會議で日本が英國に對してアメリカと同樣六割比率を許の場合　したのは、シンガポール軍港の新設を看過した爲であり、英國に一杯喰はされた結果に外らない。若しも我が全權達にしてこのことあるを豫期するか、又は日英同盟の華々しき

過去の歴史に未練を殘さなかつたならば、必ずや英國に對してはアメリカと同樣な比率を許さなかつたであらう。

かゝる理由により、若し日英兩海軍の比率が現在のまゝであるならば、日英戰ふ場合勝利は寧ろ英國に歸するものと考へねばなるまい。詳言すれば、日本が英國と少くも同等の海軍力を有せざる限り、我は不利の位置に立つのである。

人或は云ふ、香港は直ちに日本軍の爲に占領さるゝであらふ。然らば日本としては必ずしも悲觀するに足らずと。然しながら香港はシンガポールを距ること一四三〇浬の近距離にある、優勢なる英國艦隊は僅に三日以内に到着することが出來ることを考へてみれば、香港の占領が然く容易の業にあらざることは、何人にも明らかであらねばならぬ。既に香港の占領が困難なりとすれば、該地は逆に英國艦隊の爲に前進根據地たるの價値を增すものと考へねばなるまい。その結果我が作戰は益々困難となり、勝利の算は愈々乏しくなるのである。

こゝに一言すべきことは英國の威海衛放棄である。人或はこれを以て英國の博愛人道主義に基くものとなし、華府會議の精神を發揚したものとして之を誇稱する傾がある。然るに之を軍略上

より見れば、かゝるは寧ろ當然であり、英國としては賢明の策であると云ふことを如何に見るか元來威海衛は海軍根據地としてのみ英國の爲に價値あるものであるが、日本海軍が張つた網の中の鼠である以上、日英戰爭となれば容易に我が手中に落つるは一點疑ふべくもない。事實威海衛はアメリカのグワムよりも侮むべき立場にある。果して然らば戰時に至り、之を敵手に委する不名譽を敢てするよりも、潔く之を放棄することこそ賢明の策ではないか。これを以て英人の博愛人道主義を誇稱する如きは、英人の實利主義を解せざるものである。

濠洲新西蘭の國防　次に濠洲及新西蘭の國防上に及ぼす影響を考へてみよう。

英國の大平洋戰略の狙ふところの一は、これ等自治領の國防上の安固を期するにある。然るにシンガポール軍港を中心とする各海軍根據地の適當なる配列と、大平洋に於ける優勢なる艦隊の配備とは、兩々相俟てこれ等自治領の國防を益々安全ならしむる結果となるのは爭はれない。

假りに日英戰ふと假定し、日本が濠洲及新西蘭の侵略を企てたとしてみよう。かゝる企圖はシンガポールに優勢なる英國艦隊がある限り、先づ之を撃破して南太平洋の海權を握つた後でなけ

れば成功の望みはない。何となれば、日本から濠洲の北海岸までの距離は三千浬に及ぶので、主要なる港への陸軍の輸送には少くも二週間を要するのみならず、少くも三四十萬の陸軍を派遣せねば成功の望みはない——世界大戰には濠洲は四十一萬七千の陸軍を歐州の戰場に送つてゐる——かゝる大軍を輸送するには、先決條件として敵の艦隊を撃破せねば危險であり、之を犯すものは自ら好んで自滅の途を選ぶものであるからだ。果して然らばシンガポールに優勢なる英國艦隊がある限り、濠洲新西蘭は敵の侵略に對して安全なりと云ふべく、枕を高ふして眠ることが出來る。

この關係は之を英米戰爭の場合にも適用することが出來る。濠洲及新西蘭に對しては、アメリカは日本よりも作戰上一層困難な立場にある。これアメリカの海軍根據地は、唯一のツツイラを除いては日本よりも一層遠隔の方面にあり、然もツツイラは大艦隊の根據地としては何等の用をもなさないからだ。

屬領及委任統治領　如上の配備は、太平洋に於ける英國の屬領及委任統治領の安全をも保證するものである。例へばシンガポール軍港と指呼の間にある英領ボルネオ、濠洲の對岸

にあるニューギニヤ、南太平洋のフイジー群島、ソロモン諸島、並に赤道以南の英國委任統治諸島の如きは、シンガポールを根據とする英國艦隊及濠洲新西蘭艦隊の行動圏内にあつて、日本や米國艦隊の手の屆かぬところにある。即ちこれ等諸島も亦シンガポールに優勢なる英國艦隊の儼存する限り、日米兩國は如何ともするを得ない。

印度洋　シンガポールを中心とする軍港及艦隊の配備は、英國が印度及太平洋への重要の海權なる交通の一半たる、印度洋の海權をも英國の手中に委するものである。日米兩國は先づシンガポール方面の英國艦隊を撃破するでなければ、印度洋の海權を握るを得ない。之と同樣に歐洲諸國も亦同方面にある英國艦隊を撃破した後でなければ、印度及太平洋方面に至る英帝國の生命線を奪ふを得ない。勿論數多の貿易破壞艦や潛水艦は、不時に右の交通線を脅かすことは出來よう。然しながら眞に有効且永續的の効果を收むるには、艦隊の撃破に基く海權の皆無以外には之を庶幾するを得ない。

太平洋　尤が以上述べた英國の太平洋戰略も、二つの條件を備ふるでなければ、英國の**海の線**　爲に有利に展開するものでない。この二つの條件とは、一はシンガポール軍港の

完成である、二はそこに優勢なる英國艦隊が適時に存在することである。

シンガポール軍港は近く完成するであらう。然しながらそこに艦隊が存在し、又は適時に作戰行動をとることが出來なければ、日米海軍は意のまゝに行動し得べく、かくては濠洲、新西蘭は勿論、その他の太平洋島嶼も、印度洋の海權も、敵手に落つることゝならふ。

然るに英國は、歐洲方面の顧慮上、平時に於ては大艦隊を太平洋方面に常備するを得ない立場にある。さればこの大艦隊を適時に太平洋方面に到着せしむるの可能如何は、英國にとつては極めて重大なる問題たるや疑ひない。若し時機を失したならば、香港は勿論シンガポール軍港をも失ひ、延ては自治領や島嶼をも失ふことなしとも限らない。英國の苦悶はこゝにある。そして英國の敵が乘ずるところもこゝにある。（以下二行削る）

第八章　一九三六年に於ける日英兩國の兵力

一　海軍力の比較

滿洲事變の爲めに惹起された日米の海軍競爭は、勢ひ英國をもその渦中に卷きこまずにはおかぬ。この故に一九三六年末即ち華府及ロンドン兩海軍條約が効力滿期となる時には、英國も亦日米兩國と同樣、ロンドン條約で定められた兵力量に略ぼ近き海軍力を有するものと推定し得る。

備考　第一表は、一九三六年末に於て、ロンドン條約により日・英・米三國の保有し得る兵力量を示したものである。

第一表　ロンドン條約による日英米海軍保有量表

國別 / 艦種	日	米	英	日本の對英比率	日本の對米比率
主力艦	二六四、〇〇〇（九隻）	四三五、〇九八（十五隻）	四二二、八五〇（十五隻）	六・二	六・〇

航空母艦	八一、〇〇〇	一三五、〇〇〇	一三五、〇〇〇	六・〇	六・〇
甲巡洋艦級	一〇八、四〇〇（十二隻）	一八〇、〇〇〇（十八隻）	一四六、八〇〇（十五隻）	七・四	六・〇
乙巡洋艦級	一〇〇、四五〇	一四三、五〇〇	一九一、二〇〇	五・三	七・〇
駆逐艦	一〇五、五〇〇	一五〇、〇〇〇	一五〇、〇〇〇	七・〇	七・〇
潜水艦	五二、七〇〇	五二、七〇〇	五二、七〇〇	一〇・〇	一〇・〇
合計	七一二、〇五〇	一〇九六、二九八	一〇九九、五五〇	六・五	六・五

各艦種　上表はロンドン條約に基く保有量を示したものであるが、今各艦種につき、日一覧表　英米艦を比較するならば第二第三表のようになる。

第二表　英国海軍力表

(1)　戦　艦

艦名	噸数	速力	主砲	発射管
クイン・エリザベス級五隻	三〇、〇〇〇 三一、〇〇〇	二五・〇	三八糎八門	二—四
ローヤル・ソベレイン級五隻	二七、一五〇 三三、五〇〇 三三、九〇〇	二三・〇 一三・〇	三八糎八門 四〇糎九門	二 二
ネルソン級二隻				

(2)　巡洋戦艦

レパルス級二隻	三二、〇〇〇	三一・五	三八糎六門	二—一〇
フード	四二、一〇〇	三一・〇	三八糎八門	六

(3)　航空母艦

		搭載機数
フューリヤス	二二、四五〇	三一・〇　五四
アーガス	一四、四五〇	二〇・二　二七
イーグル	二二、六〇〇	二四・〇　二七
ハームス	一〇、八五〇	二五・〇　一八
カレージヤス	二二、五〇〇	三一・〇　八一
グローリヤス	同　右	同　右　六三

ケント級	九、八〇〇	三一・五	二〇糎八門	八
オーストラリヤ級	九、九〇〇	同右	同右	同右
△ロンドン級	九、八七〇	三二・二五	同右	同右
ロンドン級	九、七五〇	三二・二五	二〇糎六門	六
ヨーク級	八、三〇〇			

(4) 甲級巡洋艦

キャンプレーン級	三、九二〇	二九・〇	一五糎四門	六
キャレドン級	四、一二〇	二九・〇	一五糎五門	八
チスパウチ級	四、二九〇	二九・〇	一五糎六門	一二
エメラルド級	四、八五〇	三三・〇	一五糎七門	一六
△アデレード級	七、五六〇	二五・三	一五糎九門	二
△ダネディン級	五、一〇〇	二九・〇	一五糎六門	一二
ハリング級	四、八五〇	二九・〇	一五糎六門	一二
	七、〇〇〇	三二・五	一五糎八門	?

(5) 乙級巡洋艦

アレウスサ級	五、五〇〇	?	一五糎六門	六

(6) 駆逐艦

タスマニヤ級	九〇五	三六・〇	一〇糎三門	四
二十九ノーマウス級	一、一二〇	三四・〇	一二糎五門	六
四ワレース級	一、四八〇	三六・〇	一二糎五門	六
三マウケー級	一、五三〇	三六・五	一二糎五門	六
二アマソン級	一、三五〇	三七・〇	一二糎四門	六
十四クルセーター級	一、三七五	三五・五	一二糎四門	六
エコー級	?	?	?	?
八フイヤーレス級	?	?	?	?
(廃艦)九キース級	一、三九〇	三五・〇	一二糎四門	八

(7) 潜水艦

二十六級	七六〇	一七・五	一〇糎一門	六
	八四五			

K	二	六	一、七一〇	二三・五	一〇糎三門　一〇
X		一	二、四二五	二二・〇	？　？
O九P六級			一、三八三	一五・〇	一〇糎一門　？
R六級			一、五七〇	一五・〇	一〇糎一門　？
ナ六級			一、五七〇	一五・〇	一〇糎一門　？
ーム級			一、八〇五	二二・五	一二糎一門　六
ス級			六四〇	一四・〇	七・五糎高角砲一門　六
ウオードブイツシュ級九隻					
ボーイス級			二、〇六〇	一五・〇	一二糎一門　？

〔註〕(1)、英國はロンドン條約の最大限度に達せしむる目的を以て、毎年概ね巡洋艦三隻、驅逐艦九隻、潜水艦三隻の割合を以て建造しつゝあるから、一九三六年末になれば、本表のものよりも尙いくらか多くなるだらう。

(2)、△印は法例、新四隻海軍に屬するもの、

第三表　日本海軍力表

艦名	噸數	速力	主砲	發射管
(1)戰艦				
陸奥級二隻	三二、七二〇	二三・〇	四〇糎八門	八
日向級四隻	二九、三三〇 二九、九九〇	二二・五 二三・〇	三六糎一二門	六
(2)巡洋戰艦				
金剛級三隻	二六、三三〇	二七・五	三六糎八門	四
(3)航空母艦				
赤城級二隻	二六、九〇〇	二八・五 三三・〇	二〇糎一〇門	
？級二隻	一〇、〇〇〇	？	？	
龍驤	七、六〇〇	二五・〇	一二・七糎高角砲一二門	
(4)甲級巡洋艦				
那智級八隻	一〇、〇〇〇	三三・〇	二〇糎一〇門	八—一二
加古級四隻	七、一〇〇	三三・〇	二〇糎六門	一二

(5) 乙級巡洋艦

最上級六隻	八、五〇〇	三三・〇	一五糎一五門	?
球磨級十四隻	五、一〇〇	三三・〇	一四糎七門	八
夕張	五、一九五	三三・〇	一四糎六門	四
	二、八九〇			

(6) 駆逐艦

吹雪級二十四隻	一、七〇〇	三四・〇	一三糎六門	九
? 十四隻	一、四〇〇	?	?	?
初春級十二隻	一、三七八	?	?	?
睦月級十二隻	一・三一五	三四・〇	一二糎四門	六
神風級九隻	一、二七〇	三四・〇	一二糎四門	六

(7) 潜水艦

伊號第一級六隻	一、九七〇	一七・五	一二糎二門	六
伊號第五十三級十五隻	一、六五〇	二一・〇	一二糎一門	八

伊號第六十八級六隻	一、四〇〇	?	?	?
? 級三隻	一、六〇〇	?	?	?
伊號第二十一級四隻	一、一五〇	一六・五	一二糎一門	四
呂號第六十五級四隻	九九八	一六・〇	七糎五一門	六
呂號第六十九級二隻	九〇〇	?	?	?
? 級三隻	九〇〇	?	?	?

主力艦　右の表に依て見る時は、英國は主力艦に關しては日本よりも遥かに優勢なる立場にある。即ち戦艦に於ては、ロドネー、ネルソンといふ世界に於ける最新最鋭と大巡の二隻を有し、巡洋戦艦に於ても亦三八糎砲八門を有するフードは勿論、他のレパルス、レナウンも亦日本の巡洋戦艦を凌駕してゐる。

次に甲級巡洋艦は如何といふに、八吋砲一萬噸級巡洋艦の一艦對一艦の戦闘力は日本の方が優勢であるが、數に於ては英國は十三隻を有するに對して日本は八隻を有つてゐる。外に英國は八千三百噸八吋砲六門の巡洋艦二隻を有するが、之に對して日本は七千百噸八吋砲六門の加古級四

シドニーの光景

隻をもつてゐる。これ等の大型巡洋艦中英國はその五隻を支那艦隊に、他の二隻を遠洲海軍に配してゐるから、本國方面にあるものは、八吋砲八門のもの六隻、同六門のもの二隻である。されば日本にして巧妙な作戰に出で、之を個々に撃破することが出來るならば、英國のもつ大巡の優勢は必ずしも恐るゝに足らない。問題は之を個々に撃破することが出來るか否かにある。

輕巡は　ロンドン條約の結果、英國海軍の巡洋艦勢力は、七十隻から五十隻に低下され

本に有利　た。然るに英國の有する輕巡の大部は一九一四年の建造にかゝわるので、多數の艦齢超過艦がある、その結果毎年三隻づゝ新造しつゝあるも、財政上の狀態から常に遲れ勝ちである。故に若し現在の狀況を基準とするならば、一九三六年末には艦齢内の巡洋艦は僅に三十五隻となり、艦隊の行動は勿論通商の保護にも多大の不利を來すことゝならう。

この點に於ては、日本は寧ろ有利な立場にある、蓋し日本は、ロンドン會議後も着々として造艦計畫を進めて來たから、數に於ては英國に劣つても、新鋭艦に於ては略ぼ相匹敵するのと、英國は通商貿易の保護上、多數の巡洋艦を主戰場以外の任務に服せねばならぬ關係もあるから、日本は之に依て數字上の劣勢を償ふことが出來る。

輕巡洋艦と潛水艦　輕巡洋艦について云つたところは、驅逐艦に就ても同樣である。卽ち英國は驅逐艦の數に於ては日本に優つても、一艦對一艦の戰鬪力では、日本の驅逐艦は英國のものよりも優つてゐる。のみならず、英國のものは多くは一九一九年以前の建造にかゝはるので、艦齡比較的に大なるものが多いが、日本の方は新艦が多い。加ふるに驅逐艦は輕巡洋艦と同樣港灣防禦や貿易保護の任に當るものであるから、世界の各方面に亘る海軍根據地や海上交通線の擁護には、英國は勢ひ多數の驅逐艦を割て之に當らしめばならぬ必要もあつて、主戰場に於ける驅逐艦の數は、それだけ減ぜらるゝことゝなり易い。換言すれば、數に於て優勢なる英國の驅逐艦は、日本にとりては必ずしも恐るゝに足らない結果となるのである。

潛水艦　次に潛水艦は、ロンドン條約により、日英米同率となりて、各々五萬二千七百噸に制限されたから、日英潛水艦の優劣比較は、英國は寧ろ劣者の位置に墜ち、日本は優者の位置に立つことゝなり、日本の方が有利である。況んや一艦對一艦の戰鬪力でも、日本の方は遙かに英國のものに優つてゐる。卽ちこの方面からも日本の潛水艦が優勢である。

以上を綜合して考へてみると、大巡以上では、英國は量に於て日本に優るも、我が對英作戰の

如何に依ては、必ずしも恐るゝに足らない。次に輕巡以下では、英國は世界に跨る海上交通線を保護せねばならぬ必要上、多數の輕艦艇を主作戰々場以外に分割せねばならぬことゝなりて、こゝでも數字上の優勢は覆やされ、それだけ日本の爲には恐るゝに足らない結果となるのである。

二　英國の陸軍力

兵制及兵力　英國の陸軍は志願兵制度を採用し、之を正規軍と地方軍の二つに分けてある。正規軍は常備團隊で、戰時には野戰軍の骨幹となり、主として外征に使用する。平時に於けるその兵力は約二十二萬千六百人である。地方軍は戰時に於て本國の防衛に任ずるのが主務であるが、必要に應じては之を外征に使用することもある。その兵力は平時に於て約十七萬千四百人である。

以上は平時兵力であるが、之を世界大戰の經驗に照らしてみると、戰前約十二萬人に過ぎなかつた英國陸軍は、開戰後の五ヶ月目なる一九一五年一月には三十四萬七千となり、その年の暮には六十萬一千に躍進し、休戰當時には五百萬にまで達してゐた。

正規軍の兵力　正規軍は、常備團隊、豫備軍、補充豫備及び民兵に分れてゐる。

右の中常備團隊は、平時英本國、印度その他海外屬領の守備に任ずるもので、その兵力及配備は次に示す通りである。

一、英本國　總人員十三萬五千人

五師團（一師團は歩兵三旅團を基幹として、師團砲兵、師團工兵、及師團通信隊より成る）

騎兵一旅團と十二聯隊

騎砲兵十中隊

野戰重砲兵七大隊

特別重砲兵一大隊と二十七中隊

戰車四大隊

裝甲自動車十中隊

對空防禦隊二旅團

二、海外屬領（印度を除く）總人員二萬六千七百三十七人

右は主としてジヤマイカ、ベルムダ、ジブラルタル、モルタ、サイプラス、エヂプト、スーダン、パレスタイン、アデン、モーリシヤス、セイロン、海峡植民地、香港等に分在してゐる。

三、印度　總人員五萬九千九百十五人、

この正規軍は英本國から交代分遣するもので、經費は印度政府の負擔である。

正規軍中豫備軍に屬するものは、現役を了つて豫備役にあるもの、補充豫備は、戰時動員に當り、正規軍の將校補充及技術兵の補充に使用するもの、又土民兵は、モルタ、印度、海峡植民地等に於ける常備軍の一部として充當されてゐる。

地　方　軍　地方軍は、地方軍と同豫備軍に區分され、戰時は本國の防禦に任じ、必要に應じて外征にも使用することがある。その兵力は年度の豫算や應募の狀況により異るも、規定の人員は、將校八千四百十五名、下士卒十六萬三千三十七名である。この地方軍は大戰終了以來志願者が減り、陸軍當局の頭痛の種となつてゐる。

地方軍は平時は十四師團と騎兵一師團分の基幹だけが常備してあり、時々召集しては各種の訓

練を行ふ習慣である。

印　度　英國の寶庫といはるゝ印度は、世界大戰中母國に忠誠を申出で、百五十萬人を

陸　軍　動員して、その中から百萬人を歐洲及その他の方面に出征させた。その戰費の如きも二十億ルピーを支出し、又戰債一億磅とその利子をも負擔し、英國の爲には實に偉大なる援助をなしたのであつた。然るに英國が戰時中印度人に對して與へた獨立の公約やその他の言質を、戰後に至りてけろりと忘れたかのように、蹂躙して顧みなくなると、印度人の英國に對する感情は一變した。印度の不安こゝに於てか起つて來たのである。

然らば英國は印度人の經歷は勿論、外國からの侵略に對して、どうゆう兵備を有するかといふに、一九二九年の調査によれば、總兵力二十八萬二百二十三人を算し。その經費五億五千萬ルピー(一ルピーは約六十五錢)と稱せられてゐる。

印度軍は正規軍(英人隊)、印度土人軍、印度補助軍(英人義勇隊)、印度土人地方軍及空軍から成つてゐる。右の中正規軍は英本國の正規軍中から交代分遣されるもので、その兵力約六萬である。補助軍は英人よりなる義勇隊で、平時は幹部のみが常設してある。その總人員は三萬一千六

百である。次に印度土人軍は、印度土人中好戰種族中の志願者を以て編成したもので、主として
マホメダン族、シーク族、ラジプツト族、ネパール族等より成り、就中ネパール族は、最も勇敢
なるものとして重寶がられてゐる。その兵力は約十七萬二千である。この土人軍は上記の正規軍
と混合して族團を編成してある。例へば歩兵では英人大隊一、土人大隊二、騎兵にあつては、英
人聯隊一、土人聯隊二といふような比例を以て各族團を編成してある。最後に印度土人地方軍は、
土人中の志願者を以て編成し、平時は幹部のみを常設し、時々召集しては訓練を行ふ。その總兵
力は約一萬九千である。

印度軍の印度化　印度人の印度といふ叫びは、印度の獨立運動となつて現はれたのみならず、印
度軍の印度化、即ち印度軍を印度人の爲に、廣く開放せよといふ要求となつて現
はれて來た。

從來印度軍に屬する印度人の將校は、特定の歩兵六大隊、騎兵二聯隊に限られてゐた。そこで
これを廢止して、印度軍を廣く印度人の爲に開放すると共に、印度に士官學校を新設すること、
並に一九五二年までに、國王の任命する印度人將校の數を、全印度土人軍將校の半ばに達せしめ

よとは、印度人の要求である。然るに之に同意を與ふるを欲せない印度政府は、種々の理由を付
して反對しつゝあるので、この問題は印度の獨立運動と共に、將來に於ける禍根となつてゐる。

濠洲の陸軍　濠洲はその國防の重點を海軍に托してゐる、然もその海上國防も、自力を以て
濠洲を守るといふよりも、寧ろ英本國に依賴しつゝあるのは既述の通りである。
濠洲が國防の重點を海軍に置くのは、苟も優勢なる英國艦隊の存在する限り、如何なる敵國も濠
洲を窺ふことは出來ないといふ理由に基くものである。但し英國艦隊が來援するまでには多少の
時日を要するのと、又來援しても、味方艦隊の根據地より遠く離れた地方は、敵國の海軍により
脅かさるゝ危險もあるので、地方の安全を期する爲には、適當なる陸軍を備へておく必要がある
と云ふことになり、聯邦政府の下に陸軍が組織さるゝことゝなつた。

濠洲陸軍は、一定の年齢に達したものを强制的に訓練を施す主旨の下に組織され、一九二一年
以來軍區を各州別に分ち、歩兵を中心とする十五族團、六十大隊を以て師團を編成することゝな
つた。一九二九年二月一日現在の現役訓練兵は、四萬七千九百三十一人で、士官學校もダンツル
ーンに設けてある。

三　英國の空軍力

英國の空軍力　英國は日米兩國と異り、空中兵力は空軍省の下に統轄され、必要に應じ、陸海軍に協力することになつてゐる。從つて空軍大臣があり、その下に空軍參謀本部と空軍參議院がある。

現在の空軍兵力は兵員約三萬五千人、飛行機千八百機で、尙擴張されつゝあるから、一九三六年末になれば、この數字は多少の變化を見るであらふ。

空軍は之を正規空軍と地方空軍に分け、後者は平時には基幹部隊だけが備へてあること陸軍と同樣である。今正規軍を所在別に示してみれば、英本國にあるもの四十六中隊、海軍への協同十二中隊、印度及その他の海外植民地、屬領にあるものが二十二中隊である。別に民間用として約千機があり、政府は民間航空の奬勵に努めてゐる。

次に印度に派遣されて居るものは八中隊で、主として印度の西北國境方面に駐屯してゐる。尙有事の際には、イラク又はエヂプト方面からも急援し得るよう、準備を整へてある。

民間航空の奬勵　英國は世界大戰中獨逸の航空機から受けた生々しひ苦痛と、大戰後フランスがある。然るに軍用航空機を多數に建造することは不經濟であり、又多額の費用を要するので、經濟的國防の一法として、民間航空を奬勵することゝなつた。

例へば帝國航空路會社に十年間に百萬磅の補助金を交付し、又英印間飛行路開設の爲め、英帝國航空會社を設立し、これに補助金を交付しつゝあるのはその例である。後者は平時は將校下士の研究に供し、戰時は全部政府の使用に充つることゝして、先づ飛行船二隻を建造した。その中R一〇一號は、一九三〇年十月印度への航行途中、フランスの上空で遭難し、同乘の空軍大臣ドムソン卿以下多數の犧牲者を出したのは人の知るところである。

第九章　英國の弱點を覗く

一　埃及の反亂

英國はその領土が全世界に擴がつて居る關係上、外國に對する作戰を甚だしく困難ならしめ。又は之を斷念せしむるに足る幾多の弱點をもつてゐる。然らば彼等にとり火中の栗とも稱すべきものは何かといへば、エヂプト人や印度人の反英熱である。

英國の致命傷　英國には、その致命傷とも云ふべき弱點が二つある、この二つの弱點は何かといへば、一は英國が印度や太平洋方面に至る海上交通路の鎖鑰點ともいふべきスエズ運河を閉塞することに依つて、その太平洋作戰を妨ぐるは勿論、英國民の依て以て立つ海外貿易の重大なる連鎖を斷つことであり、二は之に依てマンチエスター工業者の生命たるエヂプトよりの棉花の輸入を杜絶することだ。試みにエヂプトの重なる產業を見るに、農業に於ては棉花の栽倍が第一であり、その輸出額は年額四億圓に達して、益々增加の趨勢を示してゐる。そ

の他石油の産出も亦有望とせられ、一九二九年には百八十六萬四千バレルを産し、これ亦逐年增加の勢ひを示してゐるのである。

スエズ　だが英國にとりて最も重大な關係をもつものは、何といつてもスエズ運河である。開鑿費二億五千四百萬圓を投じて一八六九年(明治二年)に竣成した該運河はパナマ運河と異つて海平式であり、長さ百四哩半—ビッター・レーキを除けば八十八哩—幅百五十呎—航海し得る幅百二十一呎—深さ三十六呎で、凡そ十四時間で之を航過することが出來る。

スエズ運河には重要なる要地が四つある。北から數へて、地中海からの入口にあるポートサイド、カンタラ、イスメリヤ、及びスエズがそれである。スエズとポートサイドは運河の南北入口を扼し、運河通過の船舶に對する諸般の施設が出來てゐる。カンタラはメンザラ湖の南端にあつて、シリヤとエヂプト間を連接する狹き頸部に當り、古來より兩地間を往來する軍隊の通過した所で、軍略上重要な地點である。イスメリヤはチムショー湖の北岸にあり、ポートサイドよりスエズに至る鐵道とカイロより運河に至る鐵道の分岐點である。

運河は汽船を沈めて之を閉塞することも出來れば、運河の要所・例へばカンタラやその南方イ

スメリヤとの中間にある運河の最高部—六〇呎—エル・ギスルなどを爆破しても、一時的には之を閉塞することが出來る。殊に運河守備軍にとり最大の弱點ともいふべきは、運河一帶に於ては清水を得ることが出來ず、之をナイル河に仰ひでゐることだ。故にこの水源を杜絶することも又運河攻撃の一法である。

英國の　だが英國の艦船に對して運河を確實に杜絶する最良法は、エヂプト人を蹶起せ

トリック　しめて、英國に對し叛旗を揭げしむることであらふ。世界大戰中トルコは、自軍を運河方面に進め、運河閉塞の壯擧を企てたが、エヂプト人を懐柔することを忘れたゝめ、却て英國の爲に利用された。卽ち英國はトルコが參戰するや否や、エヂプトに對してトルコの宗主權の終了を聲明し、エヂプトを自國の保護邦とする聲明を發すると共に、エヂプト人に對しては戰爭がすめば獨立を許すといふ甘言を以て之を懐柔し、運河を無事に保持するを得た。騙されたエヂプト人こそ氣の毒千萬である。

エジプト人は欺されたとも知らずに、戰爭中は有ゆる犧牲を捧げた。卽ち或者は義勇兵となつて出征し、又或るものはパレスタイン、シリア、メソポタミヤなどで、或は軍務に服し、又は後

方勤務の任務に當つた。そうして戰爭がすんだならば、彼等が熱望する獨立を許さるゝであらふと待構へてゐた。

そこで一九一八年十一月十一日聯合國と獨逸との間に休戰條約が成立すると、その二日後の十三日にエヂプト獨立黨の首領ザグルル・パシヤは、在エヂプト英國行政廳を訪ひ、大戰中の約束に基き、保護邦の廢止とエヂプト國の完全なる獨立を承認されんことを要求した。之に對して行政長官サー・レギナルド・ウインゲートは慇懃に之に應答しながらも言を左右に托して確答を與へなかつた。たまりかねたザグルル・パシヤは、その數日後に更にウインゲート氏を訪ひ、直接ロンドンに至つてエヂプト人の主張を訴へたいから、英國に向ふ許可を與へられんことを乞ふた。ウインゲート氏は之を本國政府に請訓したが、答へは意外であつた、本國政府は今多忙にして之に應ずる餘裕なしと云ふのである。ザグルル・パシヤ等は怒つた。そして愈々エヂプトの獨立運動に邁進することになつたのはその結果であつた。

だが英國のこのトリツク的慣用手段は只だにエヂプトに限つたものではない。同じ世界大戰中印度人に對してもこの手段を用ひ、又ヘジヤス王フサインに對しても僞證文を與へて之を懷柔

し、戰爭がすむと之を反古にしてしまつた。エヂプト人たるもの深く警戒するところなければならぬ。

埃及人の主張　そうゆう徑路を踏んで、エヂプトに名のみの獨立を許す本となつたエヂプト人の獨立運動に就ては、私は前著『日本對世界戰爭』に可なり詳しく述べておいた。然らば今日エヂプト人が英國に對して要求しつゝあるものは何かといへば、次の五つに歸着する。

一、エヂプトより總ての英國軍隊を撤退すること。

二、エヂプトにある英人の司法及財政顧問を引揚げること。

三、エヂプト政府に對する英國の監督、殊に外交上の監督を中止すること。

四、英國政府の主張する、在エヂプト外國人及他の小民族の保護を放棄すること。

五、スエズ運河に對する英國の保護權を放棄すること。

英國は右の中第一の英國軍隊の廣汎なる駐屯權は、單に之をスエズ運河地帶のみに止むることと、並に第四の在埃外國人の保護を英國の手で行ふことだけは之を讓歩しそうな態度を示し、そ

の代りに英埃間に二十五年間の同盟條約を締結し、エヂプトが第三國との間に有害なる條約を結ばざることをエヂプトをして約束せしめんとしつゝあるが、他の重要なる要求に於て、英國が譲歩せざる限り、果してこれがエヂプト人に承認されるかは疑問である。

獨立國　エヂプトは名は獨立國であつてもその實は獨立國でない。否依然として英國の**保護國**　保護邦である。云ふまでもなくそれは英國が眞の獨立國たるを好まないからだ。例へばエヂプトは憲法第一章第一條により

エヂプトは自主獨立で主權ある國である。その主權に就ての權利は不分不可讓のものである。政體は世襲の王政であり、代議政府を有す。

と定めてあるが、この憲法そのものがエヂプト國民の意志に基ひて起草されたものではない。否寧ろ英國の爲に有利に作られてある。

若しもエヂプトが眞の獨立國であるならば、英國に依て任命される高級委員會なるものがエヂプトの政治を左右するわけはない。國王はあつてもそれは英國の傀儡であり、英國政府が勝手に押しつけたもので、エヂプト國民の推戴したものではない。況んやエヂプトには英國の軍隊が駐

屯して、一朝事あればエジプト人を威壓する準備を整へてゐる。

エジプトには代議政治はある、上下兩院からなる議會があるのだ。だが國民の意志は議會を通じて行はれてはゐない。英國は議會による國民の意志を實際政治の上に反映させようとはしない。例へばザグルル・パシヤの率ふるワフド黨が、議會で絶體多數を占め、それが内閣を組織しても、英國は内閣をつぶしてまでも之に聽こうとはせない。殊に一九三〇年の六月に改正された選擧法では、エジプト人の意志を一層制限する目的で、上院議員の中六十名は國王が指名し、國王は自由裁量により議會の召集停會を命ずることが出來るようにした。國王は元來英國の傀儡であつてみれば、この憲法の改正が何を意味するかは一目瞭然でないか。

被占領人　世界大戰終結直後、私は約一ヶ月間ばかりポートサイドに滞在してゐた。それ**は好戰**　はちようどエヂプト人の獨立運動が盛んになり始めたその時期であつた。私は種**人種**　々のエヂプト人やアラビヤ人と會談して彼等の考へをきくことが出來た。そして驚ひたのは、彼等が如何に獨立の熱望に燃へ、然も同じアジヤ人たる我々日本人に對して、如何に好意をもつてゐるかを目のあたりに見たのである。

エヂプト人はアラビヤ人と同樣戰ひを好み、如何にも勇敢な顏付をしてゐる。若し彼等を導くに宜しきを得たならば、强き軍隊を作ることは困難であるまい。現在は徵兵制度の下に一萬二千五百の常備軍を有し、外に國王の近衞兵が一千一百ばかりある。又海軍の方でも四隻の海防艦をもつてゐる。之に對して英國の駐屯軍は一萬一千四百であるが、これを國王の近衞兵と加算する時はエヂプト人の常備軍と同數になるのは、英國の狙ふところの那邊にあるかも讀めるではないか。

凡そ運河地方の作戰に最も有効なるものは飛行機である。卽ちこれに依て運河の爆破を豫防し又エヂプトやアラビヤの土人軍に對しては、恐るべき武器ともなるのである。この點に於ては、優勢なる空軍を有する英國は有利の位置に立つことは爭はれない。

だがこれ等の不利はあるにしても、英國が太平洋方面に乾坤一擲の大戰を試みつゝある時、エヂプト人にして蹶起するならば、英國の苦痛は計り知る可らざるものがあらふ。嘗ては英國のトリックにのつたエヂプト人であつてみれば、彼等が再び同樣の過失を繰返すものとは信ずるを得ない。（以下二行劃る）

二　印度の革命

英國のトリック　印度人もエヂプトと同樣、英國のトリックと搾取政策に苦しみつゝある憐れな國民である。

一九〇六年全印國民會議が印度の完全なる自治を要求する宣言を發して以來、印度人は英國政府に對して絕へず自治獲得を要求しつゝある、その後世界大戰が起ると、英國政府は印度に自治を許すといふ甘言を以て印度人を釣り、英本國に協力せしめた。こゝでも又印度人はエヂプト人と同樣欺されたとも知らずに、英國に忠勤をぬきんで、到るところに戰ひ、又その戰費をも負擔した。これに對する義理でもあらふ、英國は一九一七年のロイドジョージ內閣當時、所謂モンターギュ宣言により、印度には漸次に責任政治を樹立してゆく旨を聲明した。この責任政治といふのは自治のことで、英國は旣に今から十六年前に印度に自治を公約したのである。

然るにこの公約は世界大戰の清算期なる一九一九年に至つて早くも破られた。英國は形ばかりの自治を印度人に與へて、これでごま化そうとしたのだ、即ちこの年に發布された現行印度統治法によれば、印度人には地方行政の極く一部、即ち教育行政のことなどを印度人に委せたきりで、大事なことは皆州知事が干渉し得ることにした。そして印度人がこの統治法に好成績を擧げるならば、段々他の事柄にも自治を及ぼそうと云ふのがその主旨である。

その後英國政府は、印度に於けるこの半自治制の成績を調査せしむる爲め、サイモン委員會なるものを組織したが、保守黨一派の反對から右の委員には一人も印度人を加へなかつた。加之ならず委員會の報告そのものも、僅にモンターギュ宣言に辛ふして一歩を進めたものであつたから、印度人は憤然として起つた。印度の自治運動が遂に印度の獨立運動にまで發展したのはその結果である。

形勢危しとみた印度總督アーウイン卿は、一九二九年十月、印度に自治を許す再聲明をなし、これが爲め不日ロンドンに全印圓卓會議を開き、印度新憲法の內容等を審議することを發表した。若しこの聲明が額面通りに實行されたならば、印度國民運動の反英的空氣も餘程和らひだであらふ。然るに事實は之を裏切り、保守黨一派の猛烈な反對の爲に總督の聲明の趣旨は全く裏やされた。ガンヂー一行がキャンベル灣の製鹽地さして行脚し、こゝで最初の製鹽を開始した結果、遂に投獄されたのはその結果である。

一九三〇年九月十日を以てロンドンに開かれた英印圓卓會議には、全印國民會議の代表者は一名も出席せなかつた。この會議は幾つかの決議をしたが、印度の外交、國防、その他財政の一部等重要なる事項は總て之を英國政府の手で握り、印度人には一指をも觸れさせようとはせなかつた。

穩和派の首領サプル氏はガンヂー以下政治犯人の釋放を懇願し、それが容れられて次に開かれた一九三一年九月の第二回英印圓卓會議には、國民會議の代表としてガンヂーも亦出席した。だが英國政府が依然として外交、國防の兩權を自分の手に握りたいと固執したのと、回教徒の露骨な宗派的言動などの爲めに、會議は完全な失敗に終り、一九三二年一月ロンドンから歸つたガンヂーは、再び不服從運動を始め、またもや捕縛投獄された。英國政府が徹底的な彈壓政策を以て印度に臨んだのはこの時である。

こうゆう事情から印度の形勢は年と共に險惡を加へたので、一九三二年十一月に至り、更に小規模の第三次圓卓會議を開ひて、印度憲法改正の草案作成に着手することを議決した。その結果右の改正案は本年三月十七日の「白書」を以て發表された。

〔註〕印度の國民運動に就ては、余は前者「日米果して戰ふか」「日本對世界戰爭」に詳述しておいた。以下述べるところは、その以後に起つた事件である。

印度憲法改正案　然らばこの改正案の內容はどうか？　印度人を滿足させるに足るか？　こゝに第一に改正案では極めて廣範圍の保障が提案されてゐる。こゝに保障といふのは、英國又は英國人の權益を保障するもので、その權限は印度總督その他の英國官憲の手に保留されてゐる。

印度人が最も熱望する、印度の國防及外交權は勿論、宗教に關するものは、依然として全く總督の權限に委ねられ、聯邦議會並に議會に責任をもつ各省大臣は、毫末も之に干涉することを許されない。その印度總督は只だ單に英本國政府及議會の監督を受けるだけである。

次に總督は左の諸件に關しても特別の責任をもち、聯邦議會は之に干涉することを許されない。

一、印度又はその一部の安寧秩序に重大な支障を及ぼす事態の防止。

二、印度聯邦の財政的安定と信用の擁護。

三、憲法により官吏に與へられた權利の保障と、官吏の正當なる權益の保護。

四、印度に於ける各王侯領の權益保護。

五、商業上の差別待遇防止。

六、保留事項の執行に關する一切の事項。

これでみれば、印度の自治は骨拔きであり、英國は依然として自治といふ美名の下に印度人を釣りつゝあることがわかる。殊にエヂプトの統治法と軌を一にするのは、こゝでも亦印度の王侯達を自家藥籠中のものとなし、印度人の國民運動を牽制しつゝあることだ。これ恰かもエヂプト王を英國自らが選擇し、之を懐柔しつゝあるのと同一である。

更に驚くべきことには、總督は臨機に緊急令を發布して、印度の治安を維持する權限を附與されてゐる。これでは印度に自治を許したものではなくて、自治の思想を去勢したものである。

第二に改正案には、聯邦制度の樹立が提案されてゐる。この聯邦制は既に一九三〇年の第一次圓卓會議で採擇されたものであるが、サプル氏一派の穏和派は、これを以て英領印度と獨立諸侯とを打つて一丸となし、これに依つて印度統一の建設に供せんとしたのである。

ところが英國では逆に之を利用せんとした。元來現在の印度には、英領印度以外に土着の王侯に依て支配さるゝ多數の小國家がある。これ等は外交上の主權のみは、英國皇帝の名に於て印度總督に委托してゐるが、内政上の主權は一切之を自分等の手に握つてゐる。そこで國民會議派は之を打つて一丸とした統一印度への建設に着手する必要上、印度聯邦制度の制定に同意したが、英國側では右の群小王侯の内政上の主權をも之を總督の手に委讓せしめようとして、さてこそ聯邦制に贊成したのである。

だが英國としては、これ等群小王侯を懐柔して、自家藥籠中のものとなすことは、英國自身にとつて有利である。そこで右の改正案には巧妙な藥が盛られて、王侯に對し、聯邦議會やその他で少からぬ特典を與へ、又聯邦成立の條件として、王侯領人口並に聯邦上院王侯領割當議席の半數以上を代表する王侯が、聯邦加入へ正式に贊成せなければならぬとしてある。換言すれば、右

の聯邦案が英國議會を通過しても、王侯の過半數が之に同意せない以上聯邦は成立せないのだ。これ即ち一方に於ては、これ等の王侯に好餌を與へておきながら、他方では聯邦成立の時期を曖昧不定にして、印度人の印度の統一を阻害せんとするものでなくて何であらう。

次に改正案では、王侯の任命する聯邦上下兩院の議員數を不當に多く割當てゝある。即ち一九二一年の調査によれば、全印度の總人口三億一千八百九十四萬人中、王侯領人口は僅に七千百九十四萬人で、後者は前者の五分の一以下である。然るに右の改正案で割當てられた王侯の任命による議員の數は、上院に於て五分の二、下院に於て三分の一である。王侯達は英國政府の傀儡である以上、これ明らかに聯邦議會は總督が之を操縱し易いように出來てゐるといふも決して過言でない。況んや下院議員の選擧權資格にも種々の制限を設け、英領印度全住民の僅かに二乃至三%だけが有權者となり得るに過ぎない。

次に改正案は、州の政治に關しても聯邦政治と同樣の提案をなしてゐる。即ち總督の任命する州知事は、總督と同樣の特別の責任を有し、必要の場合には、州議會を無視して獨自の權限を振ふことが出來る。

以上は改正案の要點である。これでみれば英國が印度に對して如何に名のみの自治を與へんとしつゝあるかゞわかるであらう。さればこそ印度人中の穩健派として知らるゝサプル氏の如き人物ですら、この改正案を評して、これでは印度は自治領でもなく、又自治領の方へと發展する保證すらも與へられてゐないと云ひ、印度下院も亦徹底的修正を要求した後、然らざれば印度の平和と進歩は望み得ないとまで强調してゐるのである。

印度人の反英熱　かように印度人の反英熱が高まるにつれて、總督は彈壓を以て之に臨むの外なしと考へ、峻嚴なる緊急令を矢繼早に發布して汎ゆる行動を彈壓した。そして禁を犯して示威運動をなすものや集會を行ふものに對しては、警官は棍棒を用ひて之を追ひ散らした。然るにその行爲が餘りにも悲慘であつたゝめ、全世界のキリスト教徒から非難を受け、總督も遂に折れて棍棒の代りに六尺ばかりの竹の棒を以てすることになつた。だがそれでも尙取締の警官がこれを振廻はす光景は見られたものではない。

然しながら彈壓を加ふれば加ふる程、印度人の反英熱が昂上するのは自然の勢ひである。その結果右の反英熱は一轉して今やテロリスト運動となり、印度在留の英人は戰々兢々としてその緒に

安んぜない。今次に一二の例を擧げてみよう。

一九三二年春カルカッタ大學では卒業式をあげ、ベンゴール州知事は祝詞を述べつゝあつた。その際卒業生なる印度人の一女性は突如知事に向つてピストルを亂射し、之を斃さんとしたが、彈丸は命中せず、知事は無事なるを得た。その後加害者は法廷に立つたが、彼女は從容としていつた。

自分は知事その人を憎んだのではない、印度が政治的自由を獲得する爲には婦人が覺醒せなければならない。自分が射つたピストルが印度婦人覺醒の一つの助けとなるならば、自分の本懐は達せられたわけである。幸ひ知事が無事であつたのは仕合せである。牢獄につながれて自由を束縛さるゝことは自分の欲しないところである。乞ふ速かに自分を死刑に處して戴きたい。

と、何と悲壯ではないか。その他十七八歳の少女が行政長官を暗殺した者もある。

又印度に於ける最大の新聞ステーツマン主筆サー・アルフレッド・ワットソン氏は、同じ一九三二年中、二回に亘りてテロリストの襲擊を受け、第二回目は可なり重傷であつた。その後氏は身

邊の不安を感じて病に英本國に歸國したが、これは印度人の國民運動に反對論を唱へた結果であると云はれてゐる。然るに加害者はその後何れも逮捕されたが、警察につれて行かれた時には既に死んで居つた、彼等は途上で毒藥を服したといふことである。

こうゆう有樣であるから、在印英國人は、一週に一つのテロリストがなければ胸なで下すといふ有樣で、テニスに行くにもピストルを携帶するといふ有樣である。さればその取締りに就ても峻嚴を極め、荷もテロリストや不服從運動に參加する惧れあるものは、汽車、汽船、電車、郵便、電信等の利用を禁じ、又或る場所から他の場所に移住することすら禁ぜられ、印度は全然戒嚴令の下にあるような狀態である。こゝに注意すべきことは、昨一九三二年一月ガンヂーが投獄されてから七月までに、印度人の投獄されたもの六萬に達し、中に二千七百の婦人があることである。

英國製品の不買　印度の反英運動は又英國製品の不買同盟となつて現はれて來た。嘗て一人の印度人がデパートメント・ストアーに行つて品物を買はうとした。ところが店のものが英國品だと知らせたので、その品を買はずに他國の製品を選んだ。傍にゐた巡査はその印度

人に向ひ、何故英國品を買はないかと尋ねたら、印度人は答へて云つた。

「私は英國品を買つても差支へありませんが、家に持つて歸つても、女房が英國品たることを知れば、使つてくれません」

と。

又或る印度人は、英國製の煙草を吹ふ日本人に向つて、

「それはイギリス製の煙草ではありませんか、日本には紙卷煙草は出來ないですか？」

と尋ねた。日本人は日本にも紙卷煙草が出來ると答へると、右の印度人は妙な顏をしながら云つた。

「何故日本のものを使はないのですか、日本の恥ではありませんか」

かように印度人の反英熱は、英國品の不買といふ深刻な方面にまで進んでゐるから、件の日本人は、或筋を通じて、日本の卷煙草を印度に輸出してみてはどうかと當業者に建言した。然るに之が實行されてみると、僅か數ケ月間に、チェリーの實行は五十萬圓に達するといふ驚くべき成績を示した。日本の綿製品が印度人に重寶がられるのは、勿論價格の低廉なる點もあるが、英國

品に對する不買の影響も多分にあることは爭はれない。

印度人の敬日　印度人は日本を以てアジヤの盟主と考へ、親日といふよりも寧ろ日本人を尊敬してゐる。これ一つには日本が日露戰爭に强敵ロシヤを破り、白人の鼻柱を挫ひたにもよるもので、印度に國民運動が起つたのも全く日露戰爭に刺戟された結果である。日本は國は小さいが、戰さにかけては最も强く、男子は總て軍人であると印度人は信じてゐる。

印度人は始め日本工業の進歩を知らなかつた、然るに一九三二年の春國民議會派の有力者で、甞てデリー大學の總長をしてゐたサー・ハリシング・ガワーといふ印度人が日本を訪問し、我が工業の發達振りや教育制度の完備してゐる狀態を見て歸つてから、印度人の日本商品に對する態度は全く變つて來た。彼等は、日本人は戰さに於てばかりでなく、工業方面に於ても尊敬すべき國民であることを知つたのだ。當時印度人の大部は、日印貿易の實情は、過去三十年間印度より日本への輸入が、日本からの輸出よりも常に三四割多かつた事情を知らずにゐた。偶ま日本の實業代表者達が印度に行つて、この事實を知らせると、印度人は今更ながら驚きつゝ對日態度は益々好轉した。そして日本こそ印度にとつては大きな得意先であることがわかつて、日本の商品はど

し〳〵印度に這入るようになつた。

由來印度人は宗教心に强い國民である、從て衆に勝れたものと信ずる人の言は最もよく傾聽しこれを以て神の信なりとさへ信ずる傾きがある。ガンヂーのような人物が印度人の間に神のように崇めらるゝ理由はこゝにある。故に若し日英戰爭に際して、日本はアジヤ人を白人の手から解放せんが爲め、この戰爭を始めたものであることがわかるならば、豫て日本人を尊敬する印度人は必ずや起つて英國に反旗を揭ぐるに違ひない。要は日本人が印度人に同情し、之を指導しつゝ巧みに彼等の心理を把握するにある。

だが印度人は、ガンヂーが云つたように、强制的に武器を剝奪されてゐる去勢された國民である。現在印度には英本國から派遣された六萬の正規軍があり、その外に十七萬二千の土人軍がある。この土人軍が日英戰爭の場合如何なる態度をとるかは興味ある問題ではあるが、例へば英人隊と土人隊とは各獨立の旅團とせず、前者一後者二の比例を以て各旅團が編成されてある點からみれば、英國が事前の顧慮を拂ひつゝあることもわかるであらう。

こうゆう狀態であるから、印度の國民運動をして眞に有効ならしめんが爲には、外部より兵力

を以て之を援助することが何よりも必要である。そこで玆に日露相提携して印度人を後援する必要が起つて來るのである。

三　英國を狙ふロシヤ

日露提携の必要　太平洋戰爭中、日本は印度洋の海權を完全に掌握せない限り、その陸軍を海路をとならば、陸方面より我が陸軍を派遣するより外にはない。故に武力を以て印度人の國民運動を助成せんが起つて來るのである。こゝに於てかロシヤと提携する必要

印度は北境と東北境とはヒマラヤ山脈を以て限られて居り、西方國境の南半部は沙漠地帶であるから、何れも用兵に適せない。故に陸方面から印度に侵入するには、アフガニスタンとの西北國境上約五百哩の間に限られてゐる。この方面は中央高原の山脈の流れを受けて、大體は山岳地方であるが、之を横斷する四本の主要道路があつて、これが印度への進入路となるのである。

然るにアフガニスタンは、印度への通路としてロシヤが常に眼をつけ、之が懷柔に努めつゝ、

英國と爭つて來たところである。アフガニスタンの北方にはボハラがある、この國はロシヤが既に保護領化してゐる。果して然らば印度への進入はロシヤの豫定計畫の一つであり、首鼠兩端を持するアフガンの如きは、日英戰爭の結果、英國が之を顧みるに遑なかつたならば、必ずやロシヤ勢力の進入するところとなることは疑いない。

ロシヤの印度攪亂策　こうゆう關係もあるから、印度人の不平を見たロシヤでは、既に早くから弱小國民の解放宣傳に努め、英國の資本主義を倒すには印度に革命を起させるのが最捷徑なりと信じ、百方手を盡して印度の不安を助成した。例へば一九一七年十二月七日付で、ボルシエヴイキ政府が、アジヤの全勤勞者、回教徒に對する宣言を發表したもの〻中には左の一節がある。

今日以後、諸君の信教と習慣、諸君の民族的及文化的制度は、自由且不可侵であることを聲明する。……東洋諸國の回教徒、ペルシヤ人、トルコ人、アラビヤ人及び印度人よ！　百年に亘る貪婪なるヨーロッパの略奪者、諸君の首と財産、自由と國土とを賭けて、世界戰爭をおつ始めた略奪者共に分割されんとしつゝあるところの地球上の個々の人民よ！　我々は聲明する、轉覆された露帝が締結し、失脚したケレンス

キーによつて確認された、コンスタンチノープルと略奪に關する秘密條約は、今や引き裂かれ、廢棄された。ロシヤ共和國及その政府人民委員會々議は、他國領土の略奪に反對する。……ヨーロッパの帝國主義的略奪者、即ち諸君の祖國を奪ひ掠めとつて、自己の植民地たらしめんと欲するものに依て、諸君は奴隷化されるのだ。諸君の國を掠奪するもの、諸君の人民を奴隷化する者を鎖ねのけよ！

この聲明は、資本主義ヨーロッパ、特にその親玉たる印度を領有する英國を震駭せしめ、モスクワ駐紮英國大使ジヤン・ビュカナン氏をして、『我等の臣民印度人を叛亂に向つて煽動する』ものとして憤慨せしめた。

更に英國を震慄させた出來事は、一九二〇年九月バクーに開かれた東方民族大會である。この會議にはトルコ、支那、印度、アルメニヤ、ペルシヤ、アフガニスタン等二十の異民族が集つた。議長たるジノヴイエフ氏は演說して云ふ、

我々はイギリスに對する凡ゆる革命的鬪爭を援助する用意がある。ヨーロッパの帝國主義、特にイギリスに向つて聖戰を布告せよ！

この會議に列席した人物中には、前トルコ將軍エンヴエル・パシヤもあつた。彼は打倒英國を

畢生の目的として、モスクワから軍資金と武器の供給を受け、アフガニスタンにある印度の亡命志士を組織せんとしつゝあつた。こうゆう狀況であるから、モスクワの共產黨大學に於ける印度人學生の數は益々增加しつゝある。

ロシヤと印度との關係は上述のようである。果して然らば日英戰爭は、ロシヤにとつては多年の宿望である暖かき海への出口を求むるに絕好の機會といふを妨げない。只だこゝに日本として注意せねはならぬことは、印度に對して、英國の代りにロシヤを据へることは絕對に之を避けねばならぬことだ。然しながらロシヤの望む暖かき海への出口は、必ずしも之を印度に求めねばならぬ必要はない。否寧ろペルシヤ灣方面に求むるのが、ロシヤにとつては却て安全であると思はれる。（以下側る）

ロシヤの南下策　以上の事情を說明する爲め、こゝに少しく、ロシヤの傳統政策たる南下策を一瞥することも亦興味があらう。

由來英露の間柄は惡緣關係であり、宿命の仇敵同士である。

前にも說いた通り、バルト海から北海への出口を塞がれたロシヤは、暖かき海への出口として、近東に於てはダ海峽から地中海方面に、中東方面に於ては、ペルシヤ又は印度からペルシヤ灣又は印度洋方面に、極東に於ては滿洲から黃海に出でんとした。然るに前の二つは主として英國の爲に、最後のものは日本の爲に妨げられて未だにその目的を達せない。

就中中東方面に於ては、ペルシヤとアフガニスタンは英露兩國の衝突舞臺となつた。ペルシヤは、南に下つて暖かき海へと出ようとするロシヤと、之を制止して自ら北に伸びようとする英國の衝突舞臺であり、アフガニスタンは、印度へと進入せんとするロシヤの通路に當るので、これ亦英露兩國の爭奪の巷となつた。そして結局兩國の爲に緩衝國となつて、アフガニスタンは二十世紀の今日、鐵道も敷かれてないといふ有樣である。つまり鐵道を敷設することになると、之を軍事上に使用されては大變だといふので、英露兩國の何れもが之を好まぬからだ。

然らば英露兩國は過去に於てどんな爭奪戰を演じたのか？　英國の死命を制するには、これは極めて重要なる問題であるから、以下先づアフガニスタンを中心とする兩國の爭奪戰から述べてみよう。

英露とペルシヤアフガニスタン

アフガニスタンは、古來より印度征伐の道筋であつた。例へば紀元前六世紀頃のペルシヤ王ダリウスの印度征伐も、アレキサンダー大王の遠征も、皆アフガニスタンを經由したものである。

だが同方面に於て英露の角逐が始まつたのは、一八〇七年に、ナポレオン一世がロシヤのアレキサンドル一世と結び、ペルシヤ、アフガニスタンを經由して、印度征伐を策した時からである。この時印度を握る英國は、使節をペルシヤ及アフガニスタンに送つて防守同盟を結び、ロシヤに備へた。而來英露兩國は各々アフガニスタンを懐柔して自家藥籠中のものとなすため、百方手段を盡したので、同國に於ける英露の勢力は一伸一縮した。

然るに日露戰爭の結果ロシヤが大敗して、その手を外に向つて伸ばすことが出來なくなると、英國外相グレーは好機逸す可らずとなし、一九〇七年八月英露協約を結んで、印度の邊境に對するロシヤの進出を、一時的に阻止した。この協約により、アフガニスタンは英國の保護國となり、その外交は一切英國の手を經るべきことを、英國はロシヤをして承認せしめた。こうして百年間の兩國の角逐は兎も角も一時的には終熄した。

だが世界大戰の結果民族自決の聲が喧しくなると、アフガニスタンも亦その例に漏れなかつた。即ちアフガニスタン王アマヌラ汗は、英國の羈絆を脱せんとして、ロシヤの支援の下に兵をあげ、獨立を宣言しつゝ、兵を印度國境に進め、印度政府に對して獨立の承認を要求した。これが一九一九年五月のことである。結局英國側は折れてアフガニスタンの獨立を承認した。

英國の後退はロシヤの前進を意味する、何となれば革命後のサヴエト・ロシヤは、帝政時代の政策を襲ふて又もや膨脹政策へと轉向したからである。ロシヤの宣傳した各民族の均等主義、弱小民族の解放主義は、忽ちにしてアフガニスタンに勸迎され、一九二一年二月には、ロシヤとアフガニスタン間に一の條約が結ばれて、兩國は益々接近した。この條約によりロシヤは、嘗て英國が行ひ來つた懐柔策を踏襲して、アフガニスタンに毎年補助金を與ふることゝなり、それだけアフガニスタンは英國を離れてロシヤに近づいた。否それのみでない、ロシヤの懐柔策は更にその効を現はし、一九二六年には、ロシヤとアフガニスタン間に一の不侵略中立條約を締結し、兩國の一が戰ふ時は他の一方は中立を維持すること、兩國は互に侵略をなさゞること、並に相互に外國と同盟せざること等を約定した。こゝに至てアフガニスタンに於けるロシヤの勢力は隆々と

して遙かに英國を凌いだ。

然るに一九二九年に至り、新王ナヂル汗が王位に即くんに及んで、英露の關係は又々顚倒した、蓋しこのナヂル汗こそは、親英排露的色彩の濃厚なる人であるからだ。ナヂル汗は國内の不平分子を討伐した際にも、英國の援助の下に、印度から多數の武器彈藥の補給を受けてゐた。

こうゆう關係から、今日のアフガニスタンは寧ろ親英的であり排露的である。併しながらナヂル汗その人も本來アフガニスタン本位の人であり、英國の臣僕を以て甘んずるものでない。だがアフガニスタンが完全なる獨立國となるには尙前途に多年を要するであらう。果して然りとすれば、何かの機會に印度に猛烈なる國民運動が起り、印度駐屯の英國陸軍は之が鎭壓に惱殺されて又他を顧みるに遑なしとすれば、アフガニスタンがロシヤの與ふる好餌に食指を動かすことは極めてあり得べきことである。

英露とペルシヤ　ペルシヤに對する英露の爭覇戰も亦多年に亘り執拗に行はれた。帝政時代のロシヤが、カフカスの大都テイフリスから鐵道線を延ばしてタブリズに及ぼし、更に南下してペルシヤを衝かんとして、英國との間に衝突を惹起したなどは、世界周知の事實であ

る。然もペルシヤ政府は、無能と窮迫した財政、並に内部の不秩序の爲に、外國の干渉を受け易い狀態にあつたから、却て積極的にかゝる干渉を招致した。

首都で中央政府の所在地なるテヘランは、ペルシヤの北方にあるが、ロシヤは一擧にして之を衝き得る距離にあるのに、英國側からいへば全然手の屆かないところにある。こうゆう理由も手傳つて、ロシヤはテヘランに於ける外交的鬪技に於ては常に有利の立場に立つた。されば英國の一大臣がペルシヤ王を懐柔してロシヤに對抗させんと試みた時なども、王は自分の首の周りに弓弦（首に卷きつけて人を絞殺するもの）を卷きつけて、自國に對するロシヤの關係を指示したとさへ云はれてゐる。

然るにペルシヤに於けるロシヤの勢力が伸長すればする程、英國にとつては憂慮の種とならざるを得なかつた。蓋しロシヤがペルシヤ灣方面へと出ることは、歐洲より印度に至る英國の海上交通線を脅かすのみならず、印度の邊境に對するロシヤの脅威もそれが爲に增大するからであるこうゆう理由から、英國としてはペルシヤをアフガニスタンと同樣一の緩衝國となし、その獨立を保持する政策をとらざるを得なかつた。

そこで英國外相グレーは、日露戰爭後の一九〇七年八月に前記の英露協約を結ぶや、ペルシヤ

に關しても兩國の取極めを行ひ、ロシヤは印度に接するペルシヤの一部に對して侵略を行はざると共に、英國も亦ロシヤに接するペルシヤの一部に對し、同樣侵略を行はざることゝした。印度の邊境に對する安全はこれに依て確立したのである。

だがこの協約には、ペルシヤ灣全部は英國の勢力範圍內に包含せしめてはない、これは英國外交の巧妙なるところで、既に日英同盟の結果極東に於ける不凍港を獲得することが不可能となつたロシヤとしては、中東に於ける不凍港までも之を阻止するは不合理であると考へた英國は、譲歩してペルシヤ灣全部を中立地帶となし、英露兩國ともに之に手を觸れないようにしたのだ。然るにペルシヤ灣を中立地帶とすることは、換言すればロシヤのペルシヤ灣方面への進出を阻止することを意味し、それだけ印度に至る英國の海上交通線は安全となる。こゝに至てこの外交的鬪技は全然英國の勝利となつた。

世界大戰になると、ペルシヤは中立國であつたにも拘らず、各國はペルシヤに軍を進めて到るところに戰つた。これはペルシヤが有望なる油田國である關係上、彼等の注目の的となつたのだ。就中英國はその出店ともいふべき英波石油會社の擴張にこれまで全力を注ひで來た。偶ま有

望なる油田が英露協約による中立地帯内にあることを知つた英國は、一九一五年三月英・露・佛の三國間に一の秘密條約を結んで、英國は戰後ロシヤにコンスタンチノープルを領有せしむる代償として、ロシヤはペルシヤに於ける中立地帯を英國の勢力範圍として認めることゝした。然るにその内にロシヤに革命が起り、ロシヤは非帝國主義を宣言してペルシヤから撤兵してしまつたので、この約束は反古になつた。だがサヴエト・ロシヤは傳統の南下政策を永久に放棄するものでない。果せる哉赤ひロシヤは間もなく假面を脱して來た。そしてテヘランに於ては、英露のもの凄ひ角逐が又々行はれるようになつた。

大戰後になると、ペルシヤにも赤民族自決の嵐が吹きこんで來た。この嵐を利用して舊政府諸共王朝を覆へし、一躍ペルシヤ皇帝となつたものが新帝パラウイである。彼は英露の爭ひに乘じて新興ペルシヤを起したのだ。蓋し大戰前の英露はペルシヤを廻つて鬪つてはゐたものゝ、それでも尙帝國主義國家としての一致點はあつた。然るに赤ひロシヤが現はれてからは、この一致が完全に毀れてしまつたので、彼はその隙に乘ずることが出來た。

新興ペルシヤが第一に血祭りに上げたものは英波石油會社である。即ち昨年十一月二十七日ペ

ルシヤ政府は突然同會社に對して利權取消しの通牒を發した。ペルシヤ政府がかゝる通牒を發したのは、同會社との舊ひ契約が一方的であつて、ペルシヤ國民の利益を無視して行はれたものであるから、之を取消し、更に新たに契約を結ぼうと云ふにある。そして舊契約書を公衆の面前で燒き棄てゝしまつた。本來なれば英國は兵を差し向けて之を庸懲するのが例であるが、時代の進歩を認めた英國では、暴に酬ゆるに暴を以てする手段をとらずに、從順しく交渉を續けてゐるがこれは軍人萬能の國などには見られぬ美德である。

英露は宿命の敵　以上は主として印度、アフガニスタン、ペルシヤを繞つて、英露兩國の爭覇戰面にも烈しい爭ひが續けられつゝある。一言にして云へば、ロシヤは英國の張繩内に破壞作業を斷行しつゝあるのだ。蓋しロシヤの狙ふ對象物としては、英國を狙ふのが一番價値があり、且又容易であるから。

世界大戰前の獨逸は武器を以て世界を征服せんとしたが、赤ひロシヤのもつ武器は、或意味から云へば獨逸のものよりも一層鋭利である。何となれば獨逸のものは單純であつたが、ロシヤの

ものは民族自決主義であり、平等であり、自由であり、且黄金であるからだ。この武器は就中壓迫された國民に利き目がある。さればこそロシヤがこの武器を振りかざして臨めば、バルカン諸國は勿論、ペルシヤもアフガニスタンも、支那も、外蒙も、蓊然としてロシヤの振りかざす軍旗の下に靡いて來るのである。然るに壓迫された國民を解放することは、換言すれば英國の羽翼の一半否その大半を拐ぎ取ることを意味する。況んやその拐ぎ取つた所に、ロシヤは魔手をさし延べて暖かき海への出口を求めんとする以上、英國にとつては愈々以て危險千萬である。

果して然らば、ロシヤは英國にとつては天人共に許さゞる仇敵であり、英露の關係は兩立せない惡緣關係である。かの一九二七年五月に、時のボールドウキン政府が、英國の機密地圖をロシヤが窃取したといふ理由により、在ロンドンの露國通商本部アルコス・ハウスを手入れしたところ、それが赤化宣化の本部であつたといふ理由を楯に、對露斷交をやつたなどは。第三者からみれば兒戯に類するようでもあるが、英露の關係が然く宿命的のものであつてみれば何も驚くには足らない。

されば太平洋戰爭は、ロシヤにとつては願つたり叶つたりで、多年の宿望たる暖かき海へと出るにも又となき好機である。ロシヤは英國に味方する理由はない、なぜなら英國に味方することは多年の宿望を一朝にして放棄することを意味するからだ。勿論ロシヤは或時機までは中立を守つて形勢の推移を觀望するであらふ。と同時に日英兩國からは吸へるだけの利益を吸ひ取ることも忘れないであらふ。だが日本の旗色が少しでもいゝと見たならば、日本と妥協してペルシヤ灣、印度洋方面へと南下策に乘り出すことは極めて見易き道理である。要は日本がロシヤの狙ふところの何ものであるかを看破して、之を己の方に引付くるよう機宜の策を誤らざるにある。

（以下二行削る）

第十章　日英戰つたら

一　南支那海方面に派遣し得る英海軍力

海上貿易路の保護

以上述べた狀況の下に、一九三六年頃に日英戰爭が起ると假定するならば、戰爭の勝敗はどうなるか？　この問題に答ふるには、英國はどれだけの海軍力を、決戰場裏たる南支那海方面に派遣し得るかを先づ知ることが何よりも肝要である。何となれば英國は如何に多數の軍艦を同方面に派遣して、日本と勝敗を一擧に決せんとしても、全世界に跨る海上貿易路を保護する必要上、若干の軍艦は之を割くを餘儀なくされるからだ。然らば英國はどれだけの軍艦を貿易路保護の爲に割くものと想像し得るか？

前にも說ひたように、英國の重要なる海上貿易路の幹線とも云ふべきものは五つであり、(1)北米航路、(2)南米航路、(3)アフリカ航路、(4)太平洋航路、(5)歐洲航路だ。これ等の中印度以東の太平洋航路は戰爭の爲め殆んど杜絕し、濠洲、新西蘭と英本國間の海上交通は、主としてマゼラン海

峽又は南米の南端を迂回して行はるべく、又南北米航路は、太平洋航路が杜絕する結果、勢ひ活潑となることは爭はれない。

これ等の事情と現に有する英國海軍根據地との關係を考へてみるならば太平洋戰爭中英國が主として海上貿易路保護の爲め、軍艦を派遣するを必要とする地點は少くも次のようなものであらふ。

(1)英本國方面、(2)地中海方面、(3)喜望峰方面、(4)紅海方面、(5)ボンベー、(6)コロンボ、(7)カルカッタ方面、(8)ラングーン、(9)北米方面、(10)南米方面、(11)カナダの太平洋方面、(12)濠洲新西蘭方面、

假りに濠洲、新西蘭は、各獨自の海軍を本國方面に引つけておくものと假定すれば、右に要する巡洋艦、驅逐艦の隻數は、少くも巡洋艦十八乃至二十隻、驅逐艦五十四乃至六十隻を要し、その結果は主力部隊と共に南支那海方面へと東航する補助艦の勢力に著しき不足を來すことゝなる。況んや濠洲、新西蘭は、不安の餘り必要なる軍艦の派遣を英本國に要求すべく、英國としては之にも耳を傾けざるを得ないであらふことを考へたならば、右の補助艦勢力は尙も減少するの

である。英國の擧ぐる悲鳴の一はこゝにある。

次に潜水艦は如何と云ふに、英國は七百噸以下のもの十數隻をもつてゐる。これ等は多くは根據地の防守に任すべく、從つて支那海方面に使用さるゝものは、僅にその中の數隻に過ぎないであらふ。

南支那海に派遣し得る兵力　以上の事情を綜合して考へるならば、日本艦隊と勝敗を決せんが爲め、英國が南支那海方面に派遣し得る兵力は、戰艦十二隻、巡洋戰艦三隻、一萬噸八吋巡洋艦十乃至十一隻、八千三百噸八吋巡洋艦二隻、乙級巡洋艦二十四隻、驅逐艦六十隻、潜水艦四十隻と、外に航空母艦四乃至五隻に過ぎないであらふ。

これに對して日本は、戰艦六隻、巡洋戰艦三隻、甲級巡洋艦十二隻（内八隻は一萬噸八吋砲）、乙級巡洋艦二十一隻、驅逐艦六十隻、潜水艦三十七隻、航空母艦六隻を使用することが出來る。

これに依て見る時は、日本は戰艦と一萬噸八吋砲巡洋艦に於ては、英國に比して劣勢なるも、その他の軍艦に於ては必ずしも恐るゝに足らないことがわかる。況んや之を戰術上からみても、英軍は乙級巡洋艦と驅逐艦に不足する結果、日本の漸減作戰を容易ならしめ、又決戰場裡に於ける我が行動をも有利ならしむることが出來、それだけ英國側の不利ともなるのである。

戰勝の要件　果して然らば、日本は機先を制して、英國の支那艦隊に屬する甲級巡洋艦の少くも三乃至四隻を擊沈し、又漸減作戰により、英國の戰艦六隻を擊沈することに成功するならば、南支那海の決戰々場に於ては互角の勢力を以て戰ふことが出來、それだけ我が勝利の算は確實となるのである。問題はこの戰艦六隻と甲級巡洋艦三乃至四隻である。

若しも日本の外交が拙劣にして、英國が優勢なる艦隊をシンガポールに集中した後、開戰の已む可らざる狀態におかるゝならば、戰勝の要件たる右の戰艦及甲級巡洋艦の擊破は、極めて望み薄しと謂はねばなるまい。何となれば、かゝる場合には、日本は漸減作戰をなし得る餘地が極めて乏しきのみならず、支那艦隊の甲級巡洋艦も、逸早く香港附近を去つてシンガポール方面の主隊に合するを得るからである。故に英國が優勢なる艦隊をシンガポールに集中した後に日英戰爭が起る第一の場合に於ては、英國は例へ乙級巡洋艦以下の隻數に於て不足を告ぐるとも、日本に對する決戰は恐るゝに足らない。換言すれば英國は意を安んじて日本と戰ふことが出來る。

だが我が俊敏なる外交家達は、かゝる拙劣さを演ずるものとも思はれない。然らば最も起り得

る可能性の大なる前記第二第三の場合に於ては、勝利の軍扇は日英何れの側に擧るであらふか？

即ち次に第三の場合、即ち優勢なる英國艦隊はシンガポールに向ひ、歐洲方面を東航中であり、その支那艦隊は香港附近にある時開戰となつた場合に於て、海上には如何なることが起るか、勝敗は日英何れの側に歸するかを豫想してみよう。

二　日英戰つたら——戰爭第一期

萬一にも日英戰つたら勝敗はどうなるか？　これを豫想したものに、英國海軍大佐 Bernard Acworth 氏がある。氏はその近著 "The Restoration of England's Sea Power" 中に、これを次のように書いてゐる。

他國からの援助　極東に於て日本と戰ふ場合には、英國は歐洲及米國より精神的援助を受ける以上には、何ものも期待することは出來ないとしなくてはならない。そうゆう精神的援助は、一寸考ふれば何の役にも立たぬようではあるが、併しそれは絶對に必要であるのだ。なぜなら、それがなければ、英國は歐州方面をがら空きにして、艦隊を太平洋方面に派遣することも出來なければ、外國から燃料を得ることも出來ないからだ。

西洋諸國は英國を援助するために一艦一兵を送らなくても、精神的援助さへ與へてくれゝば、日本は大に弱るであらふ。なぜなら、日本は工業原料品、殊に燃料の如きものは、その大部の供給を外國に仰いで居るからだ。併しながら西洋諸國が英國に精神的援助を與へたからといふて、日本に對する外國からの燃料や工業原料品の供給を全然杜絶することが出來ると思ふならば大間違ひである。歴史は繰返すものなら、日本は必要に迫らるれば、外商を通じてこれ等の物品を得ることも出來れば、蘭領東印度の油田に手をかくることも想像し得るのだ。

日英兩國の兵力　次の問題は、一九三六年に於て日英兩國はどれだけの海軍力を利用し得るかといふことだ。次表はこれを示してある。

艦種	英(隻數)	日(隻數)
戰艦	一二	九
巡洋戰艦	三	一
巡洋艦	五〇	二九

但しこれは紙上の勢力であつて、英國の軍艦中には、巡洋艦十四隻、驅逐艦五十四隻、潜水艦二隻は老齢艦で、極東に派遣し得ることが出來るか疑問である。人員も直ちに補充し得ることは出來ないだらふ。之に反して日本の方は老齢艦少く、人員も直ちに戰時の用に立つことが出來るゆへに日英兩國海軍の實勢力を比較する場合には、英國の方は大分減らさなければならないがこゝでは危險ではあるが、これをしないで、前掲の勢力を基準として論じてみる。

陸軍は全然問題外である。英國の陸軍は印度や植民地を守るだけが關の山で、一萬浬を距てゝ我が陸軍を支那方面に派遣するなどは夢想だに出來ない。

されば近き將來に日英間に戰爭が起るとすれば、その戰爭は海軍だけであつて、陸戰は豫想することは出來ない。依て次に海戰の狀況を豫想してみよう。

英艦隊　英艦隊の主力部隊は歐洲方面にあるから、戰場からは一萬浬離れた西方にある

の配備　支那艦隊は香港を根據地とするものと假定して、その勢力は僅に巡洋艦七隻、驅

逐艦九隻、潜水艦十二隻、スループ五隻で、臺灣に前進根據地を有する日本の全艦隊と直接に對抗することにならふ。

歐洲方面にある英國の主力部隊よりも稍々近いが、それでも尙香港から數千浬距てたところには濠洲及新西蘭海軍がある。前者は巡洋艦四隻、航空母艦一隻、驅逐艦五隻より成るが、中六隻の軍艦は就役してゐない。新西蘭海軍は、舊式巡洋艦二隻と二隻のスループからなり、極めて貧弱である。右の外東印度艦隊として、三隻の巡洋艦と三隻のスループがある。ゆへに濠洲及新西蘭海軍は直ちに出動し得ると假定しても、支那艦隊に增勢し得るものは、巡洋艦九隻、驅逐艦五隻、スループ五隻であつて、それも無雜にシンポールに辿りつくと假定しても、數週間後のことである。

香港と新嘉坡　艦船は先づそれとして根據地は如何。支那海方面に於ける英國艦隊の戰略的根據地となるのは香港であるか、同港には極東のスカパ・フローともいふべきマース灣の良港はあるにしても、平府條約で香港の價値は著しく減ぜられてゐる。その防備は薄弱で大艦隊に對する補給や修理も貧弱であり、乾船渠は戰艦、巡洋戰艦、又は航空母艦を容るゝに足

らない。英本國以外に修理の能力があるかないかを考へずに、只だ大艦のみを造つたフイツシヤー卿の弩級艦政策が到達せるところは、結局かような恐るべき結果に外ならなかつたのだ。

シンガポールは陸上要塞と游動艦船で防禦される軍港であり。如何なる大艦をも入渠し得る浮船渠をもつてゐるが、日本の重なる港からは南方約三千浬も離れて居り、日本が海軍力を集中すると思はれる北支那海からは距離餘りに遠過ぎるから、英國艦隊用としては、例へ作戰不可能でないとしても、その價値は貧弱であらふ。

日本の　戰略　以上述べたものが、開戰初頭に於ける日英兩國の對勢である。これに依て判斷する時は、日本は有形無形的に有力にして美ごとな海陸軍を利用することが出來るから、日本の戰略は自由自在であると考へ得る。

然らばこの壓倒的優勢の兵力と、就中重要な戰略上の先制の利益とを以て、日本は開戰初頭何をなすであらふか？

滿洲大陸はその人口ロンドンよりも小いので、人口過剩の日本は垂涎しつゝあると滿洲人は危惧してゐるが、日本人は同地の攻略は馬鹿〳〵しいことだとして顧みないだらふ。なぜなら、滿

洲の運命は、シドニーから數千浬離れた支那海上で決せらるゝからだ。即ち滿洲はこの時始めて自國の局地防備や飛行機等に金を費やしたことを悔むだらふ。

シンガポールの守備軍も安眠を續けて可なりである。日本軍はそこにも攻めては來ないであらふ。

列國がジエネバでリツトン報告の調査に數ケ月を費やしてゐる間に、日本は孜として軍備を整へ、燃料食料及その他の軍需品を蒐集した。即ち開戰となれば、日本は疾風迅雷の勢で、先づ海戰を決行することに決つてゐる。然らば日本軍の第一の目標となるところはどこか、云はずと知れた香港であるのだ。

香港の　攻略　開戰後一時間にして日本艦隊の一部は出動し、直ちに香港の攻略に向ひ、又日本陸軍の一部は、艦隊の掩護の下に、香港に近い大陸側に上陸するだらふ。これに反して、歐洲方面にある英國の主力艦隊は、二ケ月後でなければ、支那海方面には到着することは出來ない。

香港にある英國艦隊（巡洋艦七隻、驅逐艦九隻、潛水艦十二隻、スループ五隻）及び陸兵（歩

兵三大隊と外に少數の要塞兵）は、開戰後四日にして、四隻の主力艦、四隻の航空母艦、二十五隻の驅逐艦、三十隻の潜水艦と、恐らくは十二隻の陸軍運送船を伴ふ日本艦隊の來航するを見るだらふ。

そうゆう優勢な日本艦隊の來航に對しては、香港にある支那海艦隊司令長官は眞に苦しい立場に立つことになる。同長官もしその麾下艦隊を香港に留むるならば、味方主力艦隊の來着までの二ケ月間、日本の海上交通線に對して奇襲戰を試みることは出來ない。勿論艦隊の香港殘留は同地の防禦を强むるの効果はあるが、要塞が陷落すれば艦隊も亦捕獲されるから、速かに脱出せなければ、結局全滅の悲運に遭ふものと覺悟せねばならない。

これに反して、萬一香港の包圍前に脱出し得たとしても、北支那海方面には適當な根據地がないから、有効な作戰をなすことは出來ない。それのみか麾下七巡洋艦の喪失は、味方の主力艦隊が東洋に到着した時には、回復す可らざる打擊となるだらふ。ゆへに支那海艦隊司令長官としては、以上の心細い立場を考慮して、日本艦隊よりの封鎖を受くる數時間前に香港を脱出し、七隻の巡洋艦を率いてシンガポールに至り、附近の根據地にある九隻の巡洋艦と五隻の驅逐艦を合

せ、歐洲方面から來る味方主力艦隊の到着を待つのが得策である。かくして彼はその旗艦をケントから一隻の軍事驅逐艦に移し、十二隻の潜水艦と九隻の驅逐艦、五隻のスループと共にシンガポール要塞に對する日本側の近距離封鎖を防止することにならふ。

開戰後四日にして、陸軍運送船隊を伴ふ日本の艦隊は、香港の直前に現はれるだらふ。この日本の艦隊中十五隻の驅逐艦は、遠征艦隊と運送船隊に對して掩護の任務に服するだらふ。

兩後の作戰はこゝに詳記する必要もない。日本艦隊は香港にある潜水艦や驅逐艦からの攻擊は受けても、丸二ケ月の間は、英國の主力艦隊からは何等の攻擊も受けずに香港の攻略を續けるだらふ。日本の航空母艦から飛ぶ飛行機は、絶へず香港の偵察と爆擊を續けるであらうが、日本艦隊の遠距離射擊は、飛行機からの爆彈投下と同樣、香港の陸上要塞を全然無能ならしむることは出來ないにしても、相當大なる損害を與へることは出來るだらふ。

その間香港にある防禦軍の抵抗は、十二隻の潜水艦が中心になつて行はれ、最大の効果を發揮するだらふ。即ち日本の驅逐艦は頗る優勢なるにも拘らず、英の潜水艦は屢もなく或る損害を日本艦隊に與へるだらふ。なぜなら、これ等の潜水艦は、非常なる熟練と決心とを以て操縱さるゝ

こゝと考へるのが至當であるからだ。それにも拘らず、日本の壓倒的な優勢艦隊に對しては、これ等潜水艦の異常に勇敢な行動もその効なく、日本軍は二週間以内にその陸軍を揚陸し、要塞を陥落さすことが出來るだらふ。

英國對支貿易の全滅　かくて極東戰爭はその第一發から、既に英國にとつては不幸な結果となつて現はれるだらふ。香港の陥落と共に、支那に於ける英國の貿易は完全に全滅するだらふ。——勿論それは開戰の數時間後には完全に全滅されぬとしても——日本の方は有力な守備隊と充分な巡洋艦を香港に殘し、同地を支那諸港の封鎖用の適當な根據地となしつゝ、日本艦隊は必要な修理をなす爲に本國の根據地に引揚げ、香港には糧食、燃料、大砲及び他の必需品を集め、マース潤は大戰中の英國艦隊に對するスカパ・フロウとなるだらふ。

かくて戰爭の第一段は、日本の艦隊や陸軍は、輕少の損害を以て香港の占領に成功することで終るだらふ。西洋との日本の貿易は大に減少しても、全然杜絶することはあるまい。なぜなら、貿易者は無數の實例が示すように、想像か又は國際聯盟によつて宣言された對日ボイコットを、見て見ぬ振りするのが例であるからだ。それのみか日本と西洋との貿易は減少しても、西洋と支

那海地方との間に行はるゝ莫大な貿易は、これを日本の諸港と支那海方面との間の貿易に轉向することが出來るから、日本の損失の大部は之を補ふことが出來る、實に歐洲やアメリカにとつては、支那や日本との貿易は全然杜絶するのに、日本に對するボイコットは只だ部分的にしか行はれないだらふ。支那は名目上には日本と戰爭狀態にあつても、支那の商人や沈默の大衆等は、そうゆう政治上の問題には眼を掩ふて、依然として日本との貿易を續けるであらふ。

三　日英戰つたら——戰爭第二期

二つの假定　香港の陥落、歐洲諸國の對支貿易の全滅となれば、實際は之を以て戰爭の終結と見るのが至當であるが、かりに議論を進め、且つフイツシヤー卿以來、英國海軍政策を指導してきた誤つた戰略論を是正するため、戰爭は尙も繼續するとみて、二ケ月以内に英國の大艦隊は無事シンガポールに到着したとしてみよう。但しそれには二つの假定が必要である。即ち英國艦隊は歐洲方面をがら空きにして全部東洋に派遣されたこと、並にそうしても歐州列强は英國の弱味につけこむことはないといふ場合である。さもなければ、英國艦隊を二分して

一つは歐洲方面に殘し、他は東洋方面に派遣し、然も一方又は兩方の戰場で敗をとらぬだけの充分の軍艦を分割するより外はない。

決戰場は日本領に　シンガポールに集中さるゝ英國艦隊は、日本の軍港から三千浬、日本軍の占領の下にある香港から千八百浬のとこにあるが、その大艦隊はフイツシヤー卿得意の大速力を有するにも拘らず、果してこの大きな馬力を利用することが出來るだらふか？　或る軍艦は經濟速力で、日本の根據地たる香港まで往復するに精一杯であるから、もし日本の艦隊が何等かの理由で決戰を欲せず、本國方面に引揚ぐるなれば、英國艦隊の速力では、日本艦隊に戰ひを强ふることは出來ない。日本艦隊は戰ふに都合のいゝ時を選定することが出來るのだ。

日本の艦隊司令長官は、戰はんが爲めにシンガポールに近づき、かくして英國艦隊の爲めには最近の根據地と入渠設備のあるところから、二千浬も離れたところで戰はねばならぬ戰略上の困難を救ふてくれるものとは思はれない。否日本の艦隊としては、シンガポールに遠征するの愚舉に出でず、支那の各港を封鎖しつゝ、香港の北方海面――南方海面でない――で決戰せんとするだらふ。即ち戰略上のイニシヤチブは、全然日本艦隊の司令長官の手中にあるのだ。

英艦隊のシンガポール　英國艦隊もしその根據地を二千浬も離れたところまで進んで、日本艦隊に挑戰することが出來ないとすれば、封鎖は繼續され、結局英國は降參するの外はあるまい。これに反して英國艦隊がシンガポールを距る遠いところで決戰を試みんとするならば、決戰場裏に至るまでは燃料を節約する爲めに低速力を用ふるを餘儀なくされるだらふ。しかし低速を用いたところで、相當永い時間高速を用いたとすれば、燃料不足してシンガポールには歸れなくなるだらふ。

英國艦隊は、完全に補給され充分な燃料をもつて居る日本艦隊と戰ふため、低速で決戰々場へ向ふとしても、後方二千浬に船渠や修理用設備をもつのみか、今や香港は敵手に落ちて日本の大砲から砲擊さるゝような有樣では、どうして決戰を企てることが出來よう。

香港の價値　結局香港が英國の手中になければ、シンガポールは軍港としては役に立たない。香港が英國の手中にあり、且適當な施設をもつて居ればこそ、シンガポールの防禦と海軍工廠としての大施設はものをいふのである。

之に反して日本は香港さへ手中に收むれば、英國の貿易を抑へ、支那を任意に扱ひ得るのみな

らず、遂には一兵も用いずして、濠洲やシンガポールを割譲せしむることも出來る。かくて香港の總督官邸に日章旗が揭げられたが最後、これは英國々運衰退のシンボルとなつて、獨り極東に於ける最後の衰退となるのみならず、その對蹠的な反對側でも同樣の運命に陷るだらふ。

あてにならぬ米の協力　上述のような不吉な想像に對しては、アメリカが火中の栗を拾ふ役をつとめてくれるだらふ、といふ人があるかも知れない。日英同盟がなくなつた以上は、アメリカはそうするだらふと云ふのだ。併しながらそうゆう考へを抱く人は、アメリカは國際聯盟を振り捨てゝ、歐洲諸國民と責任を分とうともせなければ、報酬が疑問である場合には、見て見ぬふりをしたことも忘れてはならない。とはいへ、そうゆう考慮を問題外におくとしても、アメリカは大規模な戰爭にまきこまれて、非常な責任を分擔することは敢てせないであらふし、殊に戰爭の結果、濠洲に對する日本の移民問題が、自發的にか又は强制的に解決さるゝとすれば、アメリカ自身の面倒は免れることになると考へるかも知れない。

以上の推論が悉く當らずとしても、次の一事だけは明瞭である。卽ち英國が單獨で極東の海上權を爭ふことになれば、今日の位置はいつまでも保つことは出來ないといふことだ。

第十一章　目醒めよ！　英國民

一　盛衰の岐路に立つ英國

英國は今盛衰の岐路に立つてゐる！

第十九世紀以來產業革命と自由貿易の潮流にのつて世界を支配して來た大英帝國は、今や世界二の雄邦としてその位置を保ち得るか否か頗る疑問である。

世界の產業と金融、通商の中心であつた英國は、今やその覇權をアメリカその他の國々に奪はれ、世界的領土の中心であつた英本國は、今やカナダ、濠洲、南阿、印度等の自治領や植民地を如何にして引つけおくかに腐心しつゝある。こゝに大英帝國の惱みがあり、盛衰の原因がある。

時代に後れた英國　英國は鐵と石炭の天惠、豐富なる資本、生產費の低廉、民族の能力により、他國を眼下に見下ろして來た。故に石炭と蒸汽が工業動力の中心であり、自由貿易が持續し得る限り、そして又勞銀が社會立法の爲に影響を蒙らざる限り、英國は何國の競

爭をも恐れない世界唯一の雄邦であつた。

だがそれは世界大戰を轉機としてがらりと變つて來た。例へば工業の動力は石炭と蒸汽から重油と電氣時代に變り、自由貿易は次第に影を潛めて、各國とも猛烈なる保護政策とブロック經濟に熱中し、又英國の社會立法は勞銀の低下を妨げて生產費を高くし、こゝに失業者の續出となつた。そして英國人が『どうにかなるだらふ』と氣樂に構へてゐる間に、世界は寸秒の猶豫もなく一變して了つた。

英國は時代に後れたのだ。

鐵と石炭　先づ鐵と石炭と重油とを見よう。英國はフランスの批評家ミシュレーが云つた

と重油　ように、『鐵と石炭の大塊』であり、この大塊の上に英國は世界を支配して來た。然るに大戰の少し前からこの支配權は崩れかゝつて來た。例へばアメリカや獨逸の如きは鐵と鋼の產量を一九〇〇年から同三年に至る三ケ年間に二倍してゐるのに、英國は僅かに二割を增加してゐるに過ぎない。石炭に至ては、英國は三割弱の增加であるのに、アメリカは二倍以上に增加してゐる。この狀況は大戰後に至て特に著るしく、殆んど釣瓶落しと云ふも差支へない狀態で

英國の產出額は減少して來たのである。

かように鐵と石炭の產出量が減少しつゝあるのに、他方に於ては重油や水力電氣の力は沿々として石炭の領域を蠶食しつゝある。英國は水力電氣に乏しく、必要とする重油もこれを外國に仰がねばならぬ狀態であり、その前途は實に悲觀すべきものである。さればこそ世界の到るところにアメリカと猛烈なる爭ひを演出しつゝあるのである。

自由貿易の動搖　英國が鐵と石炭により世界を司配しつゝある間は、自由貿易主義は英帝國に最も適したものであつた。元來英國はその國際的の事情から考へてみても、とても孤立を許さない國民であつて、國際の共存共榮に俟たねばならぬ國民なのである。英國の金融業及商業は貿易に依て消長するのであるが、英國はこの國際關係を利用してこそ產業を營み得るのである。だが英國の產業が最大の弱味をもつ爲には、生產費が低廉であり輸出が多くなければならない。これが爲には保護政策に依ては何ものも得るところはない。

然るに世界大戰はこの自由貿易主義を根柢より搖がせてしまつた。保護貿易主義者は云つた、若しも英國が自由貿易を採用せなかつたならば、英國自身は既にとうの昔自給自足の國となり、

從つて戰爭中に苦んだような、物資の缺乏に惱むことはなかつたであらふと。この事實に立脚する保護主義者の一齊射擊に對しては、自由貿易主義者達は沈默を守るの外はなかつた。況んや世界戰爭の結果として、各國民間に民族主義の叫びと自給自足の希望とが漠然として起り、それが遂に關稅戰爭の世界を現出するに至ては、自由貿易主義は勢ひ時代後れとならざるを得ない。

この時代後れの自由貿易主義は、その他の原因と相俟て、英國の海外貿易に甚大の影響を與へた。例へば英國の海外貿易は、大戰以來バランスシートが毎年入超の數字を大にして赤字を增大しつゝある。即ち一九二一年に於ける輸出と輸入の百分比は、入超二億七千六百萬磅(七四%)より同二九年には三億八千二百萬磅(六九%)となり、これに貿易外の受取勘定を差引ひても、年に約二億磅位の支拂超過を示すようになつた。一方輸出貿易の如きも、一九二九年には戰前の八割に減じてゐる。英國が悲鳴をあげるのも尤もな次第である。

時代後れの工業　この貿易不振の一の原因には、英國が依然として時代後れの工業を踏襲しつゝあることも見落してはならぬ。何人も知るように現代の世界が最も多く需要する商品は、自動車、ラヂオ、蓄音機、電氣器械、シネマ器具、スポーツ用具等の新らしひ製品である。

る。然るに英國の工業組織と技術は時代に後れてゐるので、アメリカや獨逸の爲に壓倒され、漸次に世界の市場から驅逐されつゝある。我が棉製品に對してマンチエスターが悲鳴をあげつゝあるのもこの理由に外ならない。

試みに一九一三年より同二五年に至る機械類の生産を示せば次のようである。

	一九一三年	一九二五年
アメリカ	五〇・〇%	五七・一%
獨逸	二〇・六%	一九・六%
英國	一一・八%	一一・六%

事實一九二〇年から始まる時代に於ては、世界の主要工場はアメリカであつて、英國は獨逸にさへ壓倒されつゝあるのである。

況んや英國の産業組織も既に時代後れとなり。大量製産に適せなくなつて來た。アメリカが高ひ賃銀を拂ひつゝ、低い生産費で競爭し得るのは、全く産業組織の良好なる爲である。この點でも英國はアメリカやその他の國の爲に壓倒されつゝある。

同様の變化は財界にも起りつゝある。大戰前ロンドンは世界の金融市場であつたが、今では紐育がその地位を占め、ロンドンの金融市場は、外國に放資する餘力をさへ失ひつゝある。

大戰前アメリカは債務國であつた。英國一國のみでもアメリカに對して三十五億弗の資本が投下されてゐた。然るに今日ではその地位全く顚倒して、英國からアメリカに支拂ふ戰債は一九三二年までは一ケ年約一億六千五百萬弗、一九三三年から一九八四年までは一ケ年一億八千五百萬弗となつてゐる。この間年々アメリカの資本の輸出は、英國の資本輸出額の三四倍に及んでゐる

こうして經濟上の覇權は既に英國からアメリカに移つてしまつた。

屬領及自治領との關係

以上は對外的に英國が漸次にその優位を失墜しつゝある原因を示したものである。然るに英帝國には、之を對内的に見るも、一種の癌とも云ふべき容易ならぬ禍因が伏在して居り、その發展如何によつては、英帝國それ自身の分裂を來す恐れがある　これ即ち英本國と自治領及屬領との關係である。

英國の屬領たる印度とエヂプトが、英國に對して如何に叛きつゝあるかは既に之を述べた。こ

の關係は程度に差こそあれ、愛蘭自由國にも之を當嵌むることが出來る。然るに英國の惱みはこゝに止らずに、母國と父子の關係にあるカナダ、濠洲、新西蘭、南阿聯邦と英本國との間にも、容易ならぬ障壁が築かれてゐるのである。

これ等の自治植民地は、始めには外交軍事上には何等の發言權ももたず、只だ英本國が他國と通商條約を締結する場合にのみこれに參加するか否かを定むる位の自由をもつてゐた。然るに世界大戰はこの關係を一變し、大戰後には英本國と自治領は母國と屬領との關係でなくて、均等なる姉妹國であり、聯邦であるような關係に變つて來た。

新マグナカルタ

就中一九二六年に開かれた英帝國會議では、この關係は更に急轉して、英本國と自治領とは共に同等であり、各々獨立し、只だ元首として英國王を戴くといふ風に變つて來た。即ち

一、英本國も自治領も共に各々自治的コムミュニチーである。

二、これ等のコムミュニチーは、何れも英帝國の組織内に存在すること。

三、從つて内治と外交とを論ぜず、何れも平等であり、從屬關係は存在せない。

四、但しこれ等英帝國の各部は、國王に對しては共同の忠順を誓約する。

五、各部結合の精神は自治の原理によること、而してこの結合したものをブリチツシュ・コムモンウエルス・オブ・ネーションス(英國民自治聯邦)と呼ぶこと。

これで自治領植民地の地歩は高められ、權限は强められた。これ等植民地の政治には英本國は最早干渉することは出來なくなつた。外交に就ても自治領の地位は一層有力となつた。これが新たなマグナ・カルタと呼ばるゝ決議の梗概である。

理論と實際　だが理論と實際は往々にして矛盾するものである、英本國と各自治領との關係も亦これに漏れない。換言すれば法律的には平等であり獨立であつても、實際的にはそこに幾多の障害があつて、『左樣然らば』とは參らないのである。

この關係を最も明瞭に指摘したものは、『英國の危機』の著者ジーグフリードである、曰く、

植民地聯邦諸國は、皆英本國と父子關係であること、皇帝に對する忠誠とを承認はしてゐるが、その熱誠の程度は同一でない。濠洲と新西蘭は感情上に於ては忠實であるが、それは自營の範圍内に於てのみである。カナダは心中は忠誠であるが、獨立の資格を必要とし、地理的にはアメリカ的である。南阿聯邦は

分離されて、その離隔の點に於ては英はしい……自治領植民地が以上のやうな感想の下に立つて居つても帝國に對する感情上、一聯邦合同の組織は現も角持續されて來た。これは同一帝國内の諸邦であるとの事實から生じて來る盲從心が然らしめたので、外國人はこの點を見逃がし又は輕視してはならぬ。

この盲從心と一致して、表現の仕方の態度にも各々可なり違つてはゐるが、各自治領諸邦は何れも獨立に對しては自動的希望をもつてゐる。そして或る程度までは遠慮なく、有ゆる機會を捉へて獨立運動に浮身をやつしてゐる。心中では情熱的の英人であり、又獨立運動をすることを悲しんではゐるが、カナダと南阿とは自國の獨立を宣言し、之を公然と發表し、承認せしめ、範圍を擴張してゆく機會を決して逃しはしてゐない。濠洲も亦獨立を承認さるゝことを望んではゐるが、現在では現狀維持に甘んじてゐる。新西蘭だけは現在のまゝで充分に滿足してゐるのである。以上の狀態は、保守主義と進歩主義との兩思想が地理的に分布されてゐることを物語つてゐる。

今では老英國の息子達は皆丁年に達して、親に對する尊敬の念すら失ひかけて來たので、親は舊式的な忠誠に訴へようとしてゐる。併し一面には英本國を唯一の輸出市場としてゐる自治領諸邦では、經濟上から非常に堅い連帶を結んでゐる。新西蘭は輸出高の七割八分九厘を、南阿は五割四分四厘を英本國で捌ひてゐるので、經濟的聯盟は比較的堅い方だが、之に反して濠洲は四割七厘、カナダは三割五分四厘で、英

本國に對する經濟的結合は餘り堅いとは云へない。英國市場はこれ等自治領植民地の原料品の理想的捌け口となつてゐる。カナダと濠洲は小麥を、濠洲と新西蘭は生肉を、濠洲、新西蘭、南阿は羊毛を英本國に輸出してゐる。英帝國領諸邦は皆工業化した英本國の材料供給者であるのに、獨りカナダのみは段々工業品を輸出しては居るが、それでも矢張り英本國に原料品を賣つてゐる。

又經濟上本ないのは財的關係で、各自治領植民地は母國を以て主たる財源地としてゐるのである。自治領が金を借出そうとする時には自然ロンドンで借りようとする。カナダは完全にアメリカの軌道内に收めとされてゐて、英本國に負ふ國債は一割一分に過ぎないが、之に反して濠洲は四割八分、新西蘭は五割六分、南阿は六割一分を英國に負つてゐる。濠洲は一九三一年に殆んど不拂狀態に陷つたが、それでもロンドン財界の援助の下に財政をもちこたへてゐる。

英本國は帝國植民地間の起る度毎に退嬰主義をとつてゐる。自治領が數調を必要とする時でも、退嬰主義が習慣性となつて居る英本國は、自治領に眞相と彼等の責任範圍とに就て厳しく數調を垂れることをしないで、何時でも自治領の云ふがまゝを聽き入れてゐる。その結果母國――かく呼ぶことが出來るならば――は守勢に立つだんまりの役目を演ぜねばならぬのに、自治領は一分間も缺つて居れないと云ふ眞に、大言壯語し突進して專横を發揮してゐる。

英帝國ブロック經濟と植民地の内實

英本國と各自治領や屬領間には、上に述べたような種々の弱點があるから、昨年七月にはカナダのオツタワに英帝國會議を開き、帝國内のブロック經濟を組成することにした。それは英國は今まで自由貿易主義でやつて來たが、アメリカや獨逸は保護貿易主義をとり獨占市場をもつてゐる、然るに英國にはそれがない。然も工業は衰退し市場は外國から侵入されてしまう。だから之を防ぐ爲に獨占市場をつくらねばならぬといふので、後れ走せながらブロック經濟に向て突進することにした。即ち纖維工業に對しては各自治領植民地と協力して英帝國内の同一産業の發展を期すること、その爲めには特惠關稅を擴張し、從價稅を從量稅に改める。その他重要産業、羊毛、毛織、鉄工業等に就ても、英帝國内産業保護の爲め幾つかの決議を行つた。約言すれば英帝國内の經濟的協調政策をとることを協定したのである。

然らばこの英帝國内のブロック經濟は實際問題としてどの程度に實現の可能性があるかといふに、種々な障害や困難があることは免れない。元來英國のブロックは、植民地對本國の關係が農業と工業といふ眞に分業が行はれてゐる間は提携の餘地はあるが、それも今では可なり疑問になつてゐる。

と同時に自治領は母國に對しては他の外國に對するよりも優先權を與へようとしては居るが、同時に自己本位の信條を曲げようとはせない、例へば『カナダ第一』といふ標語は、カナダが臆面もなく張り出す看板で、これは他の自治領も大同小異である。現にカナダから英本國に輸入される小麥などは、オツタワ會議後却て減少してゐるので、これが問題になつてゐる。濠洲にしても、その他にしても、それ〳〵獨自の利害關係があるから、統一した協調は中々に困難である。從つてオツタワ會議の決議そのものも、必ずしもブロック經濟の原則の上に立つて居るのではない。そこには英本國と自治領間、並に各自治領間にも相當複雜な問題があるからだ。

母人と子　これを要するに英本國と各自治領との關係は、ジーグフリードガ巧みに譬へたように、老親爺と息子との關係である。既に結婚して世帶をもつて仕舞つた息子のような自治領は、英本國を老親爺と心得て居る。そして老人は息子達の家政に容喙の權はないものとしてゐる。息子達は近頃成功した兄弟を飾み、家長は若殿原の成功を喜んで『余がなしたこの功績を御覽』と云つて得意がつてゐる。普通古稀の域に達し、老熟しきつて來れば、若者達が先代を道の外に突き出そうとしても不快の念を現はさないものだが、英本國の態度はこれと異

つて、息子達は云ふことを聽かなくなつてゐるにも拘らず、これまでの親苦勞を楯に、親權を振舞ひ通そうとしてゐる。

以上述べたものが英帝國の悩みである。英國は實に一步を誤れば衰亡の域へと突落されんとしつゝあるのである。

二　生か死か日本の立場

生か死の境に立つ日本　英國は今下り坂にあるのに、日本は上り坂にある。日英の衝突は、これを換言すれば、下り坂にある英國がその頹勢をせき止めんとして努力しつゝある現狀維持主義と、張りきれんばかりに膨脹しようとする、日本の己むにやまれぬ膨脹主義との衝突である。然るに英國は下り坂にあつても尙有り餘る領土と資源をもつから、讓るべき餘地はあるが、日本にはそれがない。もしこれを讓つたならば日本人は餓死するの外はない。日本の現狀が生か死かの岐れ目にあるといふのはその爲である。

然るに日本にしてその過剩の人口を捌かんがため海外に移民を送らんとすれば、アメリカ合衆

國や英領植民では、『日本人入る可らず』の高札が立てられてゐる。そこで殘された活路としてアジヤ大陸に發展し、又世界各地に於ける商權の擴張によつて、國民の生存と繁榮を計らんとすれば、イギリスは聯盟やアメリカの力をかりて、滿洲事變の際に見るように、アジヤ大陸への發展を阻止するのみか、日本の通商に對してもその市場を閉鎖せんとして居るのである。日英關係こゝに於てか險惡とならざるを得ない。

日本の東洋政策　然らば東洋に於ける日本の政策は何か？　日本の立場を明白ならしむる爲には更にこの點を明白にしておかねばならぬ。

日本の東洋政策は、一言にしていへば、日本は東洋の安定勢力となつて東洋の平和を維持し、かくして日本自身は勿論、東洋諸國民の安全と繁榮を期するにある。日本はこの東洋の安定勢力たることを以て、日本獨自の使命と心得てゐる。それは恰もアメリカ合衆國がモンロー主義をもち、イギリスがエヂプト、パレスタイン、イラク、インド等に對してもつのと同樣である。

然らば日本は東洋平和の安定勢力であるといふのは如何なる意味であるかといへば、苟くも東洋の平和を維持し、これを確保する爲には、日本は東亞に於ける他の諸國と共に重大なる責任を

果す覺悟をもつといふことで、もし東亞に於ける他の諸國がこの使命を覺醒せざる場合には、日本は獨力でゝも之を決行する決意をもつといふ意味である。從つて第三國が自己本位の政策から東亞全局の平和と秩序の維持を無視するような行動に出づるか、又はその名目が財政的援助、技術的援助の何れであるにせよ、それが政治的意味を帶びる場合には、日本は東洋の平和を脅かすものとして、斷然これを排擊することを躊躇するものでない。所謂東洋モンロー主義なるものが日本の東洋政策であるのだ。

滿洲國　日本はこの使命を行はんがため、既に滿洲國を世界に卒先して承認したのみか

支那　同國の國礎が益ゝ鞏固となり發展するよう、現に極力援助しつゝある。從つて同國の獨立性を脅かすような事態の出現は、その如何なる性質のものなるを問はず、日本は斷然之を排擊し、同國を擁護する堅き決心をもつてゐる。

支那に關しては、日本は明治維新以來、同國と提携して『東洋人の東洋』を打立てゝ行こうとしたが、支那は自力を以て外力の侵攻を防ぐの力がないにも拘らず、日本の勃興を妬み、所謂以夷制夷の政策をもつて、日本の努力を邪魔して來た。一八九四年に起つた日清戰爭などは、實は

日本と支那が朝鮮半島を爭ふて起つたものではなく、日本はロシヤの勢力が朝鮮に侵入するを恐れ、これを未然に防止するため、日支共同して朝鮮の國政を改善させたいと支那に提議したが、支那は之に應ぜないのみか、外國の力をかりて日本を壓迫しようとするから、先づ朝鮮改善の邪魔物たる支那をたゝきつくる外なしと決心して、あの戰爭になつたものである。即ち日本の眞意は、支那を敵とするのではなく、寧ろ外國の脅威を除くことが目的であつた。

然るに日本と戰つて敗れた支那は、その後益々以夷制夷の政策を行ひ、日本に對しては、三國干渉によつて、遼東半島を還附させながら、露・佛・獨の三國に對しては、重要なる港灣を割讓した。ことこゝに至つては、日本は東洋人の東洋を打立てる爲には、支那を相手としては到底出來るものでない。日本は獨力を以て之を行ふの外なし決心せざるを得なかつた。日露戰爭はこの決心の現はれであつて、日本はロシヤを破つたといふよりも、東洋の平和は日本が獨力で擔つてゆくと決心したその決意の現はれであつたと見るところに重大なる意義をもつてゐるのである。

滿洲事變に關聯した日本と國際聯盟の爭ひなども、日本のこの堅き決心の表はれであつて、今日まで日本外交の根柢をなし、今後も亦同樣であるところの、日本は東洋平和の安定勢力である

といふ、日本の根本の使命を覺らざるところに、聯盟の認識不足があつた。

東洋モンロー主義と英米　勿論日本の主張する東洋モンロー主義は、支那の門戸を閉鎖するものでもなければ、支那に關する現在の各種條約乃至は取極めを破棄するものでもない。只だその不合理なるものは、須らく之を改めよと云ふまでゝある。それはアメリカ合衆國が兩米大陸に對してモンロー主義を主張するように、又イギリスがエヂプト、パレスタイン、イラク等に對して特殊の權利を主張するのと同樣である。英米が公然と之を主張し、然も不戰條約には、その適用範圍外として、公然とこれを除外してゐる以上、日本の東洋モンロー主義のみが非難さるべき理由はない筈である。

公平なる通商の確保　我が對外政策の第二の眼目は、公平なる通商の確保である。

急激なる人口の增加　急激なる人口の增加と國土の狹少並に資源の缺乏に苦しむ日本は、新領土の獲得が不可能であり、大規模の移民も許されない限り、商工業立國によつて國家の繁榮と國民生活の安定を圖るより外に方法はない。これが爲めには原料品と市場とを必要とする。こゝに於て滿洲國は日本の生命線となるのである。

だが滿洲は國防上からも經濟上からも日本の生命線であるとしても、それだけでは日本は立ちゆくものではない。なぜなら、滿洲は如何に之を開發しても、こゝ二十年乃至三十年の生命であるから、日本としては他にその活路を求めねばならぬ必要に迫られてくるからだ。

然らば日本は何れれの方面に活路を求むるか？　云はずと知れた海洋方面だ。即ち一歩を進めて世界的海洋的見地に立ち、海洋によつて我が國民經濟を培養することだ。日本の商品が屢々として世界の到るところに侵入しつゝあるのは、我が國民は獨り戰爭に於て强きのみならず、平和の戰爭に於ても亦優秀なる民族であることを證據立てるものではないが。況んや海洋國たる日本は、理想的なる天惠の環境にありて、偉大なる海洋發展世界的躍進性を賦與されてゐることも忘れてはなるまい。かの滿洲をもつて唯一の生命線だと考へるものは、更に活眼を開いて以上の諸點を熟考せねばならぬ。

この海洋經濟發展主義をとる爲には、萬邦を友とし、平和・共存共榮・門戸開放・機會均等の旗をふりかざして、各國民の鎖國的人種的根性を覺醒せねばならぬ。これが我が對外政策の根本義であり、日本が世界に對して誇ふところの一大貢献でもあるのだ。

日本國民は、滿洲事變以來の興奮した偏狹な考へから、もつと眼を見開かねばならない！

日本を責むる資格ありや

由來日本國民は平和を愛好する民である。彼等は國家の存亡が脅かさるゝ最後の場合でなければ劍を拔かない。これが二千五百有餘年以來の日本の傳統的精神であるのだ。日清戰爭もそうであれば日露戰爭もそうであつた。この精神は將來に於ても少しも變るところはない。

歐米に於ける一部の人士は、滿洲事變を目して、日本の侵略政策の現はれである、といつて非難したものだ。併しながらそうゆう非難をするものには、我々は先づ次の數問を試みる必要がある。今日飽和の狀態にある英米兩國は、如何なる手段を弄して、その國土を擴張したか？　彼等は自國の爲にはなしてもいゝが、日本はなしてはならないと主張しつゝありはせないか？　豐富な資源を以て惠まれた彼等は、己は滿腹をたゝきながら、日本や獨伊に對しては、原料品は愚か食物までもその供給を阻止しつゝありはせないか？

これ等の質問に對して滿足なる解答が得られない限り、彼等は日本を責むる資格はない。

最後に

更に我々は次の一問をも反問せねばならぬ。彼等の希求する世界平和なるもの